静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第19集

能　島　遺　跡

（本　文　編）

昭和60～63年度静清バイパス（能島地区）埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第19集

能島遺跡

（本文編）

昭和60～63年度静清バイパス（能島地区）埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

国道１号静清バイパス建設に伴う清水地区の埋蔵文化財発掘調査のひとつである能島遺跡の調査は、昭和60年度から62年度にかけて、発掘調査が行われたものである。

清水市北西の平野部の砂堆に位置する能島地区は、以前に磨製石斧の出土が知られており、昭和59年度に清水市教育委員会により試掘調査が行われた。その結果、現在の集落のある砂堆とその東西の水田地帯に遺跡の存在を確認した。この成果をもとに、本研究所では、現地調査２年４ヶ月、資料整理１年８ヶ月、計４年間に及ぶ事業を展開してきた。すでに、前年の昭和62年度には「図版編」を刊行しており、この本文編の刊行をもって４ヶ年に及ぶ調査を終了することとなった。

能島遺跡は、弥生時代から近世までのながい年代にわたり営まれているが、特に周溝墓を中心とする墓域は、弥生中期後半期に属するもので、形態の変遷、群構成、出土土器等の検討に値する内容をもち、それは静岡県内はもとより、東海地域における弥生墓制の良好な資料を提供するものであろう。

調査ならびに本書の作成にあたっては、建設省をはじめとした関係機関各位に多大の援助、協力をいただいた。調査の終了にあたり、関係各位に深謝を呈するとともに、ご多忙のところ本調査の一環として行った各種の分析等に玉稿をいただいた加藤芳朗、山口敏氏及び元興寺文化財研究所に深く感謝申し上げる次第である。また、調査及び整理に従事した本所員の労を多とするものである。

1989 年 3 月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所長　斎藤　忠

例　　言

1. 本書は静岡県清水市能島(のうじま)に所在する能島遺跡の発掘調査報告書の本文編である。
2. 調査は昭和60年～63年度静清バイパス（能島地区）埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部地方建設局からの委託をうけ、調査指導機関静岡県教育委員会・調査実施機関財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所で実施した。
3. 昭和63年度調査は、昭和63年4月1日から平成元年3月31日まで、資料整理、報告書作成作業を行った。
4. 調査は、静岡県埋蔵文化財調査研究所所長斎藤忠・調査研究部長山下晃の指導の下に調査研究2課長栗野克己・主任調査研究員佐野五十三が担当して実施した。
5. 本書で扱った遺物のなかには、昭和59年度に清水市教育委員会が行った試掘調査で出土したものも含めた。また、地元能島の望月金一氏が表採された石斧1点もあわせて紹介した。
6. 石製品の石質については、静岡大学名誉教授加藤芳朗氏に鑑定を依頼した。
7. 本書の執筆は特論を除き、すべて佐野五十三が行った。
8. 発掘調査資料はすべて静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
9. 本書の編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所があたった。
10. 遺構、遺物は下記の表に従って表記した。

遺　構（S）	遺　物（R）
A　柵	W　木製品
B　竪穴住居跡	P　土製品
D　溝	S　石製品
F　土　坑	M　金属器
H　掘立柱建物	B　玉　類
P　小穴（Pit）	E　その他
R　旧河道	土器は番号のみで符号なし
X　その他	

目　　次

序
例　　言
目　　次

第Ⅰ章　位置と環境 …… 1
第1節　位置と地形 …… 1
第2節　歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　調査の概要 …… 7
第1節　調査の方法 …… 7
第2節　調査の経過 …… 7
第3節　基本層序 …… 10

第Ⅲ章　遺　　構 …… 12
第1節　弥生時代の遺構 …… 12
A、周　溝　墓 …… 12
B、土　　坑 …… 33
C、　　溝 …… 46
第2節　平安～中世の遺構 …… 53
A、自然流路 …… 53
B、　　溝 …… 54
C、井　　戸 …… 60
D、掘立柱建物跡 …… 60
E、土　　坑 …… 62
F、性格不明遺構 …… 62
第3節　近世の遺構 …… 67
A、粘土採掘跡 …… 68
B、井　　戸 …… 69

第Ⅳ章　遺　　物 …… 73
第1節　縄文時代の遺物 …… 73
第2節　弥生時代の遺物 …… 73
A、土　　器 …… 73
B、石　製　品 …… 93
第3節　古墳時代及び奈良時代の遺物 …… 95
第4節　平安～中世・近世の遺物 …… 97
A、土　　器

灰釉陶器、緑釉陶器、土師器、山茶碗、輸入磁器、陶磁器 …… 97
B、土　製　品
瓦 …… 114
C、石　製　品 …… 114
D、木　製　品 …… 115
E、金 属 製 品 …… 115

第Ⅴ章　ま　と　め …… 118
第1節　能島遺跡の立地の特徴について …… 118
第2節　能島遺跡の周溝墓をめぐって …… 118
第3節　平安～鎌倉時代の能島遺跡 …… 124

第Ⅵ章　特　　論 …… 128
第1節　能島遺跡の礫層の地質学的検討 …… 128
第2節　清水市能島遺跡出土人骨について …… 134
第3節　木製品樹種鑑定報告 …… 135

挿 図 目 次

図1　能島遺跡位置及び周辺遺跡分布図 …… 2
図2　清水市域土地条件図 …… 4
図3　清水市域旧地形図 …… 5
図4　能島遺跡調査区位置図 …… 8
図5　グリット配置図及び年度別調査区域図 …… 9
図6　調査区土層柱状図 …… 11
図7　能島遺跡弥生時代遺構全体図 …… 13
図8　1号周溝墓実測図 …… 15
図9　2号周溝墓実測図 …… 16
図10　3号周溝墓実測図 …… 17
図11　4号周溝墓実測図 …… 18
図12　5号周溝墓実測図 …… 19
図13　6号周溝墓実測図 …… 20
図14　7、8号周溝墓実測図 …… 21
図15　9号周溝墓実測図 …… 22
図16　10号周溝墓実測図 …… 23
図17　11号周溝墓実測図 …… 24
図18　12、13号周溝墓実測図 …… 25
図19　14号周溝墓実測図 …… 26

図20　15号周溝墓実測図 …… 27
図21　16号周溝墓実測図 …… 28
図22　17号周溝墓実測図 …… 27
図23　18号周溝墓実測図 …… 29
図24　19号周溝墓実測図 …… 30
図25　20号周溝墓実測図 …… 31
図26　21号周溝墓実測図 …… 32
図27　22号周溝墓実測図 …… 33
図28　23号周溝墓実測図 …… 30
図29　24号周溝墓実測図 …… 34
図30　25号周溝墓実測図 …… 35
図31　26号周溝墓実測図 …… 36
図32　27号周溝墓実測図 …… 37
図33　B区周溝墓土器出土状況図 …… 39
図34　14、18号周溝墓土器出土状況図 …… 41
図35　B区弥生時代土坑実測図1 …… 47
図36　B区弥生時代土坑実測図2 …… 48
図37　C区弥生時代土坑実測図 …… 49
図38　C区弥生時代溝実測図 …… 45
図39　A地区全体図 …… 53
図40　A地区北壁土層模式図 …… 54
図41　能島遺跡BCE区平安～中世遺構全体図 …… 55
図42　B区平安時代遺構実測図 …… 57
図43　C区平安時代溝実測図 …… 58
図44　BC区井戸実測図 …… 61
図45　掘立柱建物実測図 …… 62
図46　BC区SX実測図 …… 63
図47　能島遺跡DF区遺構全体図 …… 66
図48　D区、F－45・46グリット粘土採掘跡実測図 …… 67
図49　D区、D－44グリット粘土採掘跡実測図 …… 68
図50　DF区井戸実測図 …… 70
図51　D区井戸SE03実測図 …… 71
図52　周溝墓出土弥生土器実測図1 …… 75
図53　周溝墓出土弥生土器実測図2 …… 76
図54　周溝墓出土弥生土器実測図3 …… 77
図55　周溝墓出土弥生土器実測図4、及び土坑、溝出土土器実測図 …… 78
図56　BC区包含層出土弥生土器実測図 …… 80
図57　周溝墓出土土器拓本1 …… 81
図58　周溝墓出土土器拓本2 …… 82
図59　周溝墓出土土器拓本3 …… 83
図60　周溝墓出土土器拓本4、及び土坑、包含層出土土器拓本1 …… 84

図61　ＢＣ区包含層出土土器拓本２ …… 85
図62　ＢＣ区弥生時代石製品実測図 …… 94
図63　ＢＣＥ区平安時代遺構、包含層出土土器実測図 …… 96
図64　各区包含層出土灰釉陶器実測図 …… 98
図65　Ａ区出土土器拓本及び実測図１ …… 101
図66　Ａ区出土土器実測図２ …… 103
図67　各区出土中・近世土器実測図 …… 105
図68　ＢＣ区出土瓦拓本 …… 114
図69　各区出土平安～近世石製品実測図 …… 113
図70　Ａ区出土木製品実測図 …… 113
図71　各区出土銭貨拓本 …… 116
図72　能島遺跡周溝墓の群構成 …… 120
図73　周辺地域の弥生中期の周溝墓 …… 122

特　論
図１　遺跡周辺の微地形図 …… 128
図２　Ａ区の黄褐色砂礫層（ｂ）と上位の砂層群（ａ）のクロスラミナの傾斜方向 …… 130
図３　クロスラミナとその生成 …… 130
図４　球形度と円磨度を組み合わせた図 …… 130
図５　礫（16～32㎜）の円磨度と岩質組成 …… 132

挿表目次

表１　遺跡地名表 …… 3
表２　周溝墓一覧表 …… 42
表３　弥生時代土坑一覧表 …… 50
表４　弥生時代溝一覧表 …… 52
表５　平安～中世土坑一覧表 …… 52
表６　平安～中世溝一覧表 …… 59
表７　平安～中世ＳＸ一覧表 …… 64
表８　弥生土器観察表 …… 86
表９　灰釉陶器・土師器観察表 …… 106
表10　出土銭貨一覧表 …… 117

第Ⅰ章　位置と環境

本能島遺跡についての自然的、歴史的環境について、図１～４を用いて、述べていくこととする。図１の遺跡番号は「静岡県文化財地図Ⅰ」1988の番号を踏襲し、図2、3のものも共通している。以上のことをふまえて各節の記述をすすめていく。

第１節　位置と地形

能島遺跡は、静岡県清水市能島59番地等の周辺に所在している。調査地点は現在清水市能島地内であるが、かってここは旧庵原郡高部村に属し、昭和29年清水市に合併された地区である。清水市街より北西へ約2㎞の地点にあたり、北東に富士山を望む。清水港に注ぐ巴川河口から直線にして約3㎞の位置である。

海に迫った急峻な山地を特徴とする日本の海岸の典型である姿を呈する静岡、清水市地域は、西を大崩海岸、東を薩埵峠に挟まれ、中間に有渡丘陵をもつ狭い平野部を有する。この平野部は、大きく安倍川の扇状地からなる静岡平野と、巴川の三角州として発達した清水平野からなり、この二つは生成要因を大きく異にしている。この平野の基盤となるのは、新第三紀系の静岡層群であり、これを洪積世の礫質堆積物や沖積世の泥質堆積物が覆っている。

能島遺跡の立地する清水平野の地形は、巴川の三角州として標高5～7ｍの低地が主体となり、7ｍの等高線は静岡平野との接合地域の奥まで入り込んでいる。このことは、清水平野の生成要因とも関連し、静岡平野北部の浅畑低地の泥層にも海棲貝類の化石が含まれ、ここまでが古折戸湾と呼ばれている（土1971）。この古折戸湾の範囲がこれからみてゆく清水平野の範囲に重なっているといえる。図２は東の清水市域の平野部であるがその地形分類は複雑な様相を呈している。大きく沖積化の要因を海と河川とに分けると、前者は砂堆で、能島遺跡の立地する地点を最奥部とし、海岸まで数列が形成されている。後者は、北の庵原山地、南の有渡丘陵からの河川により、扇状地、微高地を形成しそれらの間の低地には後背湿地が広がっている。しかし、砂堆の西側では扇状地、微高地の発達が弱く、図３の旧地形図をみても殆どが湿地帯で集落は点在する状態である。これは、河口と水源地の比高差が少ない巴川の土砂運搬の弱さに起因している。

第２節　歴史的環境

清水平野の遺跡の立地は地形の形成過程と大きなかかわりをもっている。図１～３図をもとに遺跡のあり方の概略をみる。

この地域の歴史は弥生時代から活発な展開がみられるようになるが、縄文時代の遺跡も庵原地区との境、低い丘陵上の午王堂山(71)、北の庵原山地縁辺部の向山(94)、市域の南、有渡山の麓の大曲(103)、杉田(122)、山崎(134)、上原(141）といった遺跡がある。これらの遺跡は有渡山麓に分布が集中している。図１には示していないが、縄文晩期の主要な遺跡である清水天王山遺跡がこのグループに含められる。またここからは最近の調査でも良好な資料が多量に出土している。このように遺跡は丘陵上と、その大部分は山地縁辺の扇状地上に立地している。一方、最近の調査例のなかには明確な遺構、包含層を伴っていないが、土器片、櫛等を出土する遺跡がみられる。

土器は能島遺跡の砂堆上から後期、堀ノ内式土器、また東の旧巴川の流路から中期の土器片が発見された。能島遺跡の西の長崎遺跡（128）（栗野他、1988）では汽水性シルト層から、また下野Ｂ地区（86）（中西他、1985）の旧河道から後期中葉の土器、土製耳飾りとともに漆塗りの櫛が発見されている。これらの遺物は原位置を保つものでないが、その後の弥生時代にも周辺には遺跡が営まれており、縄文時代の人々と低地とのかかわりを検討する資料を提供するものである。

弥生時代では現段階で最も古い土器を出土するのは、殿屋敷（102）（佐藤、1977）である。これは中期

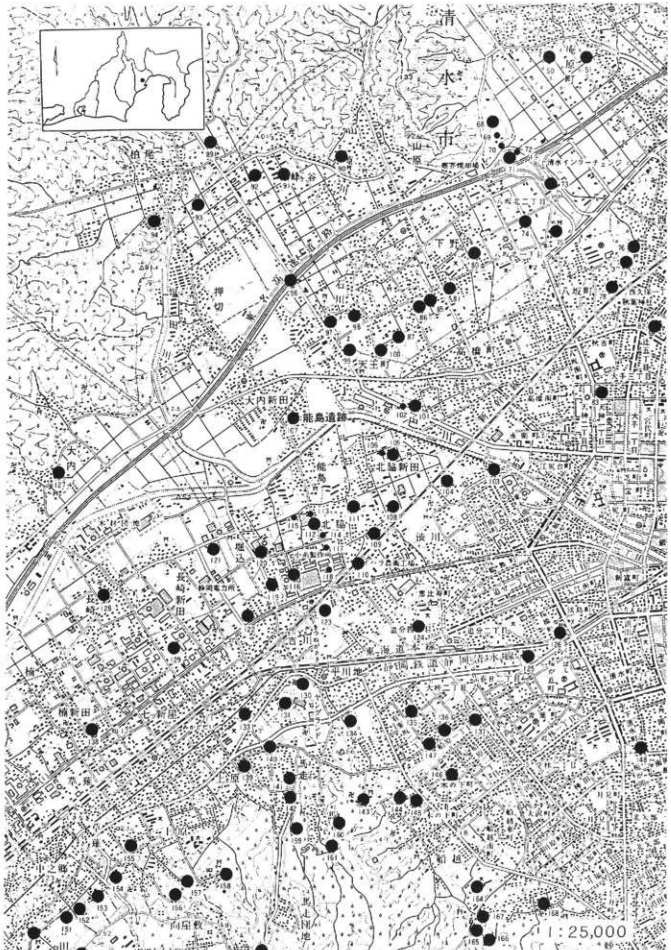


図1　能島遺跡位置及び周辺遺跡分布図

表1　遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	種別	遺構・遺物	番号	遺跡名	時代	種別	遺構・遺物
50	小里前	弥生、古墳	散布地	弥生土器、土師器、須恵器	117	沢渡古墳群	古墳	古墳	
51	下川原	古墳	〃		118	どんどん塚古墳群	古墳	〃	1号墳石室、3号墳舟形木棺
68	午王堂山Ⅱ	弥生、古墳	〃	弥生土器、土師器、須恵器	119	二つぼた古墳群	古墳	〃	
69	〃　第3号墳	古墳	古墳	前方後円墳、三角縁四神四獣鏡	120	堀込Ⅰ	古墳	散布地	土師器
70	〃　第1号墳	〃	〃	獣形鏡、ガラス小玉、直刀、剣	121	堀込Ⅱ	古墳	〃	須恵器、土師器、土錘
71	〃　Ⅰ	縄文～平安	集落	縄文土器、弥生土器、須恵器	122	杉田	縄文	〃	石錘、垂飾
72	〃　第2号墳	古墳	古墳	方墳	123	原添Ⅳ	弥生、古墳	〃	弥生土器、土師器
73	船山	弥生	散布地	弥生土器	124	北入江館	中世	城館	
74	太田切Ⅱ	弥生、古墳	〃	弥生土器、土師器	125	南　〃	中世	〃	
75	山の根	弥生	〃	弥生土器	126	東　〃	中世	〃	
76	秋葉山窯	古墳	古窯	須恵器	127	石井館	中世	〃	
77	秋葉山古墳群	古墳	古墳	2号墳前方後円、他は円墳	128	長崎	弥生	散布地	弥生土器、銅鏃、紡錘車
78	飯田館	中世	城館		129	奥屋敷		城館	
80	大坪	弥生	散布地	弥生土器	130	京塚古墳	古墳	古墳	
81	下野	〃	〃	弥生土器、杭、矢板状木片	131	千手寺	弥生	散布地	弥生土器
82	矢倉	古墳	〃	須恵器	133	荒古	弥生	〃	弥生土器
83	一本松	古墳	〃	須恵器	134	山崎	縄文	〃	縄文土器
85	下野（A地区）	弥生	〃	弥生土器	135	柿木田	古墳	〃	土師器、須恵器
86	下野（B地区）	縄文	〃	縄文土器、耳飾、櫛	136	鮎田Ⅱ	古墳	〃	土師器、須恵器
87	下野（C地区）	弥生、古墳	〃	弥生式土器、土師器、木製品	137	大沢川河床	古墳	〃	土師器、須恵器
89	鹿島古墳	古墳	古墳	横穴式石室、須恵器	138	上屋敷	中世	城館	
90	山原古墳	古墳	〃	横穴式石室、須恵器	139	禅門塚古墳	古墳	古墳	
91	蜂ケ谷第2号墳	古墳	〃	横穴式石室	140	上原古墳群	古墳	〃	円墳
92	蜂ケ谷第1号墳	古墳	〃	円墳	141	上原Ⅱ	縄文	散布地	縄文土器、打製石斧、石鏃
93	イセヤ塚古墳	古墳	〃	鏡	142	上原Ⅰ	縄文～古墳	〃	縄文土器、須恵器、石錘、石鏃
94	向山	縄文	散布地	御物石器	144	今泉Ⅰ	古墳	〃	土師器、須恵器
96	石川Ⅱ	弥生～古墳	集落	水路、弥生土器、土師器	145	今泉Ⅱ	古墳	〃	土師器、須恵器
97	石川Ⅰ	弥生	〃	弥生土器	146	四通田	弥生、古墳	〃	弥生土器、土師器、須恵器
98	飯田（判官大島）	弥生、古墳	散布地	弥生土器、土師器	147	鮎田Ⅰ	古墳	〃	土師器、須恵器
99	飯田（向原地点）	弥生、古墳	〃	弥生土器、土師器、須恵器	148	小滝	弥生、古墳	〃	弥生土器、須恵器、土師器
100	飯田(久保田地点)	弥生～中世	〃	弥生土器、土師器、陶質土器	151	西の原第4号墳	古墳	古墳	円墳
101	高橋館	中世	城館		152	西の原第1号墳	〃	〃	(瓢箪塚)、前方後円墳、周溝
102	殿屋敷	弥生	散布地	弥生土器	153	西の原第2号墳	〃	〃	円墳、刀剣
103	大drag	縄文～古墳	〃	縄文土器、石棒、土師器	154	西の原第3号墳	〃	〃	円墳
104	渋川館	中世	城館	土塁、堀、渋川氏館跡	156	東護古墳群	〃	〃	
105	北脇城	中世	〃	平城	157	東護古墳	〃	〃	須恵器、金・銀環、ガラス玉
106	風呂の段	弥生	散布地	弥生土器	158	首塚稲荷古墳	〃	〃	円墳
107	能島	弥生～近世	散、墓	周溝墓、溝、弥生土器、灰釉	159	堂山古墳	〃	〃	
108	北脇	古墳	古墳	土師器、須恵器	160	馬走横穴	〃	横穴	須恵器
109	原添Ⅲ	弥生～古墳	散布地	弥生土器、土師器	161	馬走古墳	〃	古墳	横穴式石室、須恵器
110	原添Ⅱ	弥生	〃	弥生土器、土師器	162	柚木屋敷	中世	城館	
111	村下	弥生～古墳	〃	弥生土器、土師器	164	天神山下	弥生、古墳	散布地	弥生土器、土師器、須恵器
112	吉川館	中世	城館		165	大日山古墳群	古墳	古墳	横穴式石室、須恵器、直刀、鏃
113	吉川Ⅱ	古墳	散布地	土師器	166	十八祖人神古墳	〃	〃	横穴式石室、須恵器
114	吉川Ⅰ	弥生～中世	散、城	弥生土器、土師器	167	宅地通	〃	散布地	土師器、須恵器
115	吉川Ⅲ	古墳	古墳	土師器	168	矢部館	平安	城館	
116	原添Ⅰ	弥生	集落	弥生土器、井戸、V字溝					

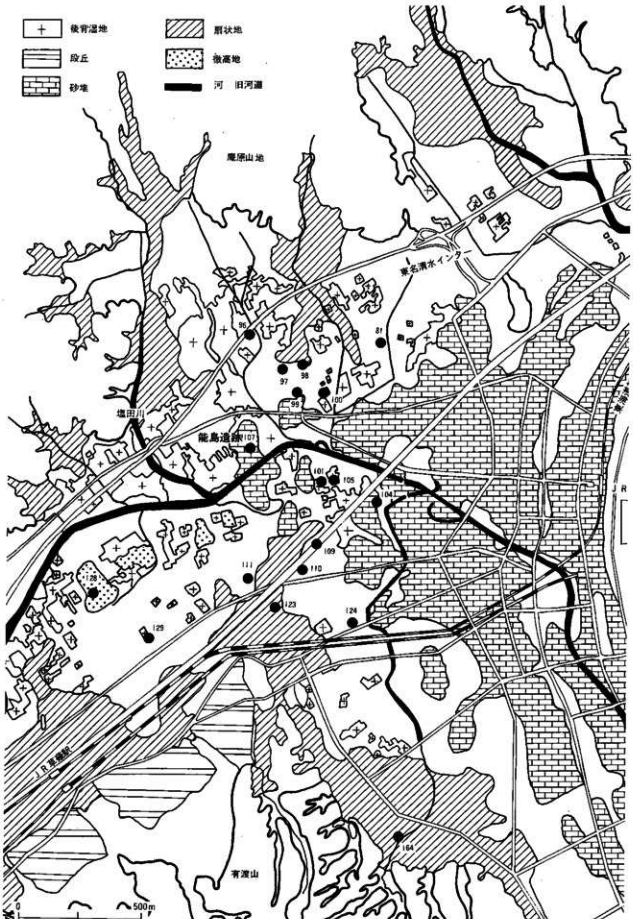


図２　清水市域土地条件図 ―国土地理院（昭和56年）をもとに作図―

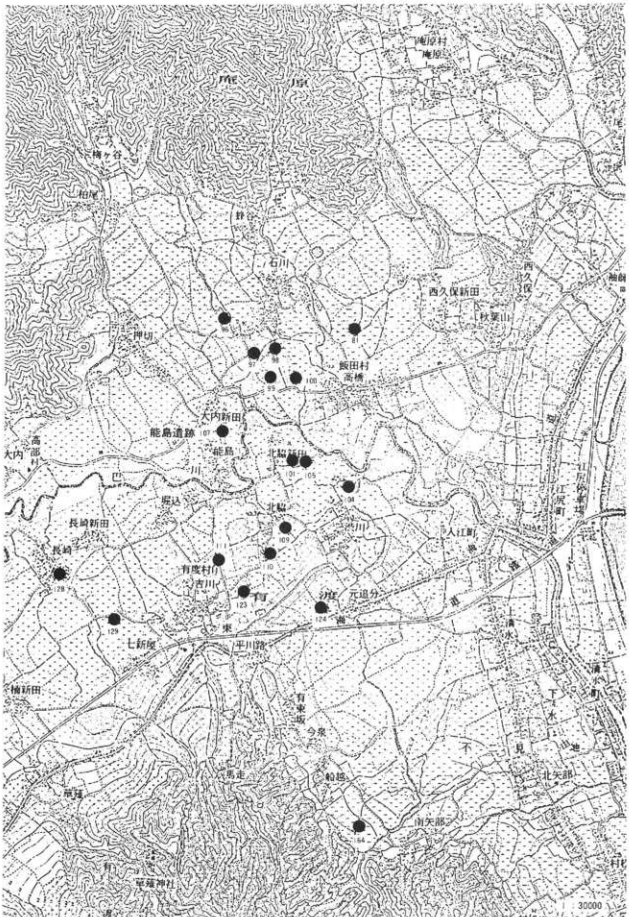


図3　清水市域旧地形図（明治22年陸軍陸地測量部より作成）

中葉の長頸壺を出土しているが工事中の発見で、一個体の土器のみのため詳細は不明である。中期後半に位置付けされているのは原添（116）（杉原、1948）であり、なだらかな扇状地が広がるこの周辺は静岡市の有東遺跡とならんで弥生中期後半の清水平野の主要な位置を占める遺跡と考えられる。この原添遺跡は小糸製作所の工場拡張工事の際、静岡大学により集落の一部と思われる範囲の応急の調査が行われ、井戸、多量の土器、木製品、石製品、及び桃、瓢箪等の自然遺物が発見された（古代の郷土、1962）。しかし、それらはいまだ資料化されていない。中期の段階で静岡、清水市域のなかでいくつかの拠点的な集落のまとまりがあったようであり、静清バイパスに伴う調査で静岡市川合遺跡では、遺構に伴っていないが磨製石斧とその製作過程を示す石製品群が出土し、また中期中葉の土器も周溝墓から出土している。一方、生産に関する遺跡として、川合遺跡の長尾川を挟んだ東に位置する瀬名遺跡では、中期後半の小区画の水田跡が発見されている。そして、静清バイパスの調査が行われている長崎遺跡（128）でもこの時期の土器が出土しており、中期の段階で積極的な低地への進出を示唆している。

後期の遺跡は、広範囲に分布が認められ、遺跡数の増大と登呂遺跡の水田にみられるように大規模・組織的な低地への進出を示している。特に庵原山地縁辺の扇状地に立地する石川（96、97）、飯田（98、99、100）、下野（81、85、87）といった遺跡があり、石川遺跡では昭和40年東名高速道路に伴う調査で鉄斧、灼骨をはじめ住居跡、水路跡が発見され、「飯田式土器」の標識遺跡である飯田遺跡では、昭和54年から57年にかけて静清バイパスの調査が行われた（中西他、1984）。その結果、円形周溝墓を含む数百基の土壙墓で構成される集団墓地が確認された。比較的居住の好条件をもつ立地の遺跡とは別に一方では、巴川の微高地にも集落が営まれたと考えられる。先にあげた長崎遺跡では、昭和34年に瓦粘土採集の際土器、土錘とともに銅鏃が出土している。

周辺の古墳をみると、庵原地区との境の午王堂山の丘陵上には「君宣高官」銘を有する三角縁神獣鏡を出土した午王堂山３号墳（前方後円墳）（69）をはじめ１号墳（70）、２号墳（72）が築かれている。また庵原山地の縁辺、梅ヶ谷の扇状地には環状乳画文帯神獣鏡を出土したイセヤ塚古墳（93）がある。これらは数基というわずかな単位であり、このことは数では多くはなるが静岡市域の北麓の丘陵上の古墳群にも共通している。一方有渡山の北、西麓をみると、谷田、伊庇谷、上ノ山といった群集する古墳群、横穴群が営まれる。清水市域の古墳群はこの有渡山麓の北にあたり、西ノ原（151、152、153、154）等の古墳がみられるが、一方東麓では馬走（160）のように存在するが、かなり希薄な分布を示す。この時期の集落など古墳以外の遺構で明確なものは今までのところ発見は少ないが古墳群の密集する周辺の平野部では、多量の土器を出土する神明原、元宮川というような遺跡（栗野・小島　1984、寺田・矢田・成島　1987）が知られている。

律令期の遺跡として清水平野のなかであげる遺跡はほとんどないが、最近行われた一連の静清バイパスの調査のなかで灰釉陶器を主体とした平安時代の土器群の資料が増加してきている。その殆どは遺構に伴ったものではなく、河川跡の出土が多い。能島遺跡でもこのような出土状況の灰釉陶器、緑釉陶器、土師器がみられるが、一方では砂堆上の遺構、包含層からも出土している。最近の清水市教育委員会の長崎地区の調査でも微高地上からの土器の出土が確認されている。しかし、遺構等はまとまったものはなく、不明確な部分が多い。

この清水市の平野部のなかで11世紀及びそれ以前から庵原、興津、清見関といった名称が文献で認められ、12世紀では、高橋宿、高部御厨、13世紀には在地の武士団の成長とともに、吉川、小島、入江といった郷名も登場する。このような背景のなかで特に交通、交易において、天然の良港である清水港及び、内陸への交通路の巴川河口とその流域は注目すべき地域である。中世の在地武士団の居館である高橋館（101）、吉川館（112）、渋川館（104）等はいずれもこの流域に分布している。

現在の清水市街地である海岸よりの砂堆地域の遺跡は鎌倉時代頃まではみるべきものはなく、戦国に入って以降であろう。

第II章　調査の概要

第1節　調査の方法

静清バイパス（能島地区）の調査対象範囲は道路建設に伴う調査という性格上細長く、巾40～50m、長さ530mにわたっている。このため便宜上、微高地と水田の境、道路、水路により調査区をA～Fの6区に分割した。またこれとは別に遺跡全体にわたる10×10 mグリットを設定したが、これの基準は道路建設用に打たれた杭を用いた。センターラインを東西軸とし、20mピッチの基準杭から90度振って南北軸としたものである。各グリットは調査区の東から1・2・3……、北からA・B・C……というように数字とアルファベットを組み合わせて表記した。この結果南北軸から東へ34度振った方向が磁北となった。

発掘調査は昭和59年度に行われた清水市教育委員会の試掘の成果を参考に、表土あるいは包含層上面までバックホウなどの重機で掘削し、その後作業員による人力での調査に移行した。層位的発掘を行い各遺構検出面ごとに遺構、遺物出土状況の写真撮影、実測作業を行った。尚、写真撮影には中型カメラ（6×7判、白黒、一部カラーネガ）、小型カメラ（35ミリ白黒、カラーネガ、カラースライド）を使用した。また遺跡遠景、遺構の全体写真撮影の一部として気球による空中写真撮影を行った。

平面図はグリットにそって1mメッシュを組み基本的に1グリットが2枚の図に収まるよう1/20で作成したが、遺構、遺物の状況により適宜1/10、1/100で作成した。

A区については、遺物包含層である礫層を含め4m掘り下げる計画を立てたことから調査の安全性確保のため調査区内に鋼矢板を巡らせた。同時に多量の地下水を汲み上げ、かつ地下水脈を断ち切る恐れもあるため周囲への環境影響調査も実施した。

第2節　調査の経過

静清バイパス清水地区に係わる埋蔵文化財発掘調査は、すでに清水市教育委員会によって清水市八坂～天王町の区間で太田切、下野、飯田の各遺跡の調査を終了し、その報告書が刊行されている。能島地区は以前、砂堆の西端で磨製石斧が発見されており、今回のバイパスに伴う調査の一環として昭和59年度に清水市教育委員会により試掘調査が行われた。その結果、人家をのせる砂堆上に弥生時代の方形周溝墓を検出し、その東側の水田地域の埋没河川跡から弥生時代～中世の土器、さらに西側の水田地域でも中世の山茶碗を出土した。

この結果に基づき、遺跡の取り扱いについて関係機関での協議の結果、調査対象区域を能島地区の東西530mとすることとし現地調査・資料整理・報告書刊行で3ケ年の全体計画が立てられた。調査は建設省中部地方建設局の委託を受け、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が主体者となり、静岡県教育委員会の指導により実施することとなった。委託契約締結後、昭和60年6月1日から現地での発掘調査準備に入った。

現地での調査の経過については、すでに「能島遺跡発掘調査概報　1986・1987」において一週間単位に述べている。従ってここでは、その調査経過の大略を記述することにする。

当初の全体計画は現地調査2年、資料整理・報告書作成1ケ年であったが、現地での発掘調査区域の関係から現地発掘調査を62年度まで1ケ年延長し、昭和63年度で終了する4年計画に変更された。

60年度は現在の集落の位置するBC区から着手し、東側水田面のA区、西側水田面のDF区が調査対象区であった。しかし、BC区ともに調査区を一度に発掘したわけでなく一部を次年度におくる形となった。天候に左右されやすく、排水対策により以上の配慮が必要な水田地域のADF区は基本的に稲の収穫が終わり渇水期に入った段階で行うこととし、60年10月下旬から61年上旬までA区、それと前後して

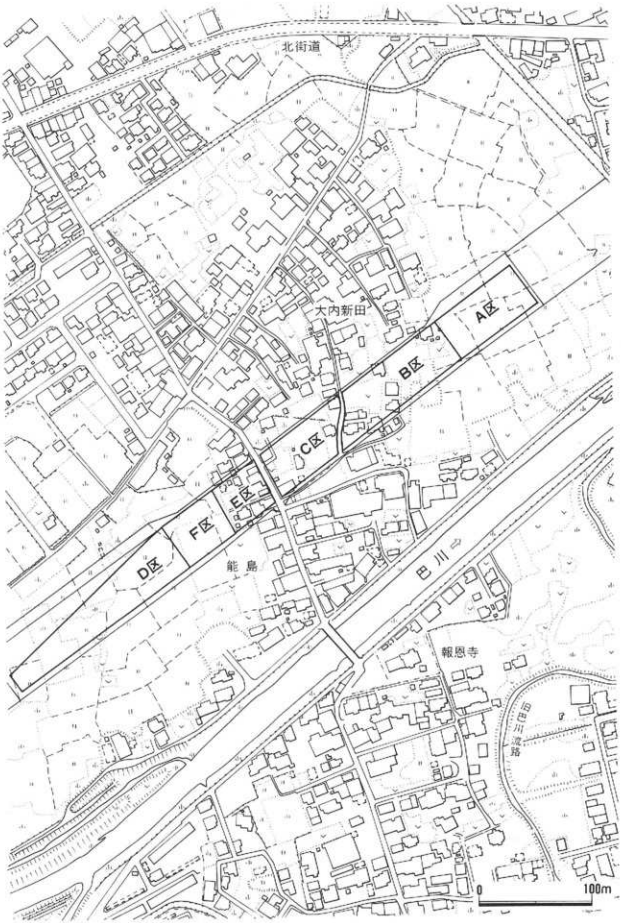


図4　能島遺跡調査区位置図

ＤＦ区に着手し61年３月上旬には現地調査を終了した。調査の結果、Ａ区は鎌倉時代の巴川の流路で縄文土器から山茶碗までの土器類、木製品、人骨等多様な遺物が出土した。ＢＣ区は平安～中世の居館跡の区画の溝、掘立柱建物跡、井戸、土坑、弥生時代の周溝墓を主体とする墓域を調査した。ＤＦ区は中世、近世の粘土採掘跡、井戸、溝を調査した。

昭和61年度はＢ区の大半の地域と、Ｃ区東、Ｅ区南の調査を行った。ＢＣ区は平安時代～中世では前年度と類似した遺構、遺物が認められたが遺構が散在的でかつ遺物の出土量が少なかった。

弥生時代では多数の周溝墓、土坑、溝が確認され大きな成果をおさめた。Ｅ区は遺構に乏しく僅かに溝、土坑が散在する状況であった。61年11月上旬にＢＣ区の調査が終了し、Ｅ区の調査に移行した。そしてＥ区も12月終了、埋め戻しも62年１月には完了して現地での調査を閉じ、その後室内での資料整理作業を行った。

昭和62年度の調査は今までの残りの区域のＣ区西、Ｅ区北の大半部分の調査であり、７月には終了した。調査の結果、平安時代～中世は溝、土坑が確認され、弥生時代の墓域はこのＥ区には及んでいなかった。

現地調査のなかで当研究所の広報、普及事業のひとつとして、発掘調査の期間中に年に一度ずつ計３回の現地説明会を開催した。また年度の調査報告として60年度、61年度に発掘調査概報を刊行した。報告書については、62年度事業のなかで「能島遺跡　図版編」を刊行し、63年度で本文編の刊行をみて、すべての調査にかかわる事業を終了した。

この間の調査体制をまとめると以下のようになる。

昭和60年度
所長・斎藤　忠　常務理事・八代龍一　調査研究部長・岡田恭順
調査研究２課長・平野吾郎　主任調査研究員・佐野五十三
調査研究員・佐藤雅明、杉沢正敏、飯塚晴夫

昭和61年度
所長・斎藤　忠　常務理事・八代龍一　調査研究部長・岡田恭順
調査研究２課長・平野吾郎　主任調査研究員・佐野五十三
調査研究員・佐藤雅明、飯塚晴夫

昭和62年度
所長・斎藤　忠　常務理事・大石保夫　調査研究部長・山下　晃
調査研究２課長・平野吾郎　主任調査研究員・佐野五十三
調査研究員・杉沢正敏

昭和63年度
所長・斎藤　忠　常務理事・亀山千鶴男　調査研究部長・山下 晃
調査研究２課長・栗野克己　主任調査研究員・佐野五十三

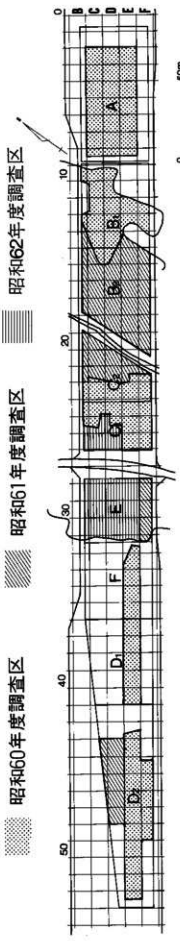


図５　グリット配置図及び年度別調査区域図

第3節　基　本　層　序

能島遺跡の立地は砂堆上のＢＣＥ区と、水田地帯であるＡ、ＤＦ区に大別される。この砂堆は縄文海進により清水平野の内湾底に泥層が堆積したのちに海退に伴って形成されたものであり、約１ｍの礫層が認められる。西のＤＦ区は、砂堆形成に伴い潟湖化しその後、後背湿地となったものと考えられる。一方、Ａ区は、旧巴川河道にあたっており、図３の明治22年陸軍陸地測量部作成の地形図にもこの周辺に巴川が流れている。西と東の水田は標高で比較すると、西は 3.6ｍに対し、東は約２ｍで1.6ｍ の比高差があり、地形の形成の差が端的に表れている。このような地形の形成過程を前提において基本層序を述べてゆくこととする。従って、全体に共通する土層は砂堆形成以前の貝を含む砂層であり、その上は地区ごとに相違している。

Ａ区は全体が埋没河川であり、河川埋没後は後背湿地化していることから、基本的な層序としては河川の覆土である砂礫、青砂と後背湿地の還元された青粘土からなる。細かくは第Ⅲ章２節平安～中世の遺構の部分で扱うこととする。

ＢＣＥ区の基本層序は、Ⅰ層・表土、Ⅱ層・黄褐色土・平安～中世遺物包含層、Ⅲ層・黒褐色土・弥生時代遺物包含層、Ⅳ層・礫層・基盤層の４層に分けられる。しかし、図６・土層柱状図にみられるように各地点で、層の厚さ、土層の状態などに相違が認められる。

まず、基本層序を明確に残しているのは砂堆の西側ＣＥ区であり、各層ともに均一な厚さで堆積するのに対し、東側のＢ区は、Ⅲ層・弥生時代遺物包含層を消失し、Ⅱ層下部の土層と本来のⅢ層の黒褐色土が混じりあっている状況であった。したがって、Ⅲ層の一部は周溝墓、溝、土坑といった遺構の覆土として残存しているのみであった。また、Ⅱ層では、ＣＤ区のように明瞭な黄褐色土がみられず、先の弥生時代の遺構と同じく、覆土としてその一部が確認されている。この状況は平安時代以降の活発な土地利用を伺わせるものであった。

西側の水田地域のＤＦ区では、粘土採掘跡がみられない40グリット周辺に良好な基本層序が確認されている。Ⅰ層・表土、Ⅱ層・黄褐色土、Ⅲ層・黒褐色粘土、Ⅳ層・灰白色粘土、Ⅴ層・青砂である。このⅢ、Ⅳ層は長い期間、潟湖であったこの周辺に形成され、瓦の原材料として使われてきたものである。この黒、灰白色の粘土の堆積は砂堆の東西端にも認められ、Ｅ区では約５ｍの位置に、黒色粘土層が認められるところから、この粘土が形成された当時の水位は、かなり高位置であったと考えられる。これらの粘土層には遺物が伴い、Ｂ区東端の斜面部の黒色粘土層直上（図64―13、図67―６）と、Ｄ区43グリットのⅢ層・黒色粘土層直上（図64―12・16・19・36、図67―５・７）の２個所から灰釉陶器、山茶碗が出土している。

図６は土層の柱状図とともに遺構の分布する位置を示した。砂堆の最も標高の高いのがＣ区であり、全体に西に高く東に低い地形のなかの、東へ緩く傾斜する位置に、遺構が認められる。Ｂ区は南壁の土層を図示したが、これに対し、北壁は26号周溝墓のある14グリット付近まで緩い傾斜が広がっている。遺構の分布と土層の関係は図６のようになるが、Ⅲ層のみられないＢ区では平安～中世の遺構の在り方が散在的であり、その後、地表面を掘削したり、削ったりといった行為が繰り返された結果、遺構として残る土地利用は行われなかったと推定される状況が土層からも認められる。

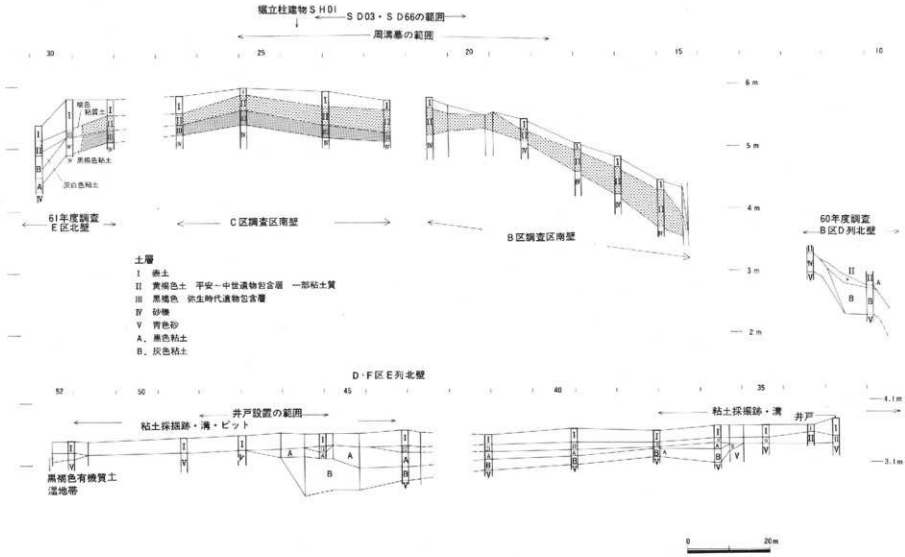

掘立柱建物ＳＨ01
ＳＤ03・ＳＤ66の範囲
周溝墓の範囲
30
25
20
15
10
6m
5m
4m
3m
2m
61年度調査
E区北壁
C区調査区南壁
B区調査区南壁
60年度調査
B区D列北壁
土層
I 表土
II 黄褐色土 平安～中世遺物包含層 一部粘土質
III 黒褐色 弥生時代遺物包含層
IV 砂礫
V 青色砂
A．黒色粘土
B．灰色粘土
D・F区E列北壁
52
50
45
40
35
4.1m
3.1m
井戸設置の範囲
粘土採掘跡・溝・ピット
粘土採掘跡・溝
井戸
黒褐色有機質土
湿地帯
0
20m

図9 調査区土層柱状図

第Ⅲ章　遺　　構

第１節　弥生時代の遺構

弥生時代の遺構はＢＣ区に分布しており、中期後半の墓域と考えられ、周溝墓を主体とし、土坑、溝を伴う遺構群である。以下にＡ）周溝墓、Ｂ）土坑、Ｃ）溝の順に述べる。尚、個々の遺構の具体的な計測値、特徴に関しては表３～５にまとめてみた。

Ａ）周溝墓（図８～34、表２）

周溝墓は計27基が発見されており形態、規模等様々である。ここでは、検出された状況についての所見を述べることとし、単位群のありかた、造墓の変遷等の分析はⅤ章のまとめで扱う。以下、表３の周溝墓観察表をもとに項目別に調査所見をまとめてみる。

周溝墓の形態について

周溝墓の形態については、検出面での平面の形状、溝の特徴からみた所見に基づいて判断した。従来からいわれている検出面の高低と平面形態との関係は、各々の溝が浅い場合には大きな問題点をもっている。例えば、18号の北西コーナー部のように極端に浅くなる例、また26号の南東コーナーのように東と西の溝が接するような例があり、各々検出面の高低により、前者は溝が浅い状況であれば連続せず、かつ後者も連続しないこととなる。しかし、四隅の切れるものは溝の底は平坦で立ち上がりはきついこと、形態が様々に変化するタイプは規模に比較して溝の巾が狭く溝の上端が内外ともに平行すること等を基準に形態の分類を行った。分類は以下のように整理される。（註１）

Ａ）四隅を切るもの。（17基）１～６、10、14、16、17、20～22、24。明確に断定できないが平面、断面の形状からこのタイプと思われるもの、９、13、15。

Ｂ）溝が何ケ所かで切れるもの。（３基）

Ｂ－１　１ケ所で切れるもの、18。

Ｂ－２　２ケ所で切れるもの、19。

Ｂ－３　３ケ所で切れるもの、26。

Ｃ）コの字を呈するもの。（１基）27。

Ｄ）溝が全周するもの。（３基）、11、12、23。

Ｅ）円形を呈するもの。（１基）25。

形態の推定されるものは27基中、25基であるがＢ類に関しては冒頭で述べた検出面と平面形態との関連からみて便宜的な根拠によっている。従って、Ｂ－３類の26号はＢ－２類に含められる可能性も大きい。

このように形態をみると、能島遺跡の周溝墓は溝のコーナー部でなく４辺のなかの１辺の中央部に陸橋のあるタイプを除き、従来からいわれているバラエティーはすべて揃っていることが認められる。形態別の在り方はＡ類が25基中17基と圧倒的に優位であり、ＢＣ類は少なく、ＣＥ類は１基のみである。このように能島遺跡での造墓活動の最盛期はＡ類の段階といえる。

形態のなかで注目されるのは、Ａ類のなかに溝が外に大きく張り出すものが認められることである。６号がその典型的な形態であり、４、16号にも顕著にみられる。しかし、一方では１、14、21、22号のように溝の太い、細いの差はあるが内外ともに溝の上端が平行となるものもある。溝の断面形態からみると、前者の大きく張り出すものは底平坦・壁直立の傾向があり、後者は底平坦・壁直立とＶ字状を呈するものがある。また前者のタイプは方台部をほぼ正方形とし、かつ溝内側の上端は直線を意識して造られている。後者は方台部が正方形（１、14号）か長方形（21、24号）を呈し、上端の線も不規則である。

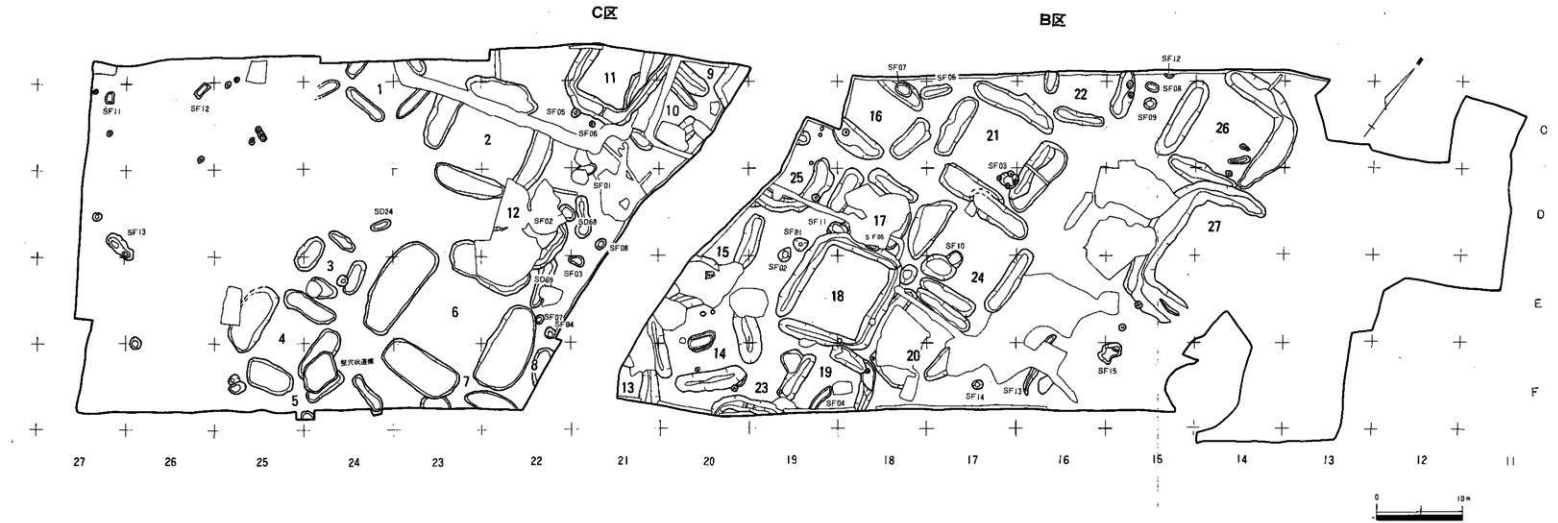


図7　能島遺跡弥生時代遺構全体図

周溝墓の規模について

表3に周溝墓の規模を示した。そのなかで方台部の巾と、最大巾として溝の上端からの巾を表示したが、これからの規模の検討には方台部巾の数値を用いる。低い墳丘を伴う墓という性格上、その分析の根拠としては視覚的な感覚から墳丘の範囲を規模として分析するのが妥当と考えたからである。

規模の検討にあたって方台部の一辺しか明確でないものは他の一辺もほぼ同じとして扱った。能島遺跡の周溝墓は最大で南北巾 11.1 m (27号)、最小で東西巾 3.8 m (3号) を計り、全体的には6～9 mの間に大多数のものが分布している。また、各々の周溝墓ごとの規模の傾向は大きく4つのまとまりに集中する。大きなものから10～11 m (6・27号)、8～9 m (14・21・24・18・26号)、6 m付近 (1・4・5・10・

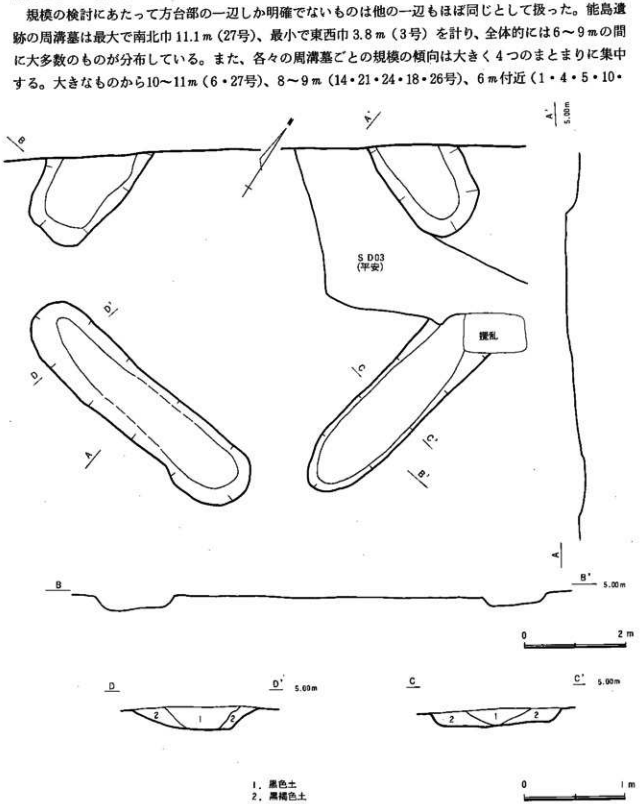


図8　1号周溝墓実測図

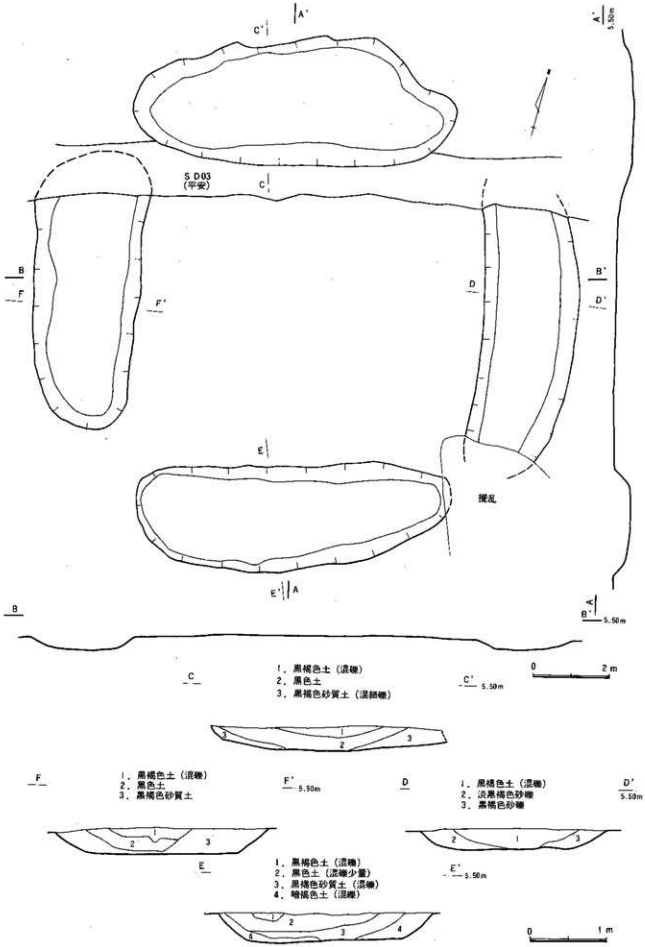

S D03
(平安)
攪乱
1．黒褐色土（混礫）
2．黒色土
3．黒褐色砂質土（混細礫）
1．黒褐色土（混礫）
2．黒色土
3．黒褐色砂質土
1．黒褐色土（混礫）
2．淡黒褐色砂礫
3．黒褐色砂礫
1．黒褐色土（混礫）
2．黒色土（混礫少量）
3．黒褐色砂質土（混礫）
4．暗褐色土（混礫）
5.50m
0 2m
0 1m

図9　2号周溝墓実測図

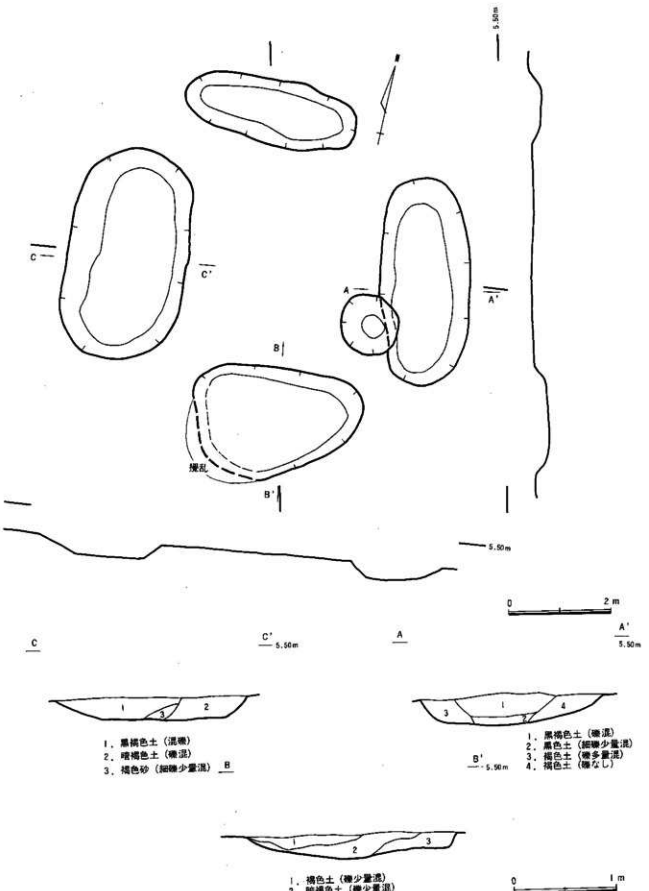


図10　3号周溝墓実測図

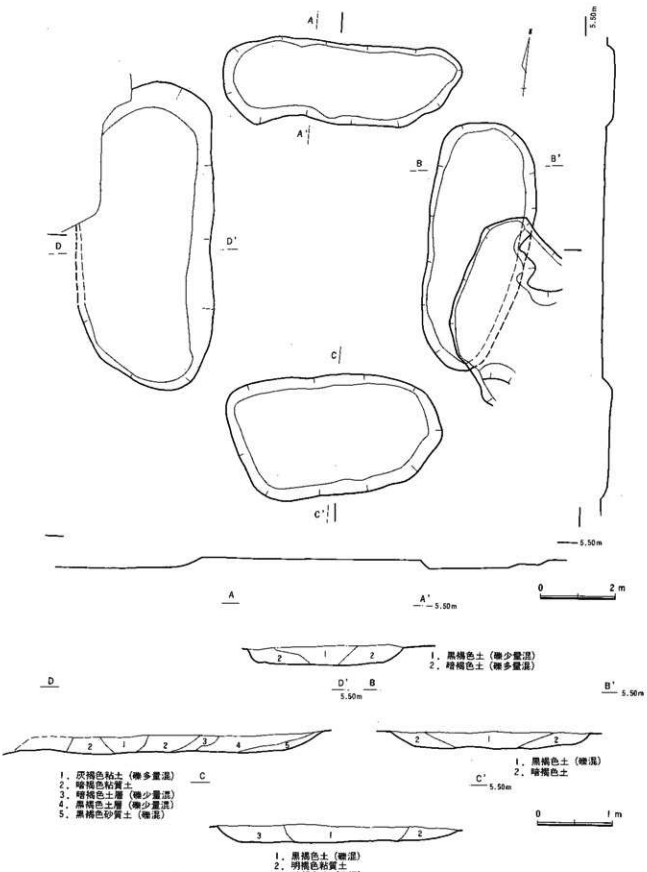


図11　4号周溝墓実測図

16・20・22・19・11号)、最小は4m付近の3号で一基のみである。このように中型の6～9mの範囲にもっとも多く集中することがわかる。

全体的な傾向をふまえた上で、同じ形態で造られた周溝墓相互ではどのようになるか以下で検討してみたい。

まず四隅を切るA類では最大から最小まで各々のまとまりに分布し、10～11m(6号)、8～9m(14・21・24号)、6m付近(1・4・5・10・16・20・22号)、4m付近(3号)のようになる。しかし、最も多い6m付近のまとまりは東西、南北の巾が明確なのは4号のみであり、2番目に大きい8～9mのまとまりに含められる可能性もある。しかし、圧倒的に多いのはこれら中間の規模のものであり多少の異動はあっても全体的な傾向は変化ない。これらのことからA類が本遺跡での周溝墓の主体を占め、かつ中間の規模が圧倒的であるといえる。

B類としたものは、2・3番目の中間のものにみられ、最大と最小のまとまりには認められない。8～9m(18・26号)、6m付近(19号)がそれにあたり、A類で多くを占めるまとまりのなかに属する。

C類は27号一基のみであり最大の規模をもっている。規模別のまとまりのなかに単独で存在し形態は勿論、配置も東端であり他のものとは大きく相違する。

D類の全周するものは、11・12号である。12号の規模については、図18のとおりごく一部が残存するのみで、推定値を求め難いが11号と同じ3番目程度の規模であろう。また11号はC類の27号のように他のものと相違し、9・10号の方台部を切ってつくられている。唯一円形を呈するE類の25号は方台部内径が約3mの小規模のものである。形態が異なるため規模別のまとまりのなかには含めなかった。

遺物の出土状態について

周溝墓に伴う遺物は、溝、主体部(14号のみ)から出土している。ほとんどは溝の埋没する最初の段階で入り込んだ黒色土からの出土であり、一括投棄されたものとして図16と30に示した10・25号の例が

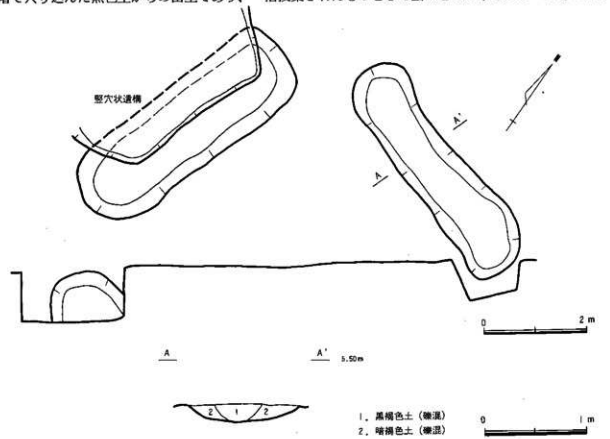


図12　5号周溝墓実測図

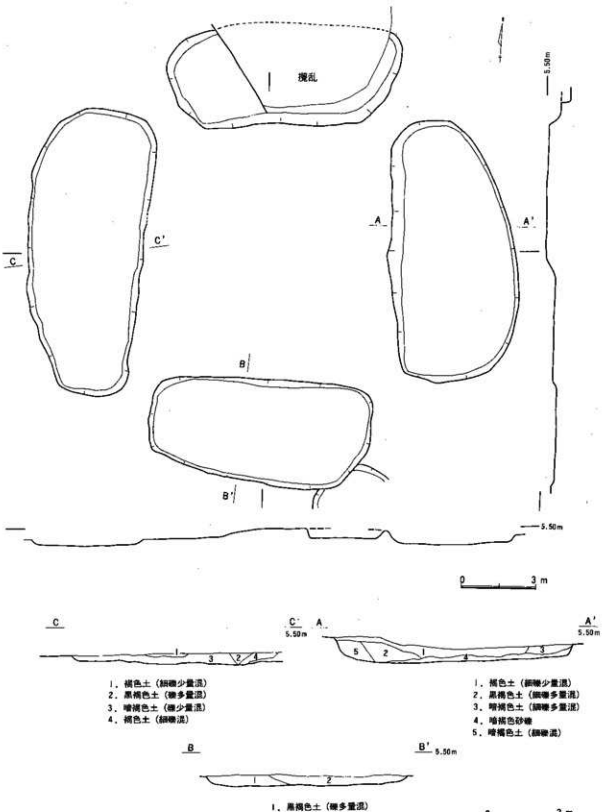


図13　6号周溝墓実測図

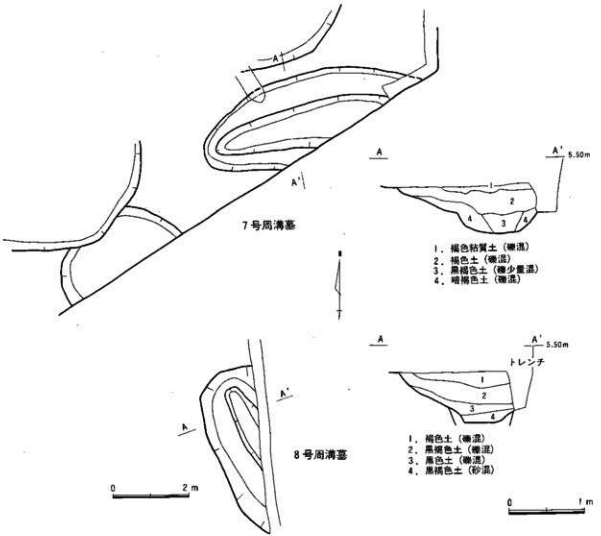


図14　7・8号周溝墓実測図

認められ、供献と思われるものには、9号（図15）、14号（図19）、15号（図20）、17号（図22）、21号（図26）、24号（図19）、27号（図32）の例がある。

このなかで供献土器（註2）と思われるものはすべて溝中の出土で、黒色土の最下部から個体としてまとまって出土している。供献土器とした根拠は個体としてまとまること、その出土状態からみて、溝が掘られてから短期間のうちに置かれている状態であることによる。供献土器の出土位置は15号東溝、22号東溝のように溝の中央部もしくはその周辺の場合もあるが、多くは溝の隅に置かれることが多い傾向にある。それは9号東溝、14号南溝、15号南溝、17号北溝などに認められる。また2個体がセットで出土するものもみられ、そのうち9号東溝、17号北溝からは中型の壺と小型壺の組み合わせがみられ、15号では南溝から比較的大型の壺、東溝からは小型壺が出土する。また一例であるが22号東溝からは、大型壺と高坏の組み合わせがみられる。供献土器の周囲には掘り方等の形跡はなく、平坦、及び傾斜する底に置かれた状態であった。

図33にはB区の周溝墓の土器が出土した地点をドットで示した。図34では多くの土器が出土する14、18号の例を垂直分布で示している。図34のなかには高い位置から出土する土器があるようにみえるが黒色土のレンズ状堆積の端の部分にあたり、中央部の低い土器と同一の層からの出土である。図33の意義については、まとめで扱うこととする。

土器の器種は壺が圧倒的に多く、甕は供献土器のなかには含まれないが一括投棄のなかには出土がみられる。また溝の黒色土から出土した土器破片のなかにも含まれてはいるが量的には少ない。

石製品も僅かに周溝墓に伴うものが発見されており、図62の1（6号）、2（20号）、3（23号）、5（14

号)、6 (15号)、7 (20号)、8 (25号)、9 (6号) などが出土している。石斧、砲丁、砥石と思われるもの等、点数は少ないが、種類は変化に富んでいる。

周溝墓個々に近接するものへの配置のパターンに、近接するが接していないもの、溝の一部が重複するもの、既設の周溝墓の溝、方台部まで切ってつくられるものの3類型がある。しかし、ここでは互いに溝を共有するものは認められない。3類型をまとめると以下のようである。

近接するが接していないもの (1・2号、3・4・5・6号、13・14号、6号、22号)。

溝の一部が重複するもの (9・10号、21・24・20号、26・27号、17・18・19号)。

既設の周溝墓の溝、方台部まで切ってつくられるもの (9・10号と11号の関係)。

切り合いで明確に時期差と認められるものは、溝、方台部まで切る9・10号と11号の関係であるが、溝が一部重複するものは、重なる範囲が狭い、切っている相互の溝が浅い等の理由で明確な判断はできなかったが現地調査の所見では、北から南への造墓が行われたようである。具体的には9号→10号、17号→18号→19号、21号→24号→20号、26号→27号の順に切り合いの関係が整理される。

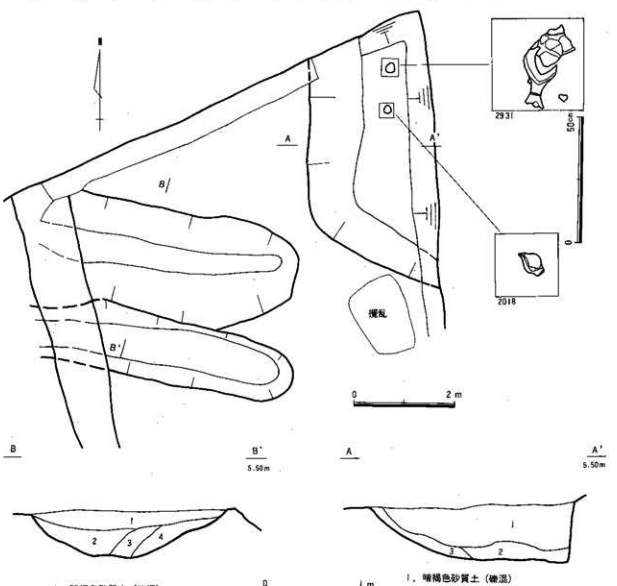


図15　9号周溝墓実測図

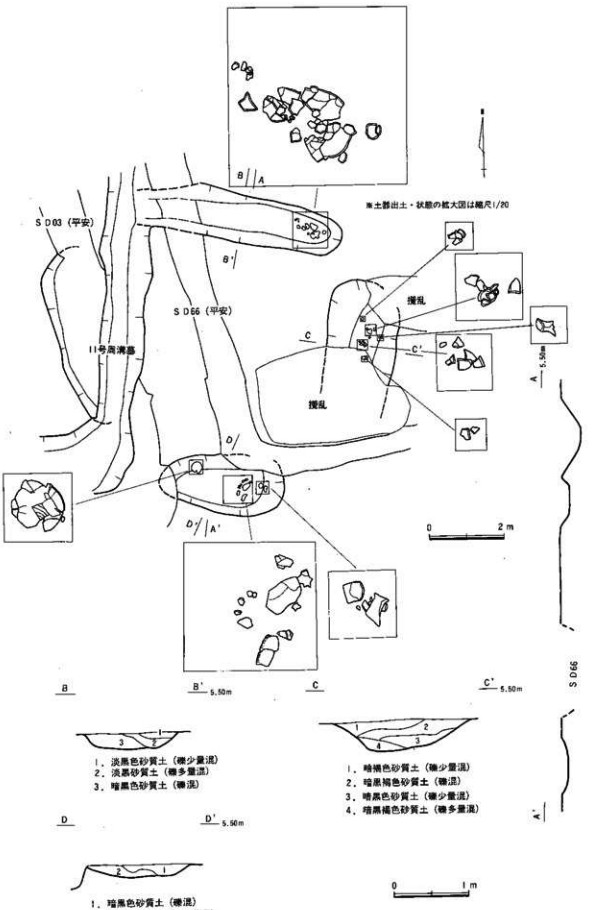


図16　10号周溝墓実測図

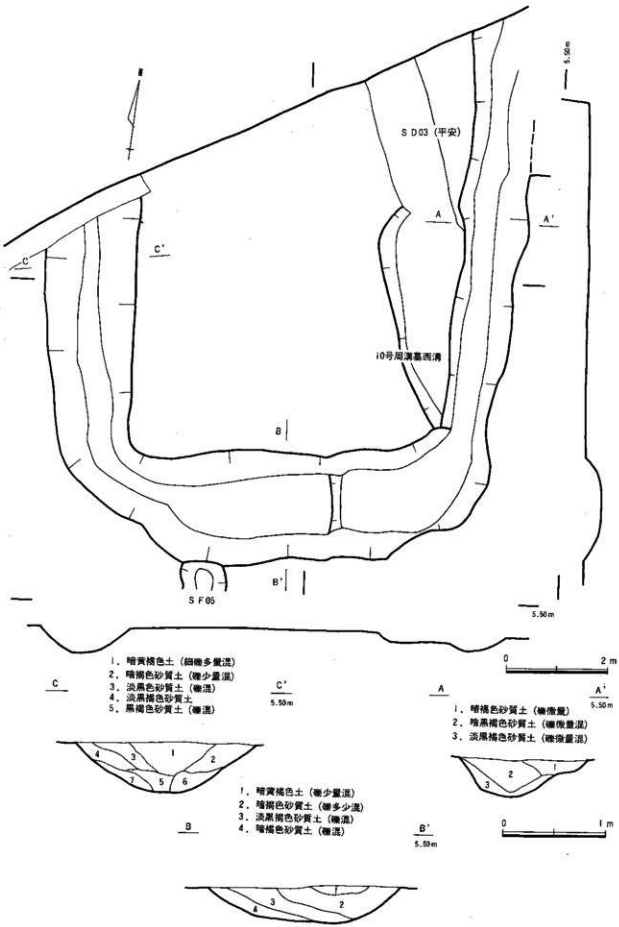


図17　11号周溝墓実測図

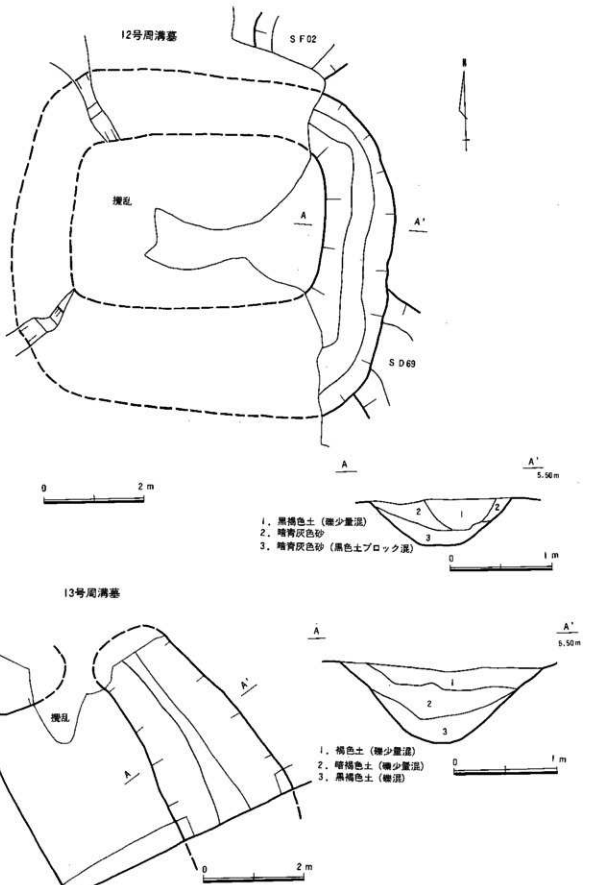


図18　12、13号周溝墓実測図

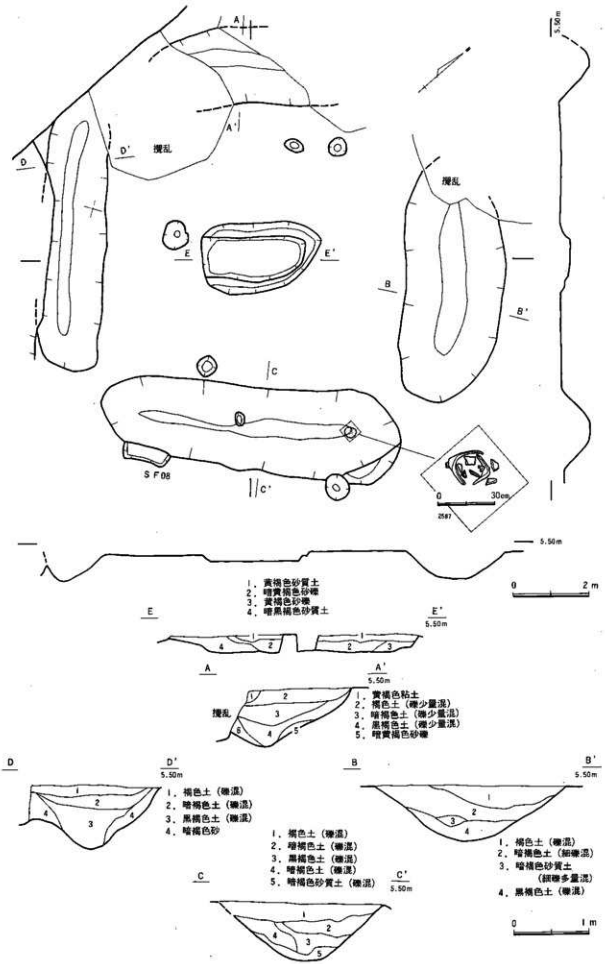


図19　14号周溝墓実測図

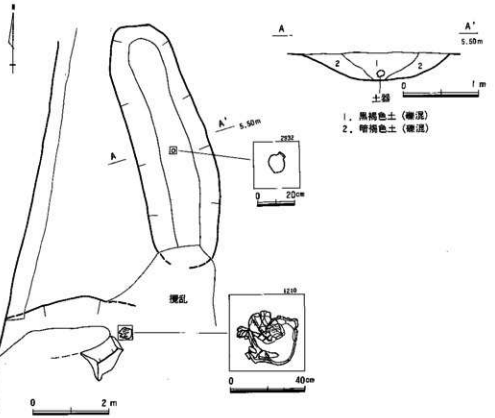


図20　15号周溝墓実測図

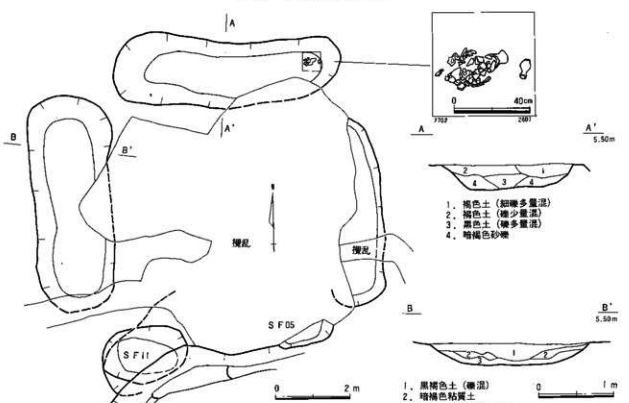


図22　17号周溝墓実測図

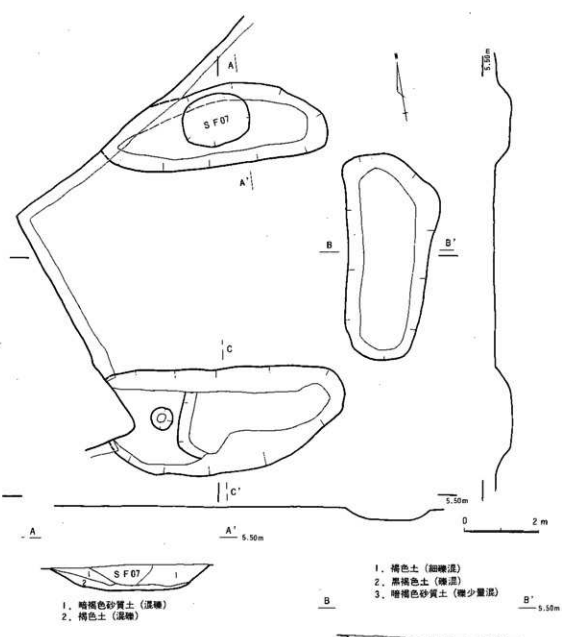


図21　16号周溝墓実測図

このようにみてゆくと、形態と造墓過程とは、四隅の切れるA類から全周するD類（9・10号→11号）、A類から1ケ所切れるB—1類、2ケ所切れるB—2類（17号→18号→19号）、3ケ所切れるB—3類から「コ」の字を呈するC類（26号→27号）というような墓造のパターンのあることが指摘される。

配置と形態及び周溝墓の方位とにも関連が認められる。それは形態はA類で近接して配置され、同一方位を示すもの（3・4・6号）。形態はA類で溝が重複し同一方位のもの（9・10号、21・24・20号）。形態は異なるが溝が重複し同一方位を示す（17・18・19号）といった事柄である。このような傾向は各々の周溝墓の群構成といったまとまりを考える指標となる要素である。

以上述べてきたことの他に、主体部の問題がある。結果として、14号の方台部の中央に木棺の痕跡を

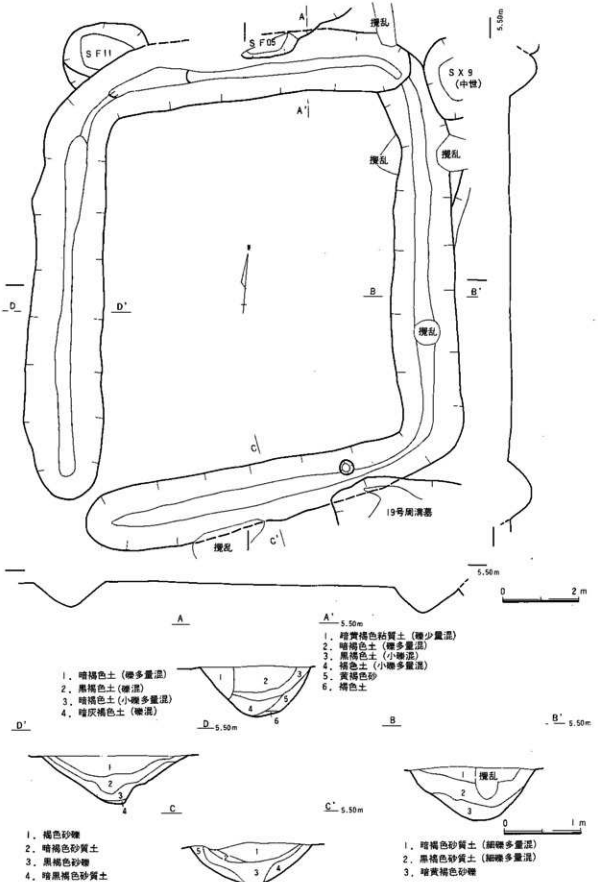


図23　18号周溝墓実測図

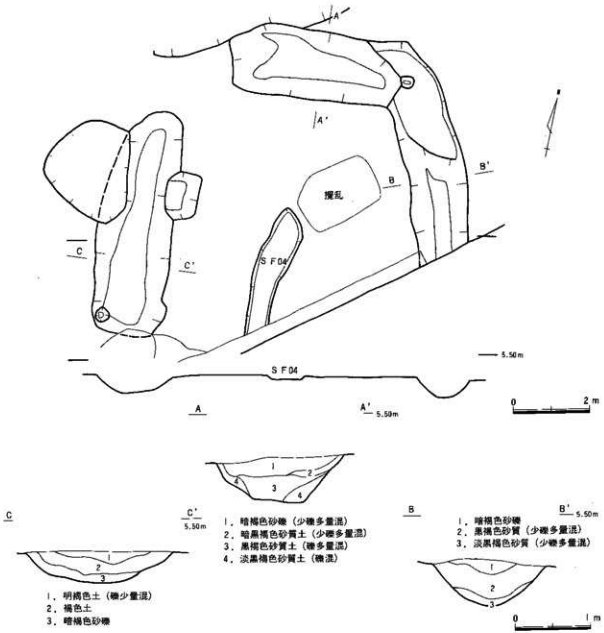


図24　19号周溝墓実測図

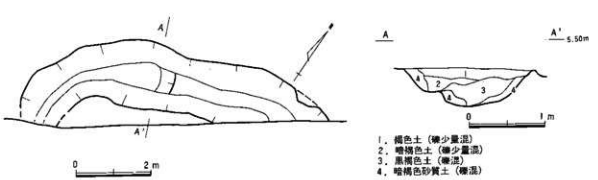


図28　23号周溝墓実測図

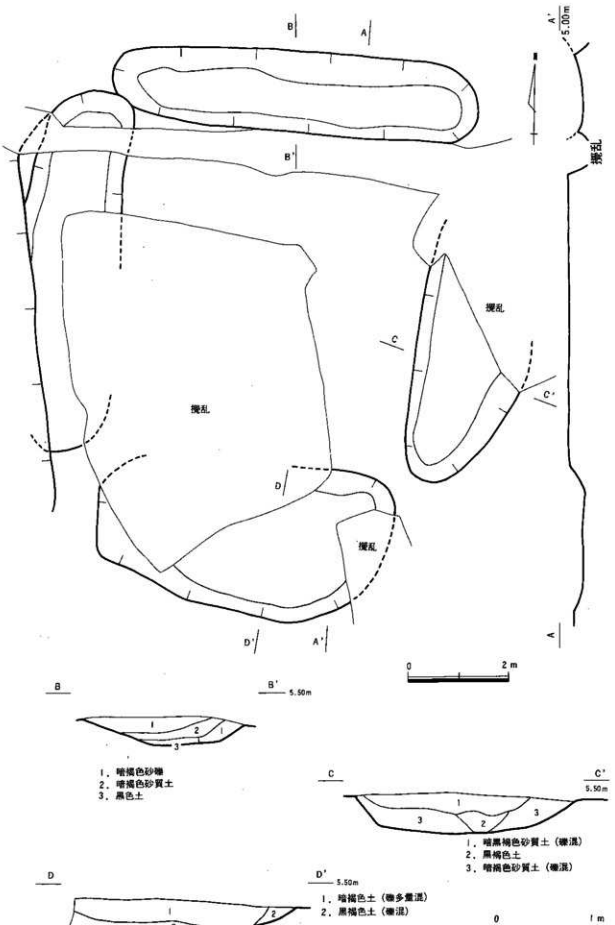


図25　20号周溝墓実測図

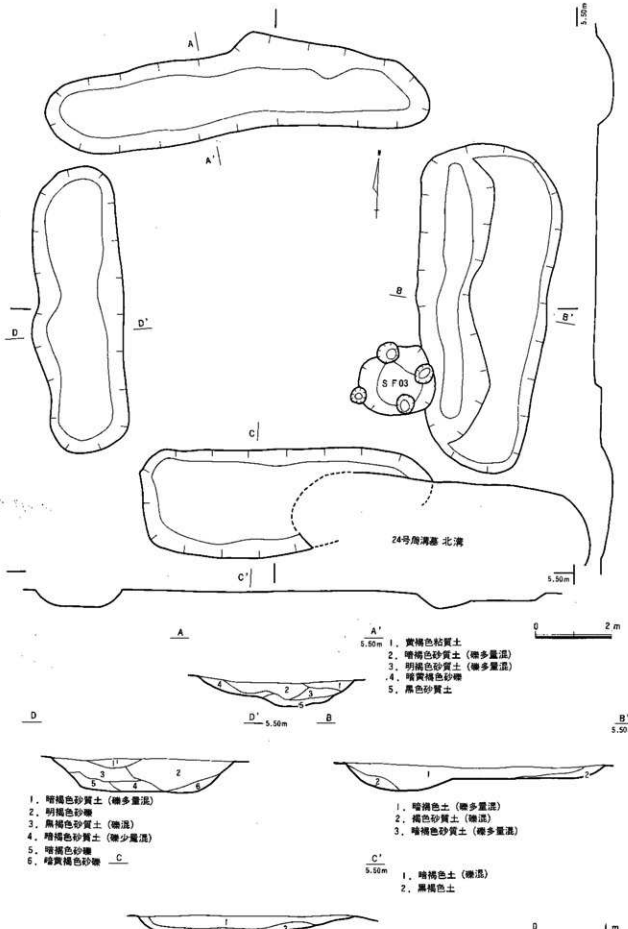


図26　21号周溝墓実測図

残すと推定される2段の掘り方をもつもの1基が発見されたのみである。他の周溝墓の方台部にはその痕跡はみられず、方台部以外の溝中にも土坑等の溝内埋葬の施設及び土器棺と思われるものの出土はなかった。従ってコの字のC類と、円形のE類を除いて方台部が方形を呈すると思われるものは14号のように方台部中央に単独の主体部をもっていると推定される。墳丘については明確に確認されてはいないが溝からの立ち上がりが認められたものが6号と、14号であった。いずれも調査区の壁の土層で確認したものであるが、弥生時代の包含層の黒色土と周溝墓の溝の覆土が極めて酷似しているため一応盛土と考えたが、溝が切り込んでいる土は弥生時代の旧表土の可能性も残されている。これら以外で調査区の境に接する周溝墓の土層ではこの状況はみられず、他の周溝墓にしても平面では墳丘らしきものは検出されなかった。

B）土坑（図35〜37、表3）

土坑はBC区の全域に分布しており、B区で15基、C区で11基が確認された。平面形態、計測値等は表3の弥生時代土坑SF一覧表にまとめた。

形態はB区、SF09（図36）のように円形を呈するもの、B区SF07・08（図36）のような楕円形のもの、溝状を呈する、B区SF06（図36）、C区SF03（図37）のように細長いもの、不整形のものまで多様な形態を呈している。また、図36のB区SF03のように、掘り方の壁にピットを等間隔に4つ伴っ

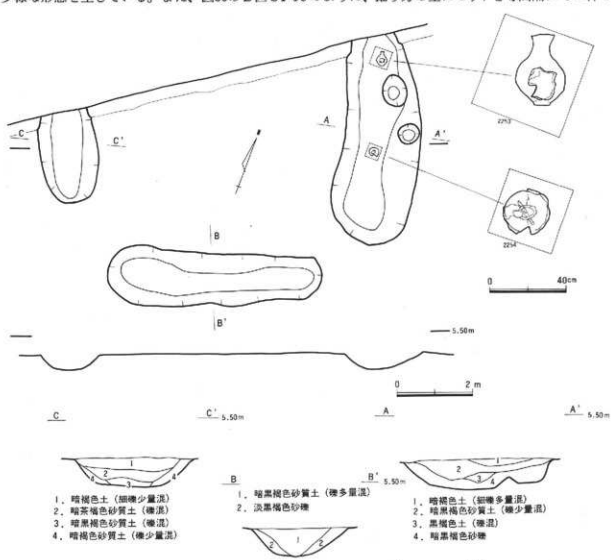
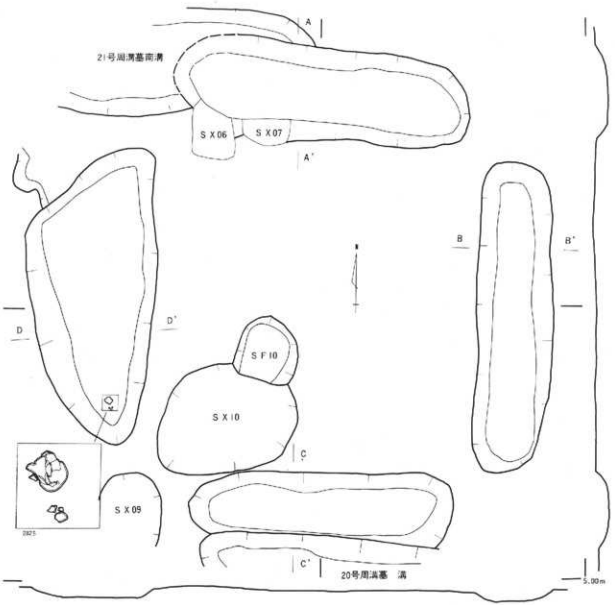


図27　22号周溝墓実測図



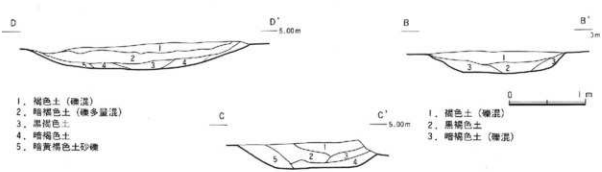


図29　24号周溝墓実測図

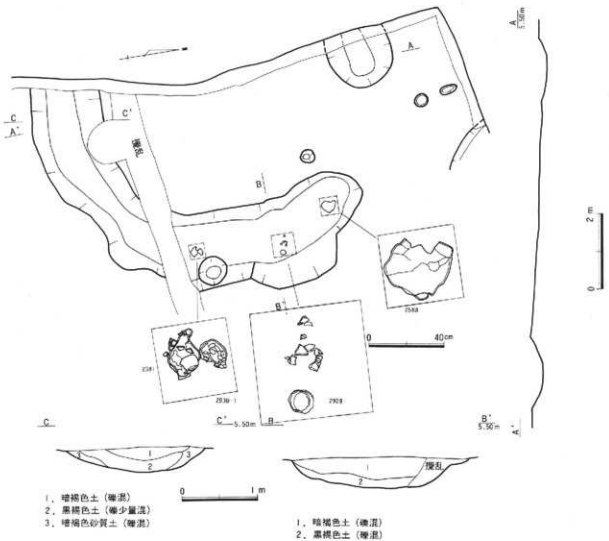


図30　25号周溝墓実測図

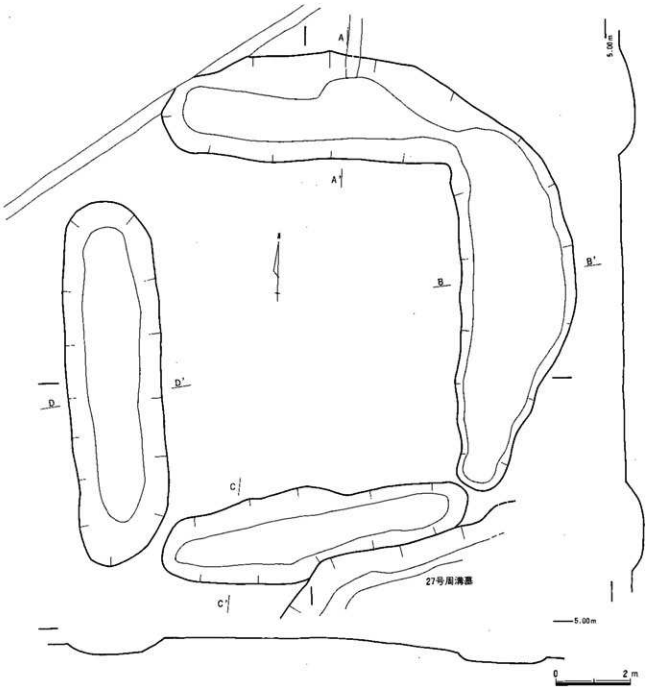
ているものもある。形態別の基数では、円形、楕円形のものが半数以上を占めている傾向である。

形状の知れるものから規模をみてゆくと、B区SF06は3.5ｍと最も長く巾は1.2ｍである。溝状に細長いもののなかでは最も大きい。また、B区SF13は、中央部が攪乱をうけているため、当初は別の土坑として扱ったが、全長7.5ｍの溝と考えるのが妥当と判断されたが、攪乱の範囲が大きく不明の点があるので現地での扱いを踏襲し土坑とした。このように扱ったものは他に、C区SF04・06がある。

円形、楕円形を呈するものでは、図37のC区06・07が径1ｍ以下の小型のものであるが、大型のものでは、図36のB区SF03、図37のC区SF01・02が径2ｍ、巾1.4ｍをはかる。1ｍ以下のものは少なく、多くは1.5ｍ～2ｍに集中している。このように比較的規模の差は少ない土坑群であるといえる。

土坑の覆土は多少の差異はあるものの、基本的には弥生中期の土器の包含層である黒色土で、これは周溝墓の溝が埋没する最初の段階で入り込んだ黒色土とも一致している。覆土の土層観察では、黒色土のなかに、砂、礫等の混入物が認められているが、埋葬とか祭祀等の人為的な状況を示すような形跡は認められなかった。出土した土器類も細片が大部分で、接合された土器は少ない。これらは全体的な土層の傾向であるが、なかにはこの傾向とは異なる状況を示すものが認められる。

長楕円形もしくは溝状を呈するC区SF06は、図35でみるように、1～3層は北から南にかけて傾斜しており上部の凹みに4層が堆積している。また遺物の出土位置と土層の関係をみると、土坑断面に土器出土位置を転記したB－B'のエレベーション図でみると、3層・礫混り暗褐色土層中に対応する位置



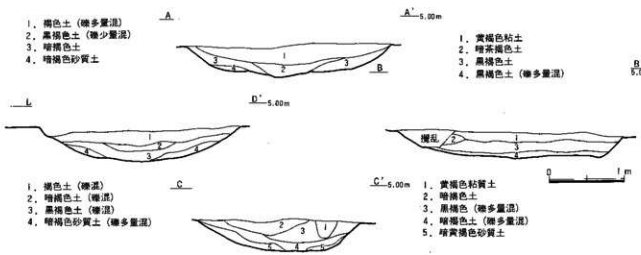
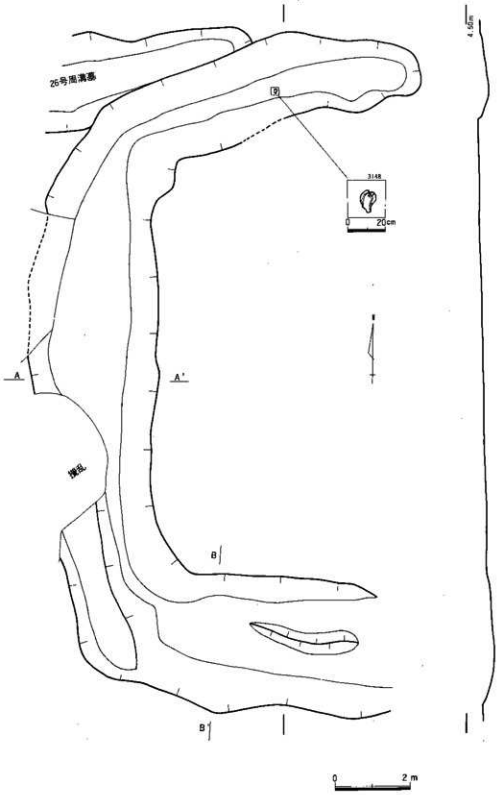
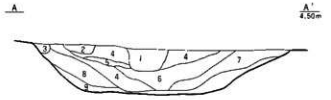
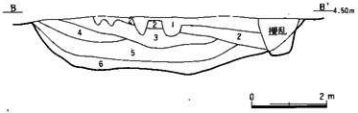


図31　26号周溝墓実測図





1．暗茶褐色土
2．暗茶褐色土（橙多量混）
3．暗茶褐色粘土
4．明黄褐色粘土
5．黒褐色粘土
6．黒褐色土（橙混）
7．黒褐色砂質土（細礫多量混）
8．暗褐色土（橙多量混）
9．暗黄褐色砂礫



1．明黄褐色土（橙混）
2．暗黄褐色粘土
3．明黄褐色粘土
4．暗黄褐色土（橙多量混）
5．黒褐色土
6．暗黄褐色砂礫

図32　27号周溝墓実測図

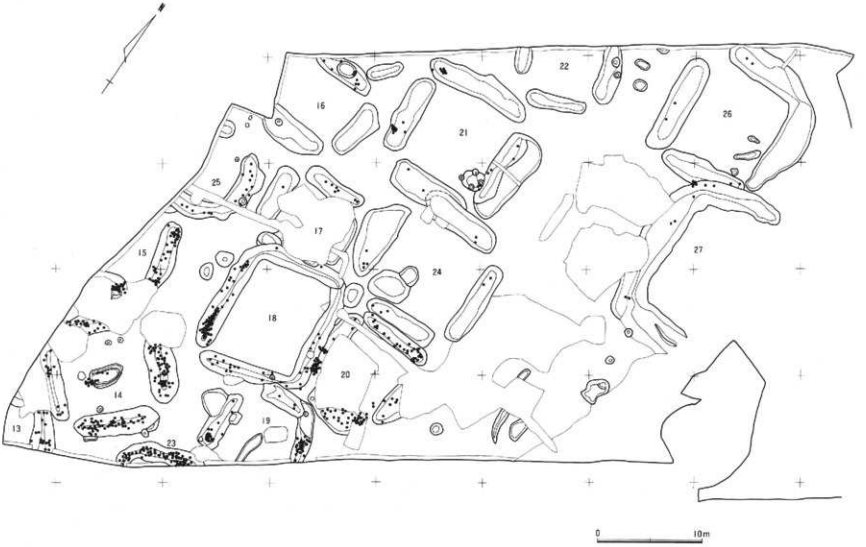


図33　B区周溝墓土器出土状況図

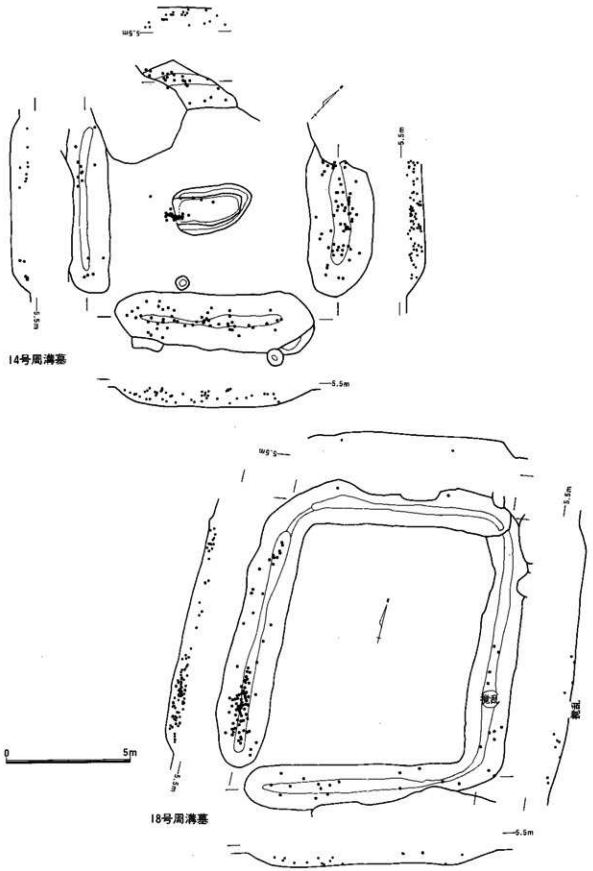


図34　14、18号周溝墓土器出土状況図

表2　周溝墓一覧表

註、規模は方台部の中央巾。数字の単位はm。（　）は推定値。

番号	挿図	図版	規模 方台部 南北・東西	規模 最大巾 南北・東西	形態 全体	形態 溝平面	形態 溝断面	土器出土状態 供献土器	土器出土状態 覆土中	重複関係	備考
1	8	15—1	6.2	8.6 8.9	四隅を切る。方台部ほぼ正方形。A類	細長い。	底は平坦。立ちあがりは丸味をもち壁は直立する。		ごく少ない。	SD03に切られる。	北側は調査区外。
2	9	15—2	9.11	14.2 14.4	四隅を切る。方台部やや南北に長い。A類	太く外へ弓状に張り出す。	底は平坦。立ちあがりは丸味をもち壁は直立する。	東溝の南寄りに壺1個体。	ごく少ない。	SD03、04に切られる。	北、南、西溝60年度調査、東溝61年度調査。
3	10	15—3	4.2 3.8	7.85 8	四隅を切る。方台部やや長方形。A類	北東溝は細長く、他の溝は太く外へ弓状に張り出す。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。		ごく少ない。		
4	11	16—1	6.58 5.73	12.25 (12)	四隅を切る。方台部長方形。A類	北溝は細長く、他は太く外へ弓状に張り出す。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。		少量	竪穴状の遺構に切られる。	
5	12	16—2	5.7	(5)	四隅を切る。A類	細長い。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。		なし	竪穴状の遺構に切られる。	南半は調査区外。
6	13	17—1、2	10.0 10.1	(18.35) 19.75	四隅を切る。方台部正方形。A類	太い溝。外側は弓状に張り出す。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。		多い。東溝に集中する。	7号の西溝を切る。	東、南、西溝と、北溝の1部60年度調査。北溝の残り61年度調査。東溝の土層で盛土痕跡確認。
7	14						深く、V字状を呈する。		少量	6号に切られる。	北、西溝の一部調査。
8	14						深く、V字状を呈する。		ごく少ない。		西溝の一部調査13号の西溝か。
9	15	17—3			四隅を切るタイプか？A類	太い溝か。	東溝は太くV字状、南溝は浅く平坦なタイプか。	東溝。小型壺2個体。	少量	10号に南溝が切られる。11号、SD66に切られる。	東、南溝の一部調査。全体の約1/4調査区外。

番号	挿図	図版	規模 方台部 南北・東西	規模 最大巾 南北・東西	形態 全体	形態 溝平面	形態 溝断面	七器出土状態 供献土器	七器出土状態 覆土中	重複関係	備考
10	16	18	5.73	8.4 9.55	四隅を切る。方台部北が長い台形状。A類	北、西溝幅長い。南、東溝は太く外側が張り出す。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。		北、南、東溝土器投棄。	9号を切る。SD03、66と11号に切られる。	
11	17	19—1	6.47	9.5	溝全周方台部南北に長い。D類	巾狭く、内外とも平行な溝。	V字状を呈する。		少量	9号、10号を切る。SD03に切られる。	北溝と、そのコーナー部は調査区外。
12	18			(6.5) (7.5)	溝全周するタイプか。方台部長方形か。D類	巾狭く内外平行する。	V字状を呈する。		なし	SD69を切る。	攪乱により北、南溝消失。
13	18				四隅を切るタイプか。A類	巾狭く細長い。	V字状を呈する。		東溝に集中。ごく少ない。		東溝北半攪乱で消失。大部分調査区外。8号がこの西溝の可能性あり。
14	19	20 21—1	7.57 7.95	(13) (12.4)	四隅を切る。方台部ほぼ正方形。中央に主体部。A類	巾狭く細長い。東溝やや太い。	V字状を呈する。	南溝東端壷1個体。	東溝中央に集中。西溝南はごく少ない。多量		東、西、北溝の一部攪乱で消失。
15	20	21—2、3			四隅を切る。A類	巾狭く細長い。	東溝は底平坦。南溝はV字状を呈する。	南溝東端大型壷1個体。東溝中央小型壷1個体。	南溝特に多く、東溝北も多い。少量	25号に切られる。	東溝の南端と南溝の大部分が攪乱で消失。%調査区外。
16	21	22—1	5.36	10.45	四隅を切る。方台部東西に長い長方形。A類	溝は太いタイプ。特に南溝は大きく外側が張り出す。	底平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。		北溝に集中。少量	SF07に北溝が切られる。	西溝未確認。西側調査区外。
17	22	22—2、3		9.6	四隅を切るタイプか。方台部正方形か。A類	巾狭く細長い。西溝はやや太い。	底平坦。立ちあがり丸味。壁は直立。	北溝東端壷2個体中、小型。	北溝に多い。少量	18号に切られる。	方台部、東、南溝と北、西溝の一部攪乱のため消失。
18	23	23	9.61 7.58	13.6 11.7	南西コーナーが切れる。方台部長方形。B—1類	巾狭く細長い。	深い部分はV字形。浅い部分は平坦で、急に立ちあがる。		土橋の北に集中。北西、東南もやや多い。多量	17、20号を切る。19号に切られる。	北、西溝深い。北西コーナー部浅い。北東コーナーの北側で、段差をもつ。

番号	挿図	図版	規模		形態			土器出土状態		重複関係	備考
			方台部 南北・東西	最大巾 南北・東西	全体	溝平面	溝断面	供献土器	覆土中		
19	24	23 24—1	6.5	9.9	二ケ所で切れるタイプか。方台部長方形か。B—2類	巾狭く細長い。	V字状を呈する。		西溝南端と東溝中央部に集中。少量	18号を切る。SF04に切られる。	南東コーナーから南溝調査区外。北東コーナーは段がついて浅くなる。
20	25	24—2	(6.2)	11.2 (10.15)	四隅を切る。方台部やや長方形か。A類	巾狭く細長い。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。		西溝南に特に多い北と南に散在。多量	18号に切られる。	溝、方台部撹乱で一部消失。
21	26	24—3	8.57 7.8	13.95 14.05	四隅を切る。方台部やや長方形。A類	巾狭く細長い。東溝太い。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。東溝は内側深く段がつく。	東溝壷1個体。	北溝西、西溝南に多い。少量	24号に切られる。	SF03に東溝の堆積土がのる。
22	27	25	6.7	10.15	四隅を切る。A類	巾狭く細長い。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。	東溝大型壷1個体、高坏1個体。	少量		東、西、北溝調査区外。東溝内にピットあり。
23	28				全周するタイプか。D類	巾狭く細長い。	V字状を呈する。		溝北側の東寄りが特に多い。多量		北溝のみ調査。他は調査区外。
24	29	26	8.83 8.51	14	四隅を切る。方台部正方形。A類	巾狭く細長い。西溝外側は強く張り出す。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。	西、南溝壷各1個体。	北溝東、東溝北、南溝西、西溝南に多い。少量	21号を切る。20号に切られる。	
25	30	27—3、4	内径約3m	9.82	円形。1ケ所で切れる。E類	巾狭く細長い。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。		投棄された土器群あり。溝東側	15号を切る。19点出土。	約½調査区外。
26	31	27—1、2	9.0 8.0	14.1 13.6	三ケ所で切れる。方台部やや長方形。B—03類	西、南溝細長い。東溝太く外側が張り出す。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。		南溝東寄りに多い。少量	27号に切られる。	北、南、西溝60年度調査。東溝61年度調査。
27	32	28—2、3、4	11.1	18	コの字。C類	西溝は外側が張り出す。	底は平坦。立ちあがりは丸味。壁は直立。	北西コーナー部小型壷1個体。	ごく少量	26号を切る。	東向き斜面に立地。溝の一部消失か。

から出土していることが理解される。このC区SF06は比較的他の土坑より土器の出土が多く、土層の状況からみて、土器とともに人為的に埋められた状態を示すものではないかと推定される。土坑の覆土の色調は黒色土が主体を占める色調であるため土層の観察が容易でなかったが、SF06は数多い土坑のなかでも顕著な差を持つものであった。

このような観察に基づき、土坑及び、後述する溝を含めた遺構群の在り方を、周溝墓との関連をも加味して考えてみたい。

これらの遺構群の分布の特徴は、周溝墓との重複は少ないこと、周溝墓の間に作られていること、東端では分布が薄く、斜面には造られないこと、西端では散在する程度の分布を示すこと等の事柄が上げられる。従ってこの事から、墓域の主体は周溝墓であり、土坑、溝の遺構群は付随的な意味を持っていると考えられる。しかし、一部には周溝墓との重複関係が認められるものがある。方台部に位置する土坑、溝は、21号周溝墓のSF03、19号のSF04、24号のSF10であるが、これらは出土土器に時期差が

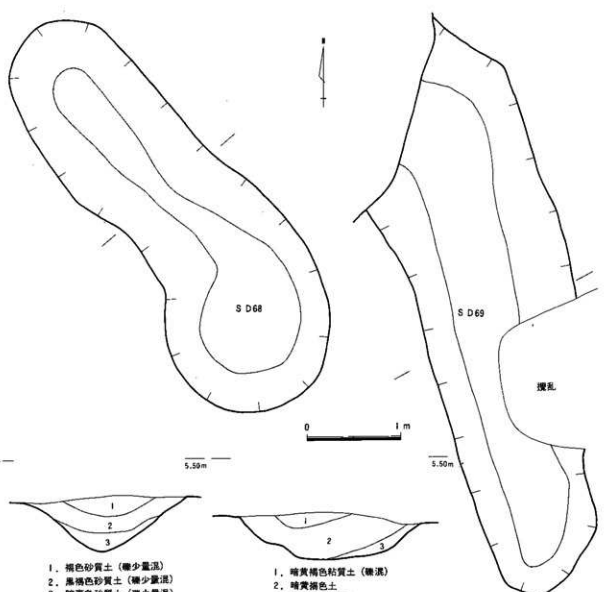


図38　C区弥生時代溝実測図

ないため、周溝墓の造墓後、墓域に対する社会的な規制が働いている段階で掘られたものでなく、19・21・24号周溝墓の造墓前に掘られたものと考えられる。逆の現象として周溝墓の造墓後に溝中に掘られたものが3例認められる。17号のＳＦ05、16号のＳＦ07である。このように周溝墓との重複関係も認められるが、先にあげた分布の特徴を弱めるような意義は持たないと考えられる。

このように、能島遺跡の墓域の形成は、周溝墓、土坑、溝ともに同時期に造営が開始されるが、土坑・溝は、個々の方形周溝墓の範囲を避けるように配置がされたものと推定される。土坑、溝は分布の傾向として、5ケ所のまとまりが認められるが、周溝墓の各々のグループとの関係は明確ではない。土坑、溝のまとまりは東から以下のように整理される。

B区

C—15グリット付近（26号と22号周溝墓の間）、ＳＦ08・09・12

F—16・17グリット付近（20号周溝墓の東）、ＳＦ13・14・15

C—17・18グリット付近（16号・21号周溝墓の北）、ＳＦ06・07

D—19グリット付近（14号・25号・18号周溝墓の間）、ＳＦ01・02・11

C区

C～E—21・22グリット付近（10号・11号・2号・12号・6号周溝墓の間）、ＳＦ01～08とＳＤ68・69

今まで述べてきたように、土坑、溝は周溝墓に対して、付随的な位置付けがされるものである。それは、時期的に併行し、周溝墓を避けるような傾向の配置がされること、形状・土層・遺物出土状態等の観察からは土坑墓といったような埋葬の対象とは考えられないことによる。

C）溝（図38、表5）

前項の土坑で溝の位置付けを行った。従って、ここでは溝について図表をもとにした所見をまとめることとする。

溝はC区に3基が認められる。表4に示したように、長さは2～6ｍ、巾は1ｍ～1.6ｍでその差が大きい。しかし、ＳＤ24は溝としたが、土坑で長楕円形としたものに形態が類似し、かつＳＤ68・69と比較して規模の差が大きい。溝、土坑の分類は便宜的なものであるが、全体的に土坑状の遺構が、溝状の遺構に対して優位な存在といえる。

分布は土坑と共存するような配置関係で、溝の独自性は認められない。

竪穴状遺構（図7）

C区F—24グリットには1基のみ、4号と5号周溝墓を切る竪穴状遺構が認められた。これは菱形の形状で、壁は直に掘り込まれている。南北に長く、5.5ｍを計り、東西長は3.6ｍを示す。検出面からの深さは約15㎝～20㎝で、覆土は周溝墓のものと類似しており差はあまり認められない。平坦な底にはピット等の掘り込みはなく、単純な竪穴状の掘り方のみ検出されている。

これとの類例は今回の遺構ではみられず、また土器片が少なく、覆土の類似性から弥生時代中期と判断されるが、性格等は不明である。

註1　撹乱とか一部調査区外で全体の形態が不明の場合、溝のコーナー部の形状とか、規模と形態が関連するＢ類、D類はそれも考慮して分類した。立地する基盤が砂堆上であり、いわば礫を主体とする河原のような状況であることも造墓当初の形態の推定を困難にしている。今回の形態の検討には自然的な諸条件による変化は除外した。

註2　溝内埋葬に伴うと思われる土器棺あるいは、胴部・底部穿孔土器等は認められなかった。また供献土器は壺及び、高坏1点に限られるが、一方、一括投棄の土器は甕を多く含んでいる。

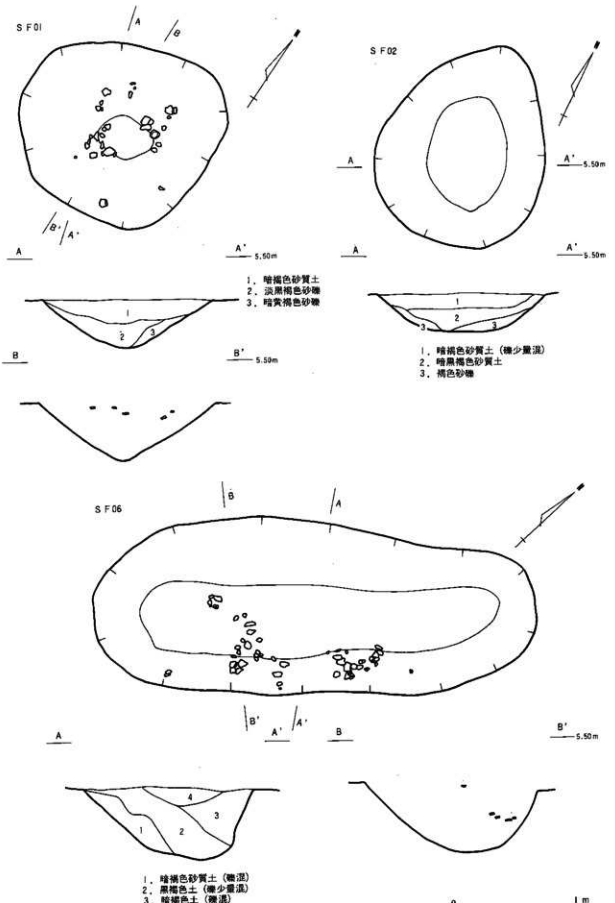


図35　B区弥生時代土坑実測図1

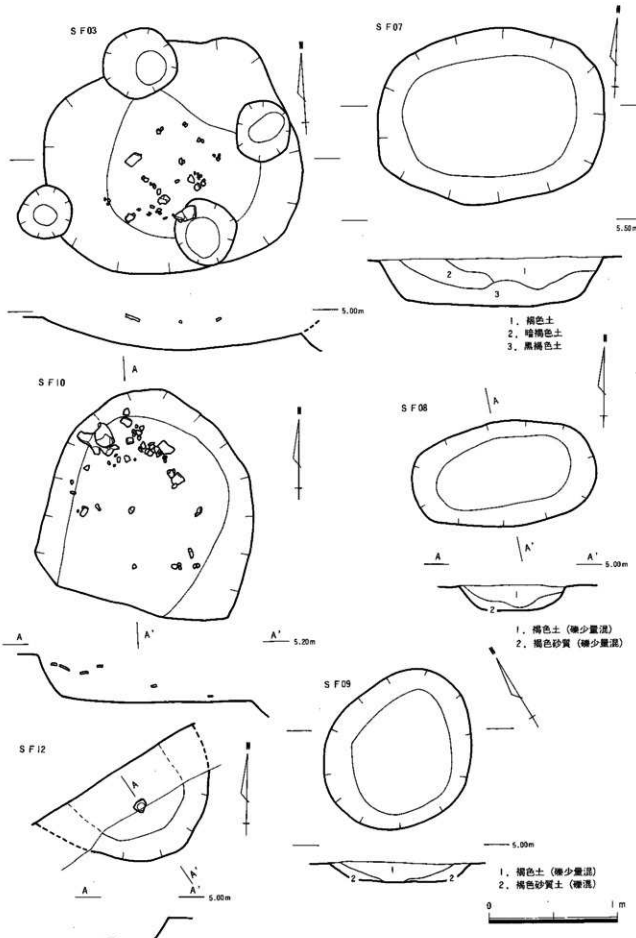
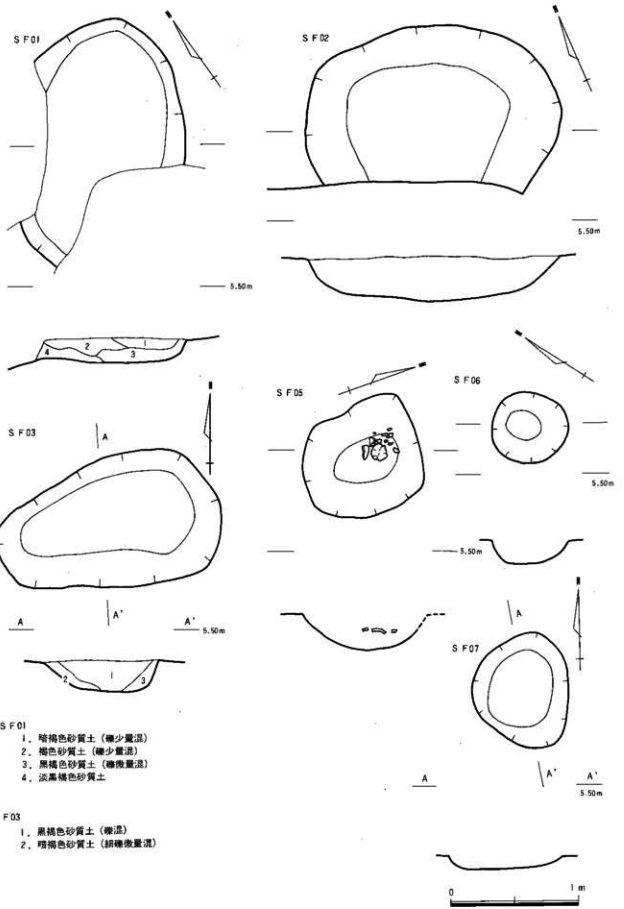


図36　B区弥生時代土坑実測図2



S F01
1．暗褐色砂質土（礫少量混）
2．褐色砂質土（礫少量混）
3．黒褐色砂質土（礫微量混）
4．淡黒褐色砂質土

S F03
1．黒褐色砂質土（礫混）
2．暗褐色砂質土（銅礫微量混）

0　1m

図37　C区弥生時代土坑実測図

表3　弥生時代土坑（ＳＦ）一覧表

註、グリットは土坑の所在する位置を表す。数字の単位はm。（　）は残存長。

番号	挿図	グリット	規模			形態		覆土	出土遺物	備考
			最大長	巾	深さ	平面	断面			
B区01	35	D—19	1.6	1.5	0.38	不整円	V字状	暗褐色砂質土	土器(壺、甕)すべて細片少量	
02	35	D、E—19	1.6	1.3	0.3	北は尖り南は丸い。不整形の円	壁ゆるやかに立ち上る	暗褐色砂質土暗黒褐色砂質土	甕多い。細片ごく少い。	
03	36	D—17	2.0	1.75	0.25	隅丸の方形状	底平坦壁ゆるやかに立ち上がる。	黒褐色土	少量出土	21号周溝墓東溝を切る。四つのピットをもつ。
04		F—19	(3.3)	0.9	0.1	溝状		黒色土		19号方台部にあり。
05		D—18	(1.55)	不明	0.7	不明	底平坦壁直立する	黒褐色砂質土を主体とし粘質土と砂礫層からなる。	少量出土細片	攪乱で南側がわずかに残るのみ
06	35	C—17 18	3.5	1.2	0.55	溝状長楕円形	底南側下る北はゆるやか南は直立気味	暗褐色土黒褐色土褐色土	黒褐色中に土器多い。土器多量出土	礫多く含む。
07	36	C—18	1.75	1.35	0.37	楕円	底平坦壁はゆるやかに立ち上る。	暗褐色土黒褐色土	ほとんどが細片土器多量出土	6号周溝墓北溝を切る。
08	36	C—15	1.45	0.82	0.2	楕円形	底平坦壁はゆるやかに立ち上る。	褐色砂質土褐色土		
09	36	C—15	1.10	1.12	0.16	円形	底平坦壁はゆるやかに立ち上る。	褐色砂質土褐色土	土器少量出土	
10	36	D、E—17	(1.7)	1.5	0.27	楕円形	底平坦壁はゆるやかに立ち上る。	暗黒褐色土	土器少量出土	中世のＳＸ10に切られる。
11		D—18 19	2.3	(1.35)	0.34	円形	壁ゆるやかに立ち上る	暗黒褐色土黄褐色砂礫	上面から土器多く出土	17、18号周溝墓との重複は不明確。
12	36	B—15 F—16	(1.4)	不明	0.23	円形	壁はゆるやかに立ち上る。	黒褐色土	器土少量出土	大部分未調査
13		E、F—16	7.5	0.8		溝		黒褐色土	土器ごくわずかに出土	中央部攪乱

番号	挿図	グリット	規模			形態		覆土	出土遺物	備考
			最大長	巾	深さ	平面	断面			
14		F—17	1.2	1.1		円形	壁ゆるやかに立ち上る	黒褐色土 礫多い。	土器少量出土	
15		F—15 16	2.7	1.6		不整形		黒褐色土		
C区 01	37	C・D —21	2.0	(1.4)	0.17	楕円形	底平坦 壁直立	暗黒褐色砂質土		攪乱で一部消失。
02	37	D—21 22	2.0	(1.2)	0.3	楕円形	底平坦 壁U字状	黒褐色土		攪乱½消失
03	37	E—21 22	1.75	(1.0)	0.35	楕円形 西半先細り	U字状	黒褐色砂質土 (礫混)		
04		E—22	不明	不明	0.3	方形か	壁ゆるやかに立ち上る	黒褐色土	土器少量出土	一部調査区外
05	37	C—21	0.9	0.85	0.28	方形	V字状	黒褐色土		11号周溝墓に切られる。
06	37	C—21	0.6	0.55	0.18	円形	U字状	黒褐色土		
07	37	E—22	0.9	0.75	0.36	楕円形	底平坦 壁立ち上りきつい。	黒褐色土		6号周溝墓の東溝に接する。
08		D—21	1.25	0.58	0.21	楕円形	U字状	黒褐色土	土器片わずか出土。	
11		C—27	1.4	1.0	0.07	隅丸長方形	浅いため不明	黒褐色土		
12		C—26	1.85	1.0	0.06	長方形	浅いため不明	黒褐色土		
13		D、E —26 27	3.7	1.55	0.71	長楕円形	壁は底からゆるやかに立ち上る。底2ヶ所凹む。	黒色土		

表4　弥生時代溝（ＳＤ）一覧表

註、グリットは溝の所在する位置を表す。数字の単位はｍ。（　）は残存長。

番号	挿図	グリット	規模			形態		覆土	出土土器	備考
			最大長	巾	深さ	平面	断面			
C区 24		D−24	2.34	0.97	0.2	長さ短い長楕円	U字状	黒褐色土黒色土		
68	38	D−21	4.8	北半1.4 南半1.75	0.33	南半やや太い。	V字状	褐色砂質土、黒褐色砂質土		
69	38	E−22	（6.25）	1.65	0.63	北端で曲る	U字状	暗黄褐色砂質土		

表5　平安〜中世土坑一覧表

註、グリットは土坑の所在する位置を表す。数字の単位はｍ（　）は残存長

番号	挿図	グリット	規模			形態		覆土	出土土器	備考
			最大長	巾	深さ	平面	断面			
01		C区 C、D−23	1.9	1.05	0.21	長楕円形	底平坦壁直立	褐色土		
02		D−23	2.85	0.97	0.41	細長い溝状	U字状	褐色土		
03		D−23	1.22	0.5	0.12	細長い隅丸長方形	底平坦壁直立	褐色土		
09		C−25	1.0	0.82	0.15	円形	U字状			
01		E区 B、C−28	1.65	0.85	0.6	長方形	底平坦壁直立	黒褐色粘土と褐色粘土の混り		
02		C−29	1.15	1.15	0.2	円形		褐色粘土		平安時代か
03		C−29	1.45	0.85	0.52	長方形	底平坦壁直立			

第2節　平安～中世の遺構

平安～中世にかけての遺構はA）自然流路、B）溝、C）井戸、D）掘立柱建物、E）土坑、F）性格不明遺構が認められる。しかし、図41にみるように遺構はC区に集中するが、C区の区画を示すと思われる溝（SD03、66）、B区のC－16・17グリット付近の直行する細長い溝（SD07、08、09、20）及び、E－17グリットのSD18、19の周辺以外は全体的に個々の遺構の分布は散在的であり、遺物を出土する遺構も少ないこともあって、それらの関連性は明確にとらえられない。出土遺物、覆土の類似性等で判断される各々の遺構の時期は表の中に示したが平安時代の遺構が多く、確実にその時期以降の遺物を伴う遺構は少ない。

以下、先の遺構の順序に従って記述を進めてゆく。

A）自然流路（図39、40）

今回の調査区の東端の水田面下で発見されたもので、西の岸が確認された。東の岸は未確認であるが巾60m以上の大きな河川跡である。図39に示したように完掘の段階で、SR01、02という2本の流れが確認され、SR01は南北方向、02は大きく北から東に曲がっているところを調査した。しかし、図40の土層模式図をみると、SR02を示す土層はなく、このSR02が01に先行する流路であると判断した。

流路の底は比較的平坦で、西岸は傾斜がきつく直線的に立ち上がる。従って、この周辺は砂堆にそってほぼ直線的な流れであったことが推定される。

土層は図40に示したが、堆積した順序でみてゆくと、基盤の粘土を削った黄褐色(15層)、灰褐色砂礫(14層)が西岸付近を除いた全域に1m～2.5mの厚みをもって堆積し、この砂礫層中から多量の遺物が出土した。その後流路の底の上昇に伴って流力が衰え5、8、9、10、11、12、13層の青、灰褐色を呈する砂に変化し、それらの上には、粘土層が広がっている。このようにこの土層からSR01の埋没してゆく過程が明瞭に見て取れる。

遺物は上流から運ばれてきたものであり、縄文土器、弥生土器、古墳時代の土師器・須恵器、奈良～平安時代の須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器と鎌倉時代にかけての山茶碗・青磁・白磁等の土器類とともに、木製品、人骨が出土している。従って15層の砂礫が運ばれたのは鎌倉時代といえるが、それより上の砂、粘土層の堆積時期は全く遺物が出土しないため不明である。図3の清水市域旧地形図にはほぼ同じ位置に巴川が流れている。いずれにしてもこのSR01は鎌倉時代以降の長い時間のなかで埋没

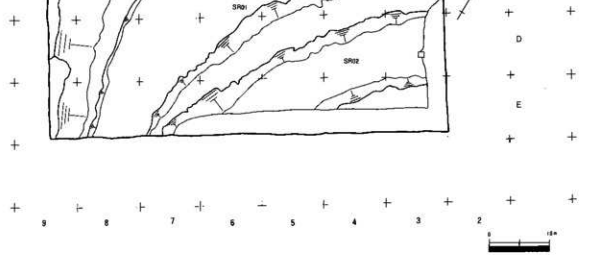


図39　A地区全体図

していったものであろう。

現静岡大学名誉教授の加藤芳朗氏の現地調査の際、SR01の砂礫の観察から流れの方向は南から北であるという教示を受けた。このことをふまえて遺物の所在した遺跡を検討してみたが、巴川が流れたであろう範囲は清水平野の低地部であり、特に平安～中世の時期では明確に各々の遺物が所属する遺跡名を推定することはできなかった。砂堆上のＢＣＥ区からの出土遺物と、西のＤＦ区から出土している遺物が原位置を保っているものであり、Ａ区出土の遺物のなかには同時期のものがかなり含まれていることから推定して、これらのＡ区出土遺物の大半は能島遺跡のものと、あまり距離が離れていない遺跡の遺物であろう。

Ｂ）溝（図42・43、表６）

溝の個々の概要については、表７にまとめた。時期的には、Ｃ区西端のSD29、70が出土遺物、切り合い関係から中世と考えられるのを除き、他の溝は殆どが平安時代のものと推定される。平安時代の溝はその配置、形態から性格・機能が異なっているようであり、大きく分けて建物または構築物の区画を示すと考えられるものと、畑の畝状のものと、単独で存在するものとがある。

図42・43に区画を示すものを図示したが、典型的と思われるのが図43のSD03、04、66であり東西の長さはSD03は25ｍ、SD66は約６ｍあり、両者を合わせた長さは約31ｍを計り、断面の形状はＶ字状を呈する。SD04は03に直行し巾が0.7ｍと半分程であるが、平面断面の形態は類似する。この溝の方向は、ほぼ東西南北を指しており、SD03と66は平行している。このことから、これらは規則的に配置された同時存在の遺構であり、言わば居館跡の区画の溝であると推定される。しかし、溝の内側の範囲からは柱痕跡を示すようなピット等、建物に伴うような遺構は認められなかった。

Ｂ区においてもSD03、04、66のような傾向をもっている図42に示したような一群がある。規模は異なるが溝の方位、直行するものがある等、類似点が認められる。このなかのSD07の隣には、ほぼ同じ長さ、深さで巾の異なるSD20が平行し、その南には円礫（註１）からなる帯状の礫群がのびている。この地域はＢＣ区のなかでも最も土地利用が活発に行われた地域と第３章３節の基本層序で推定した。従ってこれらの溝がＣ区のように深さ0.4ｍ前後残存した位置で検出されればＣ区のそれとかなり類似していると推定するのは容易である。従って、図42に示したＢ区所在の溝も建物、構築物を区画する溝の性格、機能をもっているものと考えられＢＣ区ともに同時期で同一の遺構群といえる。しかし建物跡を示すようなものはこの範囲のなかには認められず明確な判断は下せないが、一方ではＢ区の溝の場合は周辺に井戸跡等もないことから地表に柱を埋め

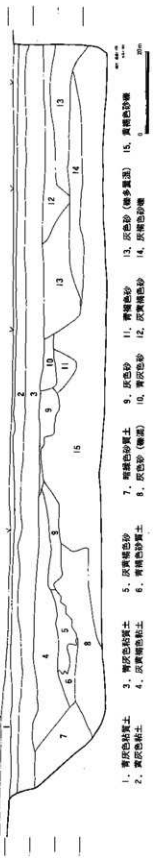


図40　Ａ地区北壁土層模式図

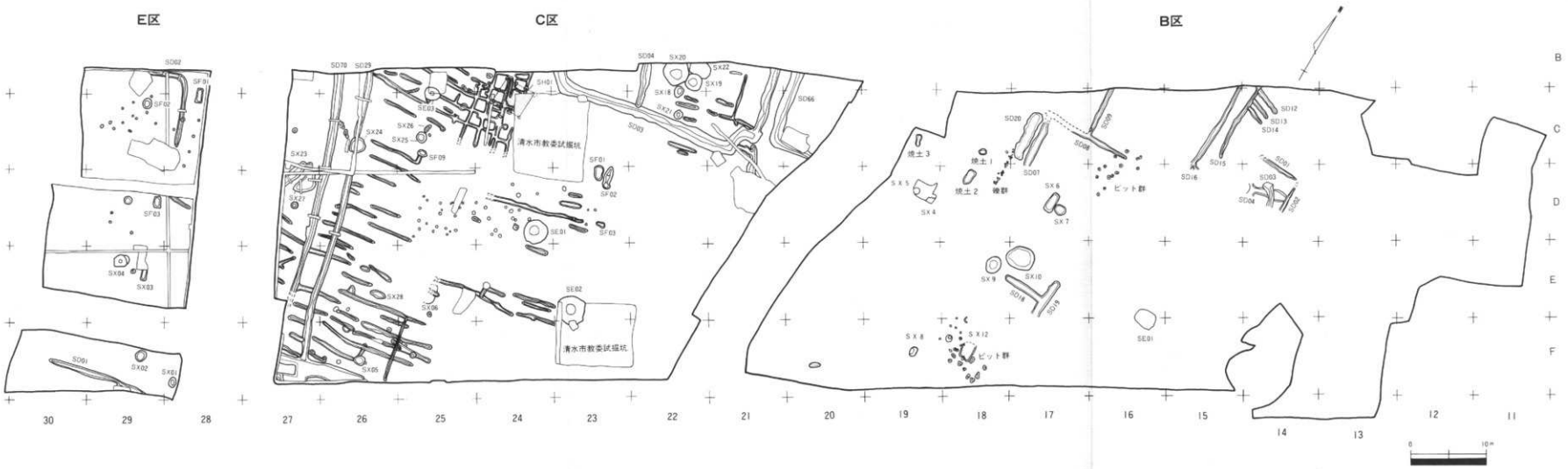


図41　能島遺跡ＢＣＥ区平安～中世遺構全体図

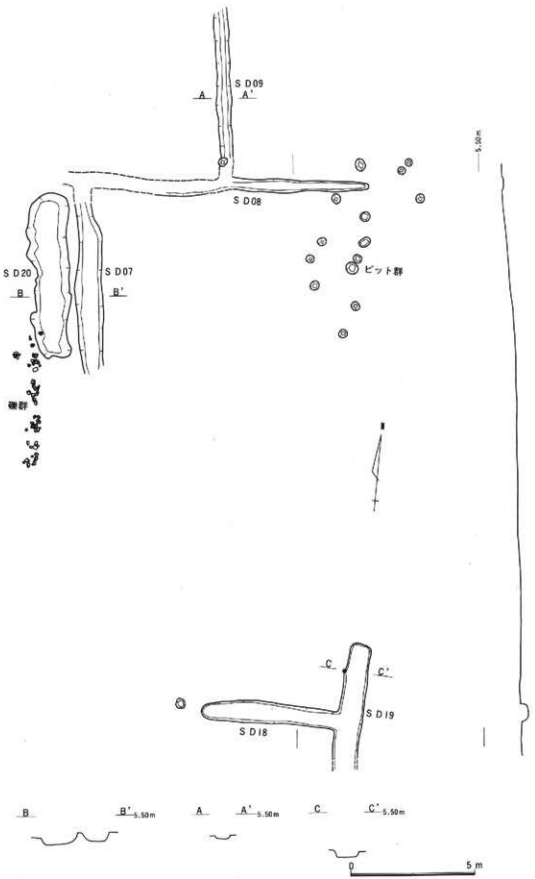


図42　B区平安時代遺構実測図

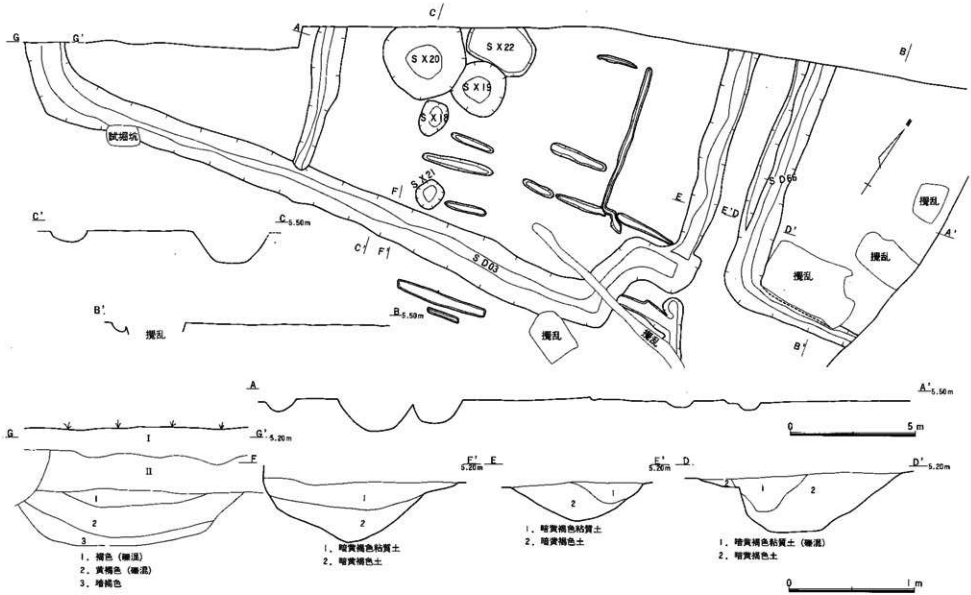


図43　C区平安時代溝実測図

表6　平安時代～中世溝（SD）一覧表

註、グリットは溝の所在する位置を表す。数字の単位はm。（　）は残存長。

番号	挿図	グリット	規模			形態		覆土	出土遺物	備考
			最大長	巾	深さ	平面	断面			
01		B区 D−14	(2.16)	0.2	0.12	巾狭く細長い	U字状			
02		D−14	(1.6)	0.2	0.1	巾狭く細長い	U字状			SD01と直交するか
03		D−14	1.2	0.26	0.12	北半が曲り、端部太くなる	V字状			
04		D−14	1.74	0.52	0.2	東が太くなる	底平坦壁直立			SD03に切られる
07		C−17	(2.7)	0.38	0.14	巾狭く細長い	U字状	黄褐色粘質土、黄褐色土		
08		C−16、17	(3.42)	0.14	0.07	巾狭く細長い	U字状	暗褐色土		大きな礫が混入する部分あり
09		C−16	(2.5)	0.2	0.08	巾狭く細長い	U字状	灰褐色砂質土主体黒色ブロック混入		礫多く含む
12		C−14	1.44	0.22	0.1	巾狭く細長い	U字状			SD15と交わる
13		C−14	1.22	0.18	0.1	巾狭く細長い	U字状			SD15と交わる
14		C−14	1.02	0.18	0.1	巾狭く細長い	U字状			SD15と交わる
15		C−14、15	4.3	0.2	0.14	巾狭く細長い	U字状			北調査区外北端で巾広くなるSD16と平行
16		C、D−15	5.2	0.12	0.15	巾狭く細長い	U字状			北調査区外南端で二つに分かれて消失SD15と平行
18		E−17、18	2.2	0.34	0.12	巾狭く細長い	U字状	褐色粘質土	土師器	SD19に直交する大きめな礫多く含む
19		B区 E−17	2.08	0.38	0.1	巾狭く細長い	U字状	褐色粘質土、小礫多量混入	土師	
20		C−17	2.64	0.56	0.1	やや巾広く不整形	U字状		土師	
03		C区B、C−21～23	東西 25.0 南北 12.5	1.75	0.45	方形にめぐる	V字状	暗黄褐色土（粘質土） 褐色土	灰釉土師器	SD04と同時期
04		B、C−22	4.9	0.7	0.16	やや巾狭い	V字状			SD03と交わる
29		B、C−26、27	38.4	1.02	0.3	細長く直線にのびる	U字状			SD70と平行し南北にはしる
66		B、C−20、21	東西 5.75 南北 10.0	1.4	0.4	方形にめぐる	V字状	暗黄褐色土（粘土質）	土師器	SD03の東辺と平行にはしる
70		B～F−26、27	28.9	1.2	0.3	細長く直線にのびる	U字状	褐色粘土 黒色土	灰釉	SD29と平行
01		E区 F−29、30	8.36	7.4	0.2	細長	V字状	暗褐色粘土	灰釉	
02		B、C−28、29	南北 9.2 東西 5.2	0.7	0.1	L字形	U字状	黒褐色粘土		

ず礎石の穴だけを掘った簡単な構造の建物の存在も推定されるのではないか。かろうじて溝の底の一部が残り、かつB区のSD08、07、18、19が一つの区画を示すとすれば東西約10m、南北約21mの区画が想定される。（註2）

溝のなかで先に畑の畝状のものとしてあげたのは、B区のSD12～16がその例で大部分はC区の西半部に集中する。これを畝状の遺構と判断したのは、平安時代の主要な遺構群とは重複しないこと、散在的にではなく集中すること、一定方向を向き隣の溝との間隔も一定すること等の遺構の観察の所見から推定した。一方、土層の在り方からみてこの範囲が砂堆のなかで最も第3層の黒色土が良好に残る地点であり、3層が撹乱されて結果的に存在しないB区の様子とは異なる土地利用が行われたと推定されたことも大きな一因となっている。従って、平安時代の遺構群の配置関係から大まかに、砂堆中央部の高く安定した地点が建物とかの構造物、その西端の大半と東端の一部では畑として利用されたとの推定も可能であろう。

単独で存在するものはE区のSD01、02であるが先の溝とは性格、機能等が相違するようであるが、推定の資料に乏しく不明である。

中世の溝としたB区のSD29・70は、ほぼ南北に平行する比較的大型の溝であり、SD28は南で窪地状の部分で交わり消失する。この付近で時期的に関連する遺構等はなく性格、機能等は推定できないが位置的に砂堆の西端に寄っていることが大きな特徴であろう。いずれにしても西端に偏ること、規模が大きいことから建物に関連するものとは考えられない。

C）井戸（図44）

井戸はC区に3基、B区に1基検出された。C区の3基は、出土土器から区画の溝、掘立柱建物跡に伴う平安時代の遺構群に含められるものであり、B区のSE01は中世の井戸であることが確認された。

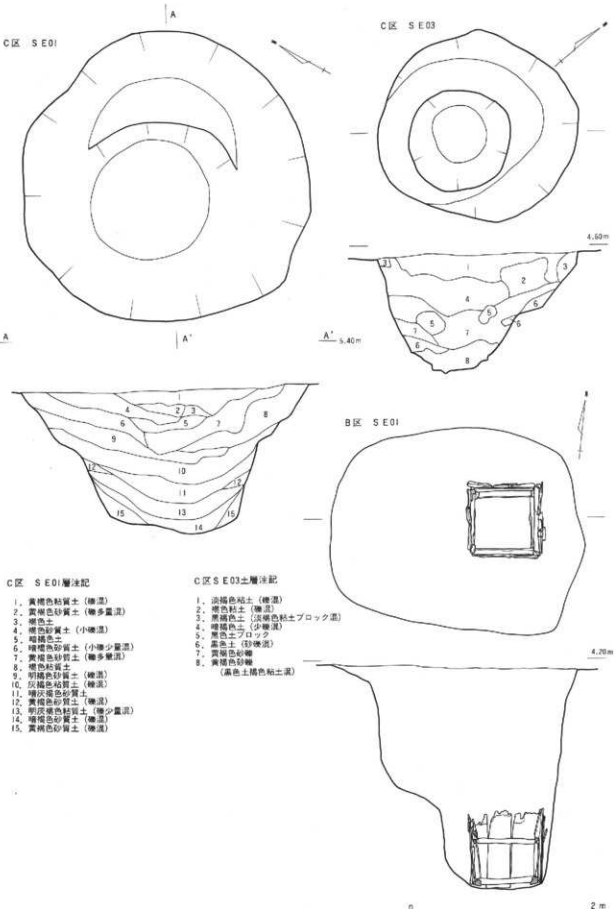
井戸の掘り方の平面はC区のSE01、02、03ともに円形で、断面はゆるいV字状を呈する。規模はSE01が径3m、03は1mであり、深さ1.5mと1.2mであった。図示していないが、SE02は01とほぼ同規模であった。これら平安時代の井戸は3基とも掘り方が検出されたのみで、水溜部及び井戸枠等の施設は認められなかった。従って、後に述べるSX20のように同一形態、同規模の遺構との比較のなかで基盤の砂礫を抜いて青砂に達しているものを井戸と認定した。これらは基盤の弱い砂礫層に作られ、木質も消滅している可能性が高く、本来の掘り方とは異なっていることが充分考えられる。

B区のSE01は、砂堆の東へ緩く傾斜するE・F－16グリットに存在し、遺構のなかでは最も東端に位置する。掘り方は東西に長い隅丸の方形を呈し、西壁が段掘りされるが垂直に近い断面をもっている。規模は東西2.7m、南北1.1m、深さは2.4mを計る。底から0.8m付近まで井戸枠が残存していたが、水溜の施設は確認されなかった。井戸枠は外寸で0.8mであり、3枚の板を縦に並べ、内側からホゾ穴で接合される積木が2段残っていた。この底から常滑の平鉢が出土している。時期としては戦国時代末頃のものであろう。

D）掘立柱建物跡（図45）

これは、C区のC－24グリットから検出され、区画の溝SD03の西側、井戸SE03との間に位置し、SD03とは3m、SE03とは6mの間隔をもつ。円形の掘り方は径0.3m～0.4mで、東辺の中央の柱穴を試掘抗で欠落するが3間（4.1m）×2間（3.6m）の規模をもっている。建物の方向は東西南北を向き東西にやや長い。これは1棟のみ単独で存在し、遺物の出土もないが区画の溝SD03の方向と一致することから平安時代の遺構とした。

このSH01の10m南にはピット群が認められたが建物を示すような配置は確認されなかった。尚、これは、畑の畝状の溝に切られている。



C区 SE01層注記

1. 黄褐色粘質土（礫混）
2. 黄褐色砂質土（礫多量混）
3. 褐色土
4. 褐色砂質土（小礫混）
5. 暗褐色土
6. 暗褐色砂質土（小礫少量混）
7. 黄褐色砂質土（礫多量混）
8. 褐色粘質土
9. 明褐色砂質土（礫混）
10. 灰褐色粘質土（礫混）
11. 暗灰褐色砂質土
12. 黄褐色砂質土（礫混）
13. 明灰褐色粘質土（礫少量混）
14. 暗褐色砂質土（礫混）
15. 黄褐色砂質土（礫混）

C区SE03土層注記

1. 淡褐色粘土（礫混）
2. 褐色粘土（礫混）
3. 黒褐色土（淡褐色粘土ブロック混）
4. 暗褐色土（少礫混）
5. 黒色土ブロック
6. 黒色土（砂礫混）
7. 黄褐色砂礫
8. 黄褐色砂礫
（黒色土褐色粘土混）

図44　BC区井戸実測図

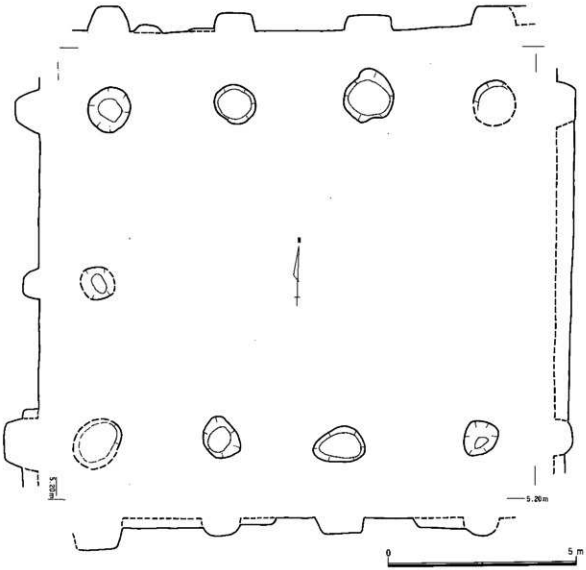


図45　掘立柱建物実測図

E）土坑（表6）

土坑状の遺構はCE区にみられ、細長い形態を呈するものとした。しかし、後に述べる性格不明遺構SXとの差は顕著にみられず、E区SF02は円形でSXに近く、逆にB区のSX6は細長くSFに近い。厳密には両者の差は認められないが、一応調査での分類に従って記述してゆく。

表6に計測値等の個々の土坑の観察をまとめてみた。平面形は細長い楕円、または方形を呈し、断面はU字か壁が直立する。各々の配置の規則性もなく散在し、僅かにSF01、02、03がD－23グリットにまとまりをみせる傾向がある。出土遺物が伴っていないため時期の判断は不能であるが、覆土及び検出面からみて平安時代かと思われる。

F）性格不明遺構（図46、表8）

性格不明遺構（SX）として扱ったものは、平面形態が円・方形・不整形を呈し、掘り方の断面はV・U・壁直立等のバラエティーを持っており、本来の用途、機能は様々に考えられるものである。

図46にはこれらのなかで遺物を伴うものとしてB区SX10、C区SX20をあげた。SX20は区画の溝SD03、04の内側に位置し、3mの円形で壁は狭い底から緩やかに立ちあがる。検出面からの深さは1.2mで覆土上面から礫とともに土師器が出土する。また覆土下部からは灰釉の長頸壺が出土した。土器の細片を含めて覆土の全体から出土が認められた。

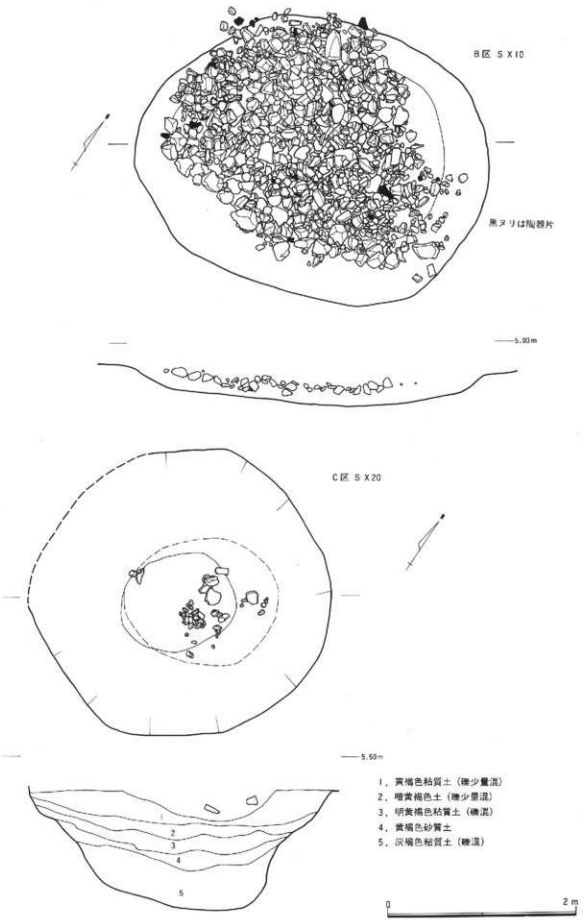


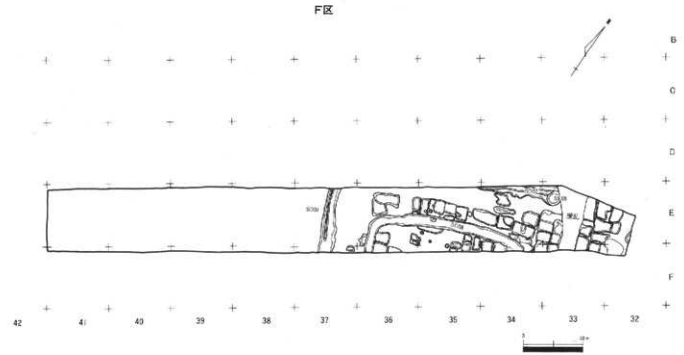
図46　B C区S X実測図

表7　平安時代～中世、その他の遺構（ＳＸ）一覧表

註、グリットは遺構の所在する位置を表す。数字の単位はm。（ ）は残存長。

番号	挿図	グリット	規模			形態		覆土	出土遺物	備考
			最大長	巾	深さ	平面	断面			
4		B区 D－19	3.2	1.8	0.11	不整形	壁直立	褐色粘質土 焼土ブロック状に混入		底面が凹む
5		D－19	0.94	0.86	0.08	円形	ごく浅いため不明	暗褐色砂質土礫、炭化物含む	かわらけ 陶器	SX04を切る
6		D－17	2.55	0.95	0.37	長方形	底平坦 壁直立	褐色粘質土 細礫多量混入	土師器	
7		D－17	1.45	1.2	0.33	楕円形	底平坦 壁平坦	褐色粘質土 細礫多量混入	土師器 陶器片	
8		E－19	1.0			方形	U字状		銭貨	19号周溝墓検出中に確認
9		E－18	2.27	1.85	0.74	楕円形	U字状	黄褐色粘土と暗褐色粘土からなり、砂礫層もみられる		
10		E－17、18	3.72	2.85	0.57	楕円形	ゆるいV字状	黄褐色土 褐色土	陶器 石製片口 ひき臼等	一括投棄の礫群を伴う
12		F－18	1.75	1.55	0.17	不定形な方形				
焼土1		C－18	1.05	0.67	0.1	楕円形	帯状の焼土 底平坦 壁は直立	褐色粘質土		SX1を名称変更
焼土2		D－18	2.05	1.05	0.1	長い楕円形	帯状の焼土 壁はゆるやかに立ちあがる	褐色粘質土		SX2を名称変更
焼土3		C－19	1.62	0.45	0.05	南北に細長い	帯状の焼土	赤褐色粘土		SX3を名称変更
05		C区 F－26	1.42	1.30	0.51	楕円形	U字状	明黄褐色粘土 暗黄褐色粘土	土器片	
06		E－25	2.70	0.70	0.06	楕円形	U字状			
18		B、C－22	1.42	1.05		不整形	V字状	黒褐色土 砂礫多く混入		

番号	挿図	グリット	規模			形態		覆土	出土遺物	備考
			最大長	巾	深さ	平面	断面			
19		C区 B—22	2.15	1.9	0.95	円	V字状	暗褐色土 褐色砂質土 黄褐色粘質土	土師器 灰釉	西をSX20に切られる
20		B—22	3.4	3.2	1.2	円	V字状	黄褐色砂質土	灰釉 土師器	北側一部調査区外
21		C—22	1.12	1.0		隅丸方形	V字状	暗褐色土 礫多く混入		
22		B—21、22	2.5	1.9		不整形	底平坦 壁直立			
23		C、D—27	3.5	1.25	0.2	南北に長い溝状	U字状	褐色粘土 黒色土		
24		C—26	2.2	1.9	0.2	不整形	底平坦、壁ゆるやかに立ちあがる	暗黄褐色粘土 暗褐色土		
25		C—25	1.25	1.15	0.5	隅丸の台形状	V字状 2段掘り			
26		C—25	1.05	0.6	0.25	長楕円形	U字状			
27		C、D—27	4.1	1.85	0.3	不整形	U字状	暗褐色土と黒色土のまじり		
28		E—26	2.0	0.82	0.25	長楕円形	U字状	暗褐色土		
01		E区 F—28	1.14	0.9	0.38	楕円形	U字状	褐色土		
02		F—29	1.16	1.1	0.06	円				
03		E—29	1.45	0.6	0.5	長方形	底平坦 壁直立			
04		E—29	1.85	1.6	0.6	円形	V字状	褐色粘土		



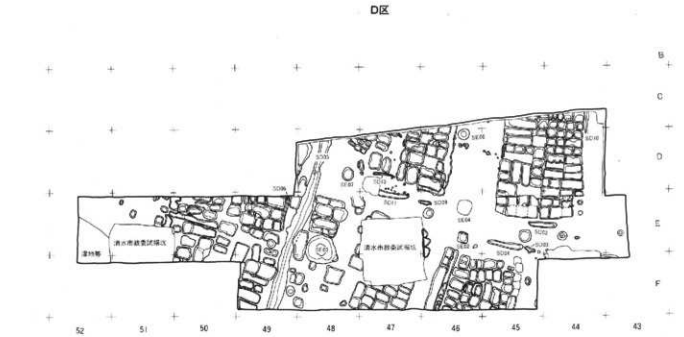


図47　能島遺跡ＤＦ遺構全体図

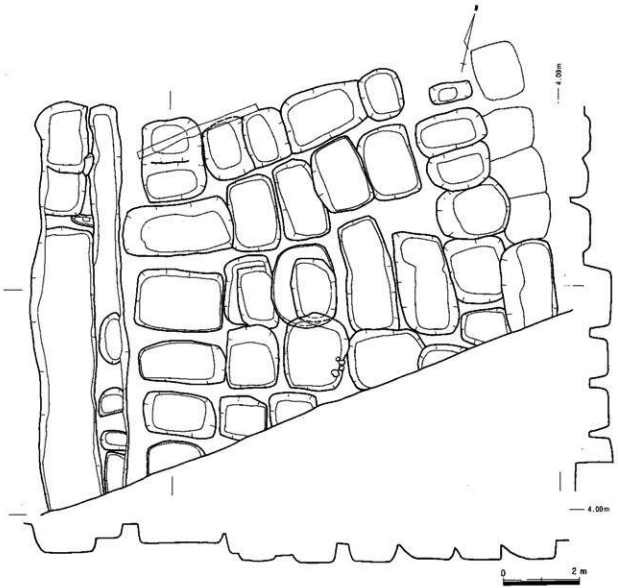


図48　D区、F—45・46グリット粘土採掘跡実測図

SX10は弥生時代の土坑SF10を掘り込んでおり、長径で3.72mの楕円形を呈し、断面は中央部が深く、緩やかな丸みをもって立ち上がっている。図46にみるように多量の礫と共に陶器、引き臼等の石製品が出土した。陶器、石製品ともに細片であり、礫の中に混入する状態の出土であるため生活の不要品を捨てた穴ではないかと思われる。時期としては、14m程東に位置する井戸SE01と共存すると考えられる。

B区にのみ認められた焼土の塊を含む穴は3基がC・D—18・19グリットに集中しており、形態は異なるが覆土は黄色味が強い褐色の粘質土で、その最上面に焼土の塊がみられた。しかし、火を受けて堅く焼き締まったような状態は認められなかった。基本的にはかなり類似性が強く同じ存在で機能、用途も同じであろうと推定される。覆土の状態から平安時代のものではないかと思われる。

第3節　近世の遺構

近世の遺構群として考えられるものは、D区の全域とF区の東、砂堆寄りにみられ小規模な方形の粘土採掘跡を主体とし、溝、井戸と僅かにピットからなる。遺物のなかには平安〜鎌倉時代の土器が認められるが遺構からの出土はなく、近世の初頭以降の土器類が主体となるため近世の遺構群と考えた。

A）粘土採掘跡（図48、49）

図48、49は粘土採掘跡を示す典型的な地点である。両地点ともに２ｍ～３ｍの方形の掘り方を最小単位にして東西方向に列をなして掘り進んでいる。いずれも黒、白色の粘土層を採掘の対象とし、青砂の直上を底にしている。掘り方を観察すると、図48のように穴の一つ一つの境が明瞭で独立するような配置をするものと、図49の南半の地点では、掘り方の最下部の検出段階で個々の境が認められるものとがある。つまり掘りはじめから個々の穴の壁を維持してゆくか、それを無視して重複して掘るかという差

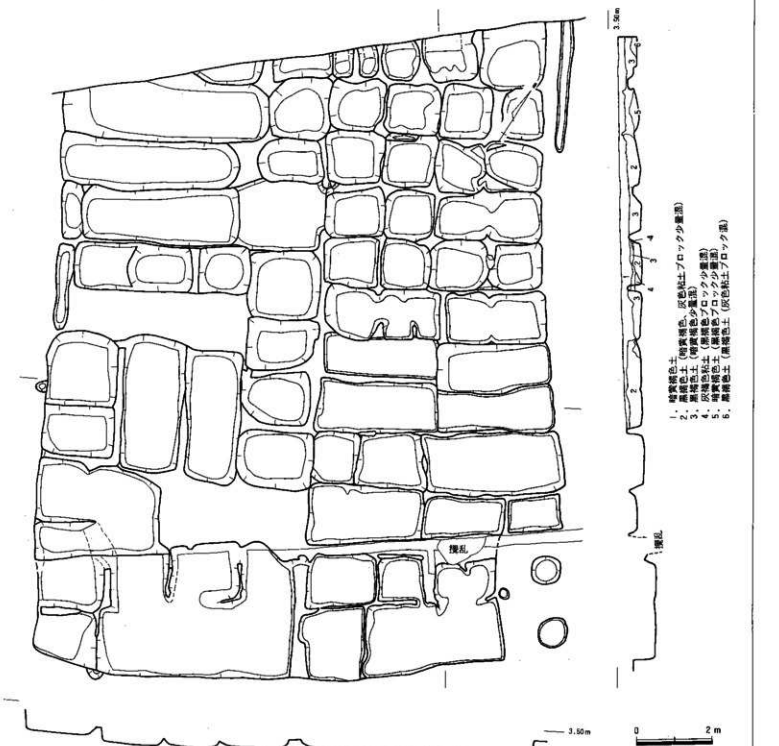


図49　D区、D－44グリット粘土採掘跡実測図

であると思われる。遺物は個々の穴からも出土するが多くは包含層からの出土である。

B）井戸（図50、51）

井戸はD区から7基、F区から1基検出された。そのうちD区SE03、04は石組みの井戸で水溜部は角材を方形に組み合わせてあった。その他の6基の井戸は素掘りでなんらの施設ももたないものであった。

図50に石組み（SE04）と素掘り（SE02、05）の両者の例をあげてみた。

SE04の掘り方は2.4ｍの正方形を呈し、壁はほぼ直立に掘られる。検出面からの深さは1.4ｍであり図示してないが覆土上面には多くの礫が散乱し埋められたような状況を呈していた。井戸の構造は水溜部に長さ1.1ｍ、厚さ0.1ｍ、巾0.35ｍ程の角材を組み合わせ、その上に円礫を積み重ねている。

素掘りのSE02、05は比較的小型のものであり、02は方形、05は円形の掘り方をもち、壁はほぼ直立に近い形で掘り込んでいる。規模は02が一辺0.86ｍ、深さ0.5ｍで05は径1.3ｍ、深さ0.3ｍであった。

図50の井戸は井戸全体からみれば下部構造が知れるものといえるが、図51のSE03は井戸の掘り方を中心にして外側にも径5ｍ前後で円形の深さ0.15ｍ～0.4ｍの掘り方が認められた。また井戸本体の東には張り出す部分があり、この部分を含めた1.5ｍ程の範囲に大きめな礫が散在している。一方、井戸本体を挟んだ西には小さめな礫が巾0.7ｍの帯状に置かれている。この位置関係からみれば井戸本体へつながる石敷きともみえる配置をしている。井戸本体はSE04と同じ構造であり、水溜めの角材は大きく、長さ1.2ｍ、巾0.3ｍ、厚さ0.2ｍを計る。

井戸からの出土遺物はSE03から銭貨が出土したのみであったが、時期としては他の遺構の年代と、石組みであることから大まかに近世と考えた。

なおこれらの井戸は、現在の集落からも離れた水田地域にあり、土層をみても建物等の設置には不適と言わざるを得ない地点に位置していること、石組みの堅固な井戸があることからその機能、用途は集落に伴うような日常生活で使用するようなものか否かが問題となった。この直接の答えにはならないが、能島町内会所有の区有文書のなかの記述が大きな示唆を与えるものと思われる。その文書の内容は巴川より揚水した灌漑用水の土管埋設に関するものであるが、その一部を引用する。

「抑モ吾能島区ハ古来ヨリ田面ノ灌漑水源ニ乏シク巴川ヨリ塩田川底ヲ貫通シ壱百余間松材ヲ以テ埋かけヲ作リ大井戸ニ引水シテ溜水トナシ撥釣瓶ヲ以テ昼夜ノ別チナク汲上タル……」

この文書は明治期のものであり、記述の内容はほぼ近世に該当するものと考えられる。この資料からみて灌漑用の井戸のあった事が知られる。従って、DF区の井戸は水田の灌漑用という推定も成り立つ。一つの参考資料として取り上げてみた。

註1　これは、長さ5.5ｍでSD20の西の上端を南へ直線的に延長した位置にあり、ほぼ大きさをそろえている。SD20に伴うものか、またより上位にあった溝の底に置かれたものなのか調査での明確な所見は得られなかった。しかし、方向等の位置関係からみて平安時代の南北方向の溝に伴い、溝と関係する機能をもっていたと考えられる。

註2　検出された遺構は、家屋立ち退きによる撹乱等の影響により、不十分な検出となった。しかし、一方では、遺構の希薄なのは、平安～鎌倉時代の本遺跡の性格にもよるのではないかとの推定もされる。具体的には、この時期の絵巻物等にみられるような、海岸とか河川の岸に建てられた簡易な建物群が推定可能かもしれない。この周辺地域での当該期の集落の様相は調査例が乏しいため遺構の比較ができない。近隣の集落の調査例として、富士川流域の庵原郡富士川町浅間林遺跡、富士市舟久保遺跡がある。いずれも、竪穴住居であり、わずかに掘立柱建物が伴っている。従ってこの地域でも、集落であれば竪穴住居の使用は一般的であろうと思われる。

本遺跡では、集落と判断される竪穴住居跡等は検出されなかった。

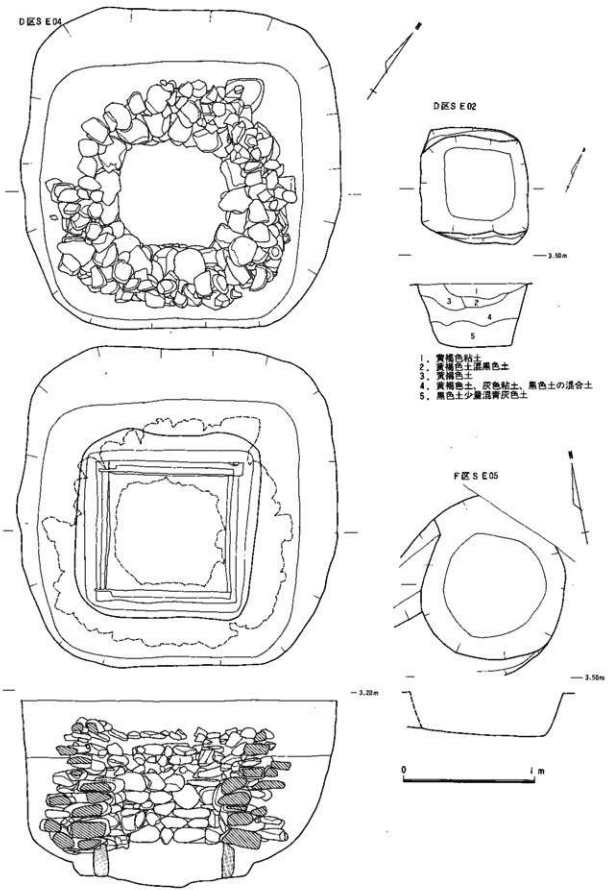


図50　ＤＦ区井戸実測図

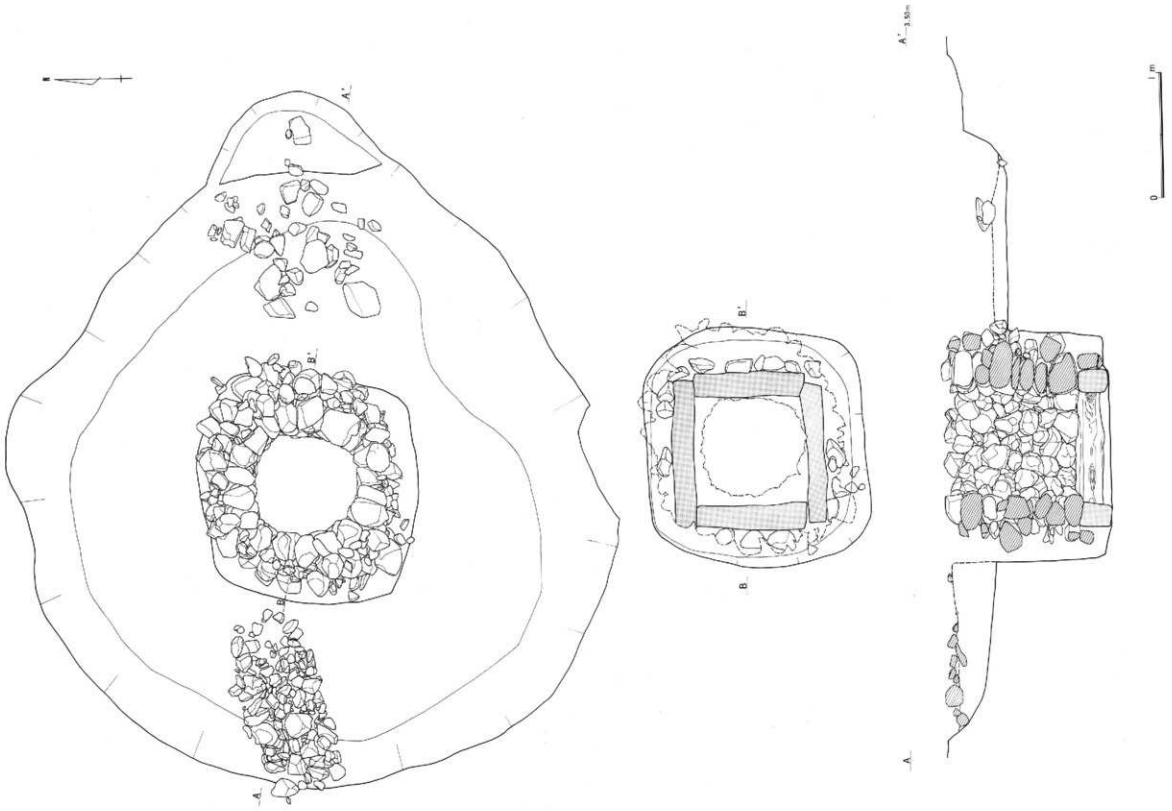


図51　D区井戸SE03実測図

第Ⅳ章　遺　　物

今回の調査の出土遺物は縄文時代から近世に及び、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、青白磁、中近世陶磁器等の土器類と、石製品、土製品、木製品、金属製品といったものがあり、長期間にわたる多様な遺物が認められる。しかし、A区は鎌倉時代の河川跡であり、この地区以外には出土しない遺物群が認められる。以下に遺物の概要を述べていくが、このA区出土遺物については簡単に触れる程度としたい。

第1節　縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は土器、石器が出土する。いずれも図示したものが7点と摩滅する細片が数点、石器1点であった。

A）縄文土器（図57—43、図59—40、45、図60—30、図65—1～3）

図示した7点のうち、図65の3点がA区河川跡の砂礫層から、他は周溝墓の溝に混入したものである。これらに伴う遺構は確認されなかった。

図57—43、図59—45、図60—30の3点は波状、孤状、横の沈線を施し、赤褐色を呈し、焼成は軟質で器面は摩滅が激しい。図59—40は横と孤状の沈線を組み合わせたモチーフをもち、焼成やや良、暗い褐色を呈する。堀之内式とおもわれる。以上の4点は時期的には縄文後期のものであろうと考えられる。

A区の砂礫層出土の図65—1～3は激しい摩滅を受け、1は文様の状態がつかみにくい。2・3ともに中期に属する土器片とおもわれ、2は半截竹管による沈線と爪形文がみられる。3も半截竹管の連続押引きによる文様がみられる。前者は勝坂、後者は北屋敷式の土器であろう。

B）石器（図62—4、図版41）

1点のみ出土し、今回の調査での遺物でなく、以前の表採品のため便宜的に弥生時代の石製品のなかで図示し、若干の説明を加えた。小型で両刃の磨製石斧であり、その形態から弥生時代の石斧よりむしろ縄文時代と考えるのが妥当であろうと判断されるものである。

第2節　弥生時代の遺物

A）土器（図52～61・図65、図版37～41）

今回の調査のなかで最も多い出土量を占めるのが弥生土器であり、およそテンパコにして20箱である。出土した位置は、A区河川跡、BC区であり、A区を除いて出土量の多い順をあげると、周溝墓の溝、包含層、供献されたものとなり、器形は壺、甕が圧倒的で、高坏1点と、不明の破片が何点か出土している。図65のA区出土土器を除き、図示した土器は個々に、表8の弥生土器観察表にまとめた。A区の土器については、BC区の後に述べることにする。

図では各周溝墓ごとにまとめたが、周溝墓の時期を示すとおもわれる出土状態のものを再度整理してみる。

2号周溝墓に伴うもの、1点（図52—1）　これは東溝の底に接していたが、胴部から底部は細片のみで復元はできなかった。供献土器の可能性もあるが破片の量は少い。出土の位置からみて2号周溝墓の時期を示すものと判断した。

9号周溝墓に伴うもの、2点（図52—8・9、図15、図版17—3）　これらは、9号周溝墓の東溝から近接して出土したものであり、両者ともに一部を欠損するが、大小セットの供献土器と考えられる。8は歪みが大きく、焼成前の器形は図示した右側の形に近いように観察される。

10号周溝墓に伴うもの、10点（図52—10～13、図53—1～6、図版18）　これは北・東・南の溝のなかに一括投棄された状態で出土したものであり、溝底よりやや浮いた状態で出土した。他の周溝墓の溝中出土のすべて殆ど接合しない細片であることと比較して、10号周溝の土器は一括投棄の土器群と判断した。後述するが土器の様相も同時期と推定されるものである。

14号周溝墓に伴うもの、1点（図53—9、図版20—4）　南溝の東端から出土した供献土器で、溝の底ではあるが平坦面から上端に立ち上がる途中に置かれていた。

15号周溝墓に伴うもの、2点（図53—12・14、図版21—3）　この2点は異なる溝から出土したもので、12は南、14は東溝で、両者とも底に接する位置に置かれ、供献土器と考えられるものである。9号周溝墓の場合と同じ、大小のセットが認められる。

17号周溝墓に伴うもの、2点（図53—17・19、図版22—3）　北溝の東端で、17が西、19を東側にして置かれた供献土器である。ほぼ同じような器形をもった無文の壷で大小のセットになっている。

21号周溝墓に伴うもの、1点（図54—5・6）　比較的まとまって出土し、復元されたものであり溝底に近い位置から出土した。6の甕は北溝から、5の壷は北と東の溝からの破片が接合されたものであり、供献土器とは考えられない。

22号周溝墓に伴うもの、2点（図54—8・9、図版25）　東溝からやや間隔を置いて出土した壷と高坏であり、9の高坏は脚部を欠損するが両者ともに供献されたものである。

24号周溝墓に伴うもの、1点（図54—12、図版26）　12は西溝から出土している。

25号周溝墓に伴うもの、5点（図55—1～5、図版27）　円形を呈する周溝の東側に集中して出土し、底からやや浮いているものもあるが、大きな破片であり、一括投棄の土器群と判断した。

27号周溝墓に伴うもの、1点（図55—7、図版28—4）　「コ」の字を呈する周溝の北西のコーナーから出土した小型の壷で供献されたものである。

以上が周溝墓に伴う土器であるが、これらの在り方をも加味し、弥生土器について検討してゆくこととする。

弥生土器は壷については器形ごとに形態分類を行い、甕は全体の器形が判明するものが同一形態の2点しかないため、形態による分類でなく、口縁部の刻み目の手法により便宜的な分類を行った。

壷

壷は形態により6分類してみた。

1）細長い頸部で、僅かに開く口縁部をもち、胴部の張りが大きく、強く屈曲するもの。（註1）

図52—8、図54—12の2点がその典型的な例としてあげられる。12は全体の器形が明確なもので肩部の文様がごく一部残るのみであるが、波状の櫛描が施される。分類で述べた形態の他に底部が上げ底になっているのが大きな特徴である。口径6.6㎝、胴部最大径20㎝、底径5.4㎝、器高24.8㎝を計り、全体の法量の知れる土器の中では中型のものである。ちなみに、図54—8は器高39.1㎝で大型のもの、図53—19の小型壷は器高僅か9.3㎝である。

口縁部の形態と口径からみれば図55—12もこのタイプと推定される。

2）大きく丸く張り出す胴部から急激に細くなる頸部をもち、口縁部はやや開き、底の突出は弱いもの。

図55—1と、口縁部を欠損するが図53—12がこのタイプに該当する。1は口径7.5㎝、胴部最大径17.6㎝、底径6.6㎝、器高22㎝で中型の法量をもつ。12は胴部最大径27.7㎝、底径8.3㎝、残存高31.8㎝を計り大型のタイプである。口縁部の破片でみると、図55—9・56—1が大型に属するものであろう。

本類は肩から胴部中位までに広い文様帯をもち、口縁部破片をみても、図55—9、56—1には口唇

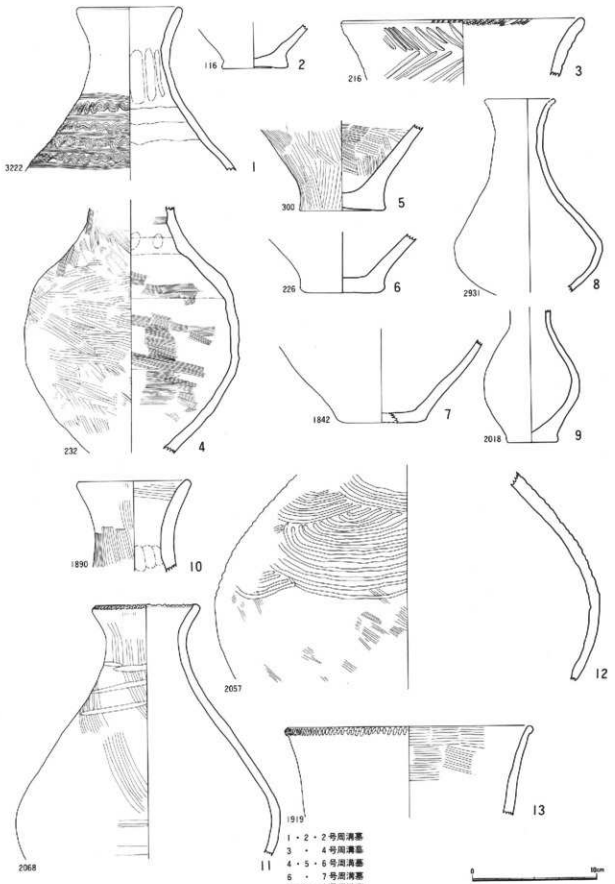


図52　周溝墓出土弥生土器実測図1

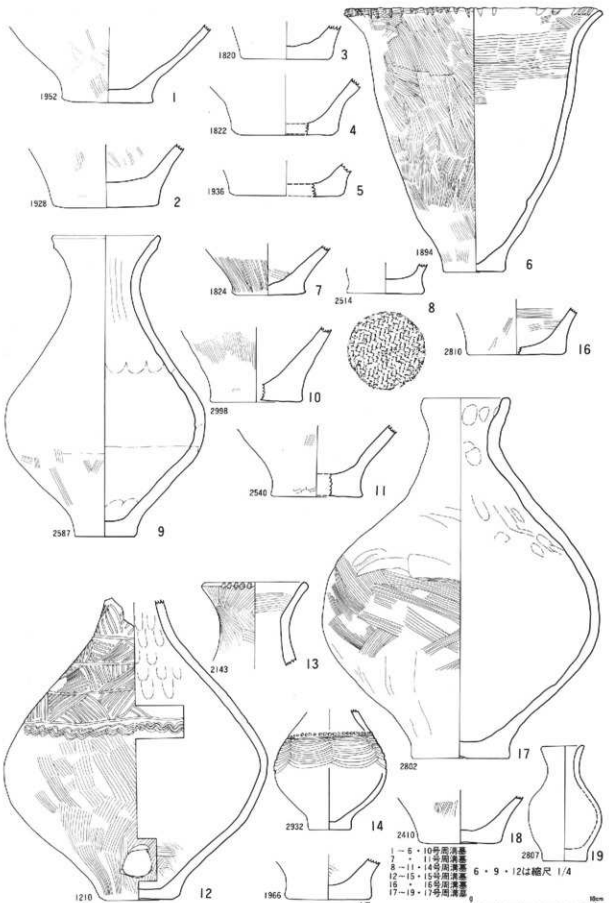


図53　周溝墓出土弥生土器実測図 2

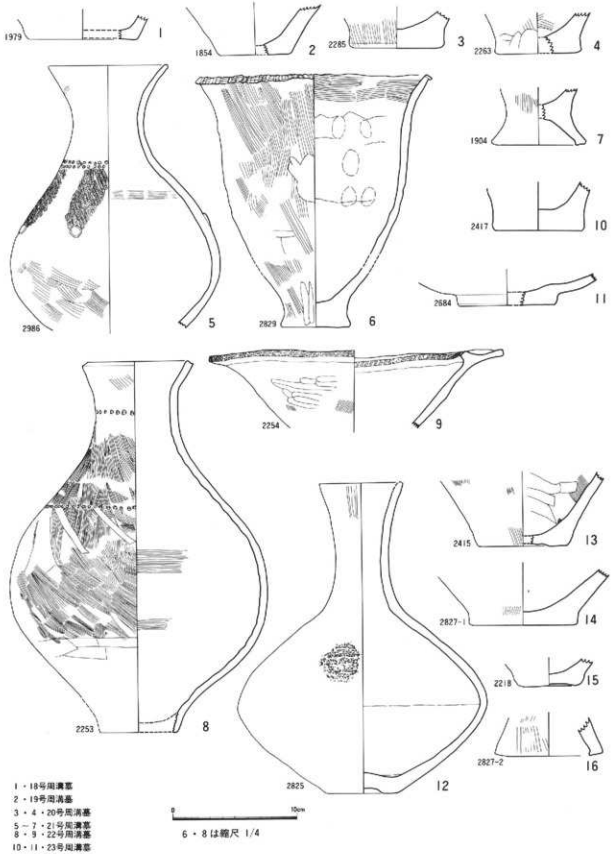


図54　周溝墓出土弥生土器実測図3

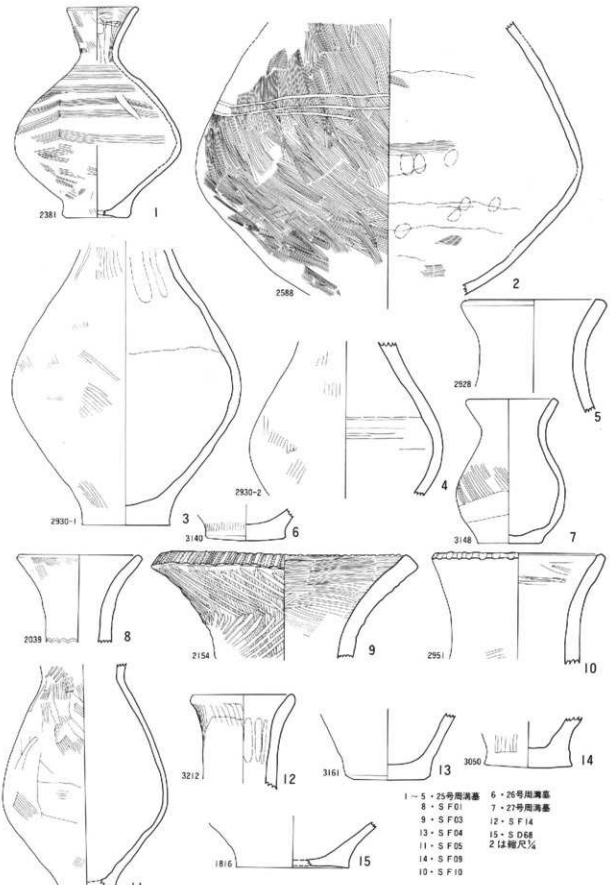


図55　周溝墓出土弥生土器実測図4及び土坑、溝出土弥生土器実測図

部にまで施文が及んでいる。この施文の傾向は形態とも関連するようであり、次ぎに述べる3類にも同様な傾向がみられるのを除き、他の類は無文、または僅かに施文がみられる程度である。

3）口縁部はやや開き、胴部は球胴を呈し、最大径が下がるもの。

口縁部は2の形態であり、いわゆる下膨れのものである。図54—5がそれにあたるが胴部下半を欠損する。中型に属する法量をもっていると考えられる。

4）胴部の径に対し、頸が太く短い。口縁部は開きが弱く、球胴を呈し、底部が突出する。

図53—9、53—17、54—8の3点が全体の形態が知れるもので、細部をみると、9の口縁部は開き方が強く、胴部の張りも8より強いが、頸が太く口縁部が短いことをもって本類とした。文様は8の頸部と肩に棒状工具による横位の刺突がみられるのみで、他は無文である。8が大型、9・17が中型の法量をもっている。口縁部を欠損するが、図55—3もこの類ではないかと思われる。小型壷（図53—14）も形態からはこの類に含められる。

5）口縁部は短く、やや開き、球胴を呈するが胴部最大径が下がるもの。

全体の形態が判明するものがないが、図52—11、55—4がこの類と思われる。両者ともに中型の法量をもち11では横に全周する3段のヘラナデがみられるが、無文に近い土器と思われる。

6）胴部の張りが弱く、胴径に比較して頸が太い。器高が高く全体に細長いもの。（註2）

中型（図52—4・55—1）と小型（図52—9・53—19）があるが、19を除き全体の形態は不明である。おそらく太い頸のタイプの4・5と類似した口縁部を持っているものと推定される。ヘラ調整はされるが施文はみられない。全体に調整は荒く、刷毛目を多く残すという特徴が認められる。

以上のような6分類であるが、これらの口縁部形態以外にいくつかのバラエティが認められる。口縁部端が内側にすぼまる受口状のもの（図56—5）があり、小型の長頸壷であろう。また、拓本で示したが、図58—22・45は内側に屈曲する「く」の字のもので、45では棒状浮文が認められる。また、1点のみ棒状浮文の複合口縁（図60—23）が出土するが、細片のため、「く」の字の45とは異なるといった程度の所見が得られるのみである。

底部周辺の形態は、基本的に球胴を呈する4類、縦長の胴をもつ6類のように、胴部の張りが弱いものが強い立ち上がりをもっている。逆に、張りの強い1類、下膨れの3・5類が底部から胴部にかけて緩やかにたちあがる形態といえる。しかし、個々の破片を検討すると、胴部への立ち上がりの強弱、底部と胴部の境が凹むといった相違点はあるが、相互に極端な差は認められない。また便宜的に刷毛目を明瞭に残すものは甕の底部と判断されるが、壷の6類のように刷毛目を多く残し、調整の荒いものもあり、壷との形態上の差は台部の有無に現れることを除き明確化できない。このように底部周辺の破片をみるかぎり壷と甕の判別は容易でない。従って、このような傾向であることを指摘しておくが、3点のものについて、若干の検討を加えたい。

図54—15は1類の底部と同一で、明確な上げ底である。細片のため胴部の立ち上がりは不明であるが、図54—12とは別個体である。いづれも24号周溝墓からの出土であるが、上げ底の形態をもつのは全体からみればごく少なく、図示した2点のみである。

図56—17は最も緩やかな立ち上がりをもつもので、形態からみれば無花果状の胴部とも推定される。また、胴部がほぼ水平になるような形態をもつ図54—11のような例もある。刷毛目はみられないことから壷の底部と考えたが、欠損する部分を含めての全体の形態は推定が困難である。この問題については、後述する甕の形態の検討に譲ることとする。

以上、述べてきたように口縁部、底部ともに形態については、数点の検討を要するものを除き、大部分は6分類のなかに含められると考えられる。次に文様についての所見をまとめてみる。

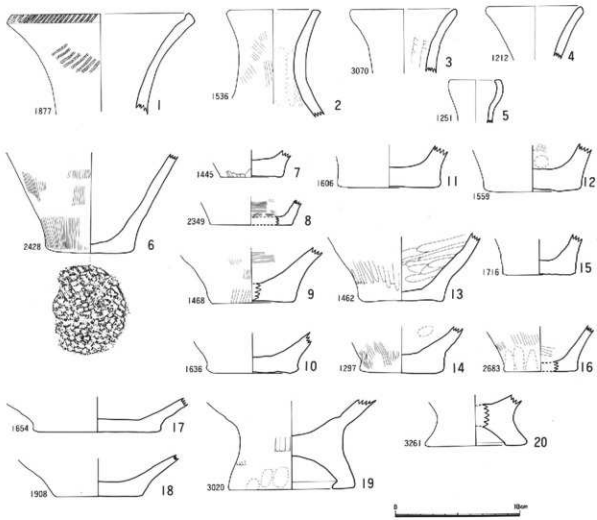


図56　B、C区包含層出土弥生土器実測図

施文の部位

施文の部位は、口唇部から胴部上半の間であり、なかでも胴上半に集中するものが多くみられる。拓本もふくめて口縁部と口唇部に施文するものは、図53—13の刻み目のものを含めて7点を図示したのみである。また明確に頸部への施文とおもわれるのは、図54—8の横位の刺突文と図59—34の2点のみである。

文様の種類

文様は横位、波状の櫛描文を主体とするもの（図55—1、52—1、58—23、59—22、60—38・40）、簾状文（図57—2）と、ヘラ描きによる複合鋸歯文（図53—12）、羽状文（図55—9、60—34）、下向きの弧を示す（図52—15・図53—14）区画されたなかに縄文を施すもの（図57—7・8・13、60—25）等が認められる。これらは量的に多いものであり、少数の例としては単独の刺突文がある。図54—8、59—44は棒状の工具、図59—43では竹管が施文具となっている。

また大きく上記の4種類に分けたが、これらが組み合わせて用いられる例もある。図53—12では複合鋸歯文の最下部に扇状文がみられ、頸部破片とおもわれる図59—34では横位、格子状の細かい櫛描文と、ヘラ描きの羽状文の組み合わせがみられる。

縄文を主体としたものをみてゆくと、実測図に図示できたものとして図54—5の1点がある。これは、胴部上半に垂下する縄文帯がみられ、上を棒状工具による刺突、下には円形の粘土板を貼り付けている。縄文帯と円形の貼り付け文は5単位でこの壺を全周する。一方、従来からいわれている「王」

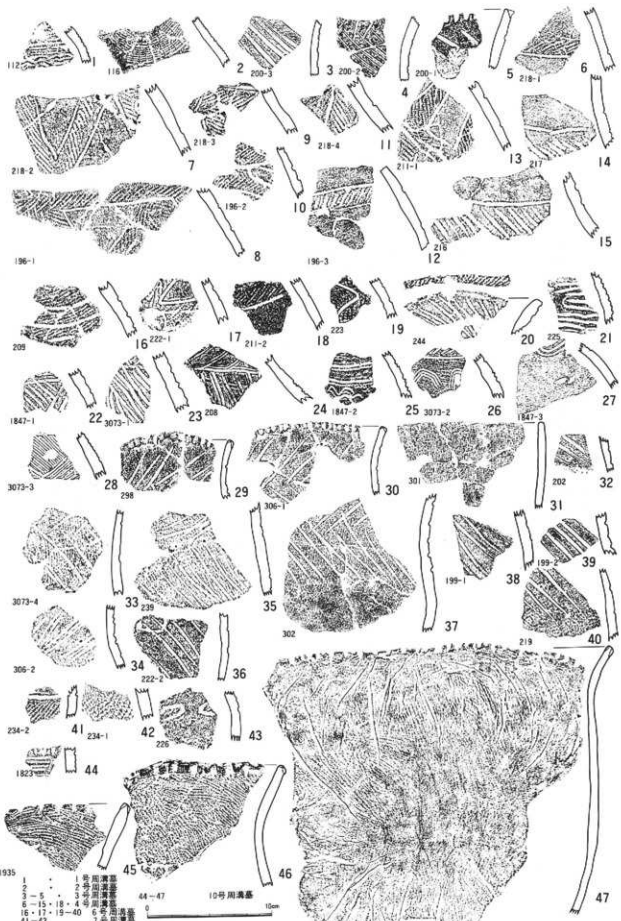


図57　周溝墓出土土器拓本1

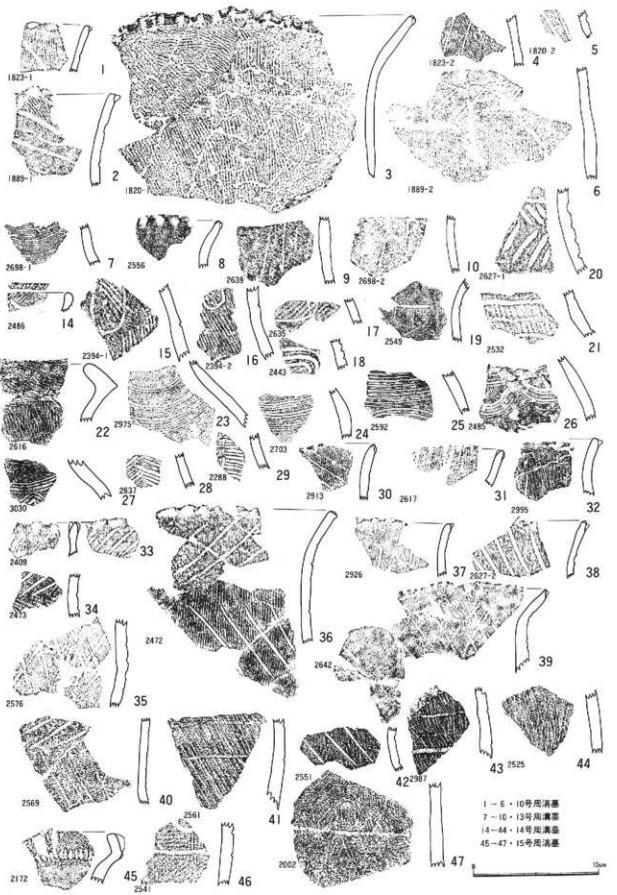


図58　周溝墓出土土器拓本２

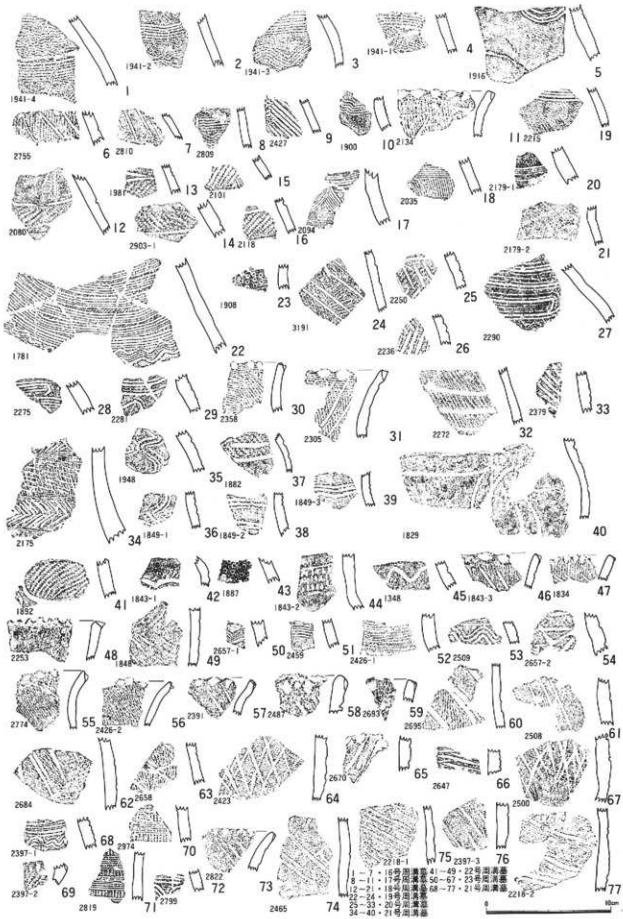


図59　周溝墓出土土器拓本３

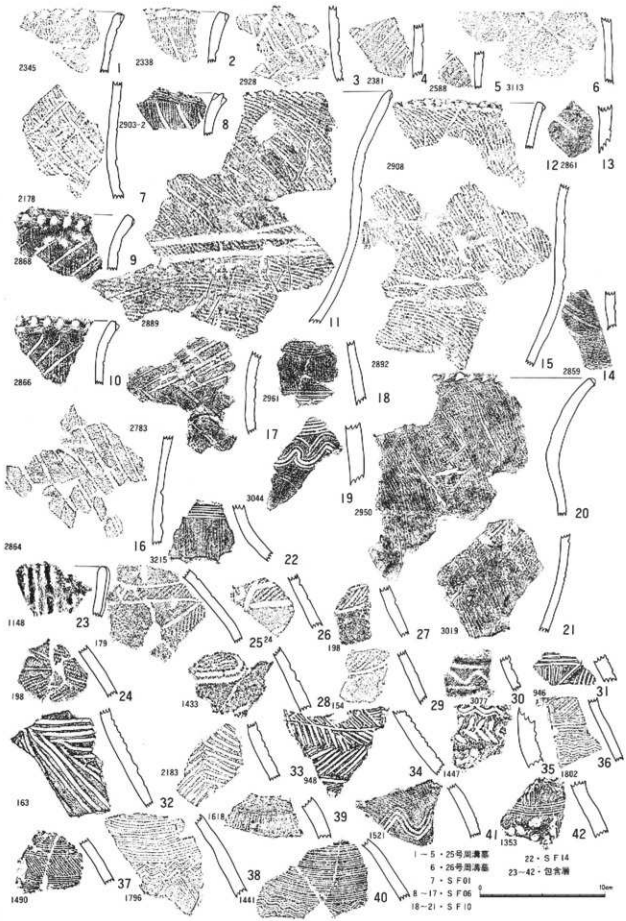


図60　周溝墓出土土器拓本4及び土坑、包含層出土土器拓本1

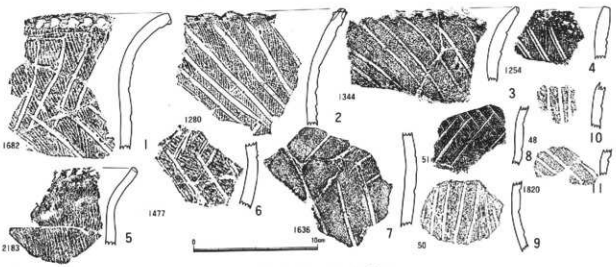


図61　包含層出土土器拓本２

・「工」字文も図57―13にみられ、また直線に三角形、直線に「ハ」の字に開くモチーフ（図57―７・８・17、60―25）と思われるもの、垂下するもの（図58―16）等が認められる。

施文具について

施文具は櫛、竹管、ヘラ、縄、刺突の棒状工具であるが、櫛と竹管は横位、波状の櫛描文のモチーフに用いられ、一方ヘラは複合鋸歯文、羽状文にみられ、縄文は「王、工、垂下、三角」に区画されたものに用いられる。これらのなかで、竹管文は各種文様のモチーフをもち、図57―25・59―68は横位と波状、図57―27・59―５は弧状に、図57―24は羽状、図57―28は複合鋸歯文のモチーフといえる。また、明確には判断できないが疑流水文とおもわれるものが２点（図58―27・28）あり、竹管によっているものと観察される。

また施文具の特定はできないが、竹管の１本の巾とほぼ同じものが３～４本で一単位となる工具を用いた文様が認められる。図59―53・60―19・58―26・60―41がそれに該当する。横位、波状、弧状のような櫛描文の系統のモチーフに多くみられる傾向がある。

甕

甕は全体が図示されたものが図53―６と図54―６の２点のみである。その形態は、胴者ともに口縁部は緩やかに外反し、胴部は全体が丸みをもって底部につながる。口唇部は刷毛工具による刻み目をもち、胴部は刷毛目を多く残している。図54―６では、胴部の一部にヘラによるナデ調整が認められる。以上の２点以外はすべて破片であり、基本的な形態として、台部の有無で大きく２つの形態に分けられるが、口縁部から底部までの形状の判明するものはごく少く、このような資料の制約から検討の対象は、形態より手法を主とし、口縁部の刻みの手法で便宜的な分類を行った。分類の結果、以下に記す４種類となった。

１）口唇部以内の両側から刻み目を入れるもの。図57―47、58―３、61―２等

２）口唇部の外側の斜め上方から刻み目を入れるもの。図60―11・19、61―１・３等

３）口唇部に直交して真上から刻み目を入れるもの。図58―36、60―20等

４）刻み目をもたないもの。図61―４

尚、先述した図53―６は２の手法、図54―６は３の手法によっている。口縁部の形態は、僅かに外反する図54―６の形態に近いもの（図58―36）や、かなり外反の強いもの（図58―39、61―１）、もある。しかし、胴部から底部にかけての形態は不明である。

甕の口縁部から胴部上半にかけてみられる文様は、ヘラによる羽状文といわれるものを基本とし、

表8　弥生土器観察表（A区出土を除く）

器種	挿図No.	図版No.	出土位置	計測値（cm）（）は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺	52－1		C区2号一東溝 No 3222	口径　11.2	・口唇部方形面取り ・口縁は緩やかに外反	・頸部内側に縦長の指頭圧痕あり ・施文は三本単位の横位扇状の櫛描の組合わせで五段あるいは、それ以上（肩部）	胎土…細粒多く含む 焼成…軟 色調…赤黄色	残存長 17.2
壺	52－2		C区2号一西溝 No 116	底径　5.3	・底部端外へ突出する		胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子多く含む 礫含む 最大6㎜程度 焼成…やや不良 色調…淡茶褐色	
壺	52－3		4号一東溝 No 216	口径　19.5	・口縁が緩やかに外反する	・口縁部外縁状工具の羽状文 ・口唇部内面に羽文	胎土…長石、砂粒、石粒の混合材を含む 焼成…堅 色調…淡褐色	
壺	52－4		C区6号一東溝 No 3 No 237 No 232	胴部最大径　17.1	・楕円形の胴部	・胴部外全体に荒い単位のハケ目 ・胴部外上位から頸部はハケ目のちナデ ・内部は粗のハケ目	胎土…砂粒、石粒の混合材を含む 焼成…堅 色調…淡黄褐色	
壺	52－5		C区6号一南溝 No 300	底径　6.8		・外面は縦のハケ目 ・内面は斜めのハケ目 ・底部指ナデ	胎土…長石、黒色粒子、砂粒を含む 焼成…良 色調…明赤褐色	底部½残存
壺	52－6		C区7号一北溝 No 226	底径　6.7			胎土…黒色粒子、赤色粒子白色粒子、金雲母を多く含む 焼成…良 色調…淡茶褐色	摩滅激しい 細部観察不可能 体部下半一底部½残存
壺	52－7		C区9号 No 1842	底径　（7.1）	・底部凹目痕		胎土…長石、黒色粒子、砂粒を含む 焼成…やや不良 色調…暗淡赤褐色	底部½残存
壺	52－8		C区9号一東溝 No 2	口径　（7.6） 胴部最大径　15.6	・長い頸部口縁は緩やかに外反 ・胴部はソロバン玉状	・無文 ・全体に磨滅し細部観察不能	胎土…礫多く含む 2㎜程度 焼成…軟 色調…淡赤黄色	残存良好 19.4
壺	52－9		C区9号一No 1 No 2061	底径　4.0 胴部最大径　7.6	・口縁部欠損 ・胴部は楕円形	・外面ヘラミガキ ・無文	胎土…細粒多く含む 焼成…良好 色調…淡明褐色 クリーム色に5かい	残存高 10.4
壺	52－10		C区10号 No 1890	口径　（8.6）	・口縁は緩やかに外反	・頸部外面に荒い縦のハケ目 ・頸部内側指痕圧痕	胎土…石粒の混合材を含む 焼成…やや堅 色調…淡明赤黄色	
壺	52－11		C区10号一南溝 No 2068	口径　（8.5）	・やや強く外反する口縁部 ・肩部はストレートに広がる ・以下欠損	・荒い縦ハケ目 ・頸部直下にヘラナデ三段 ・口唇部に刺突	胎土…黒色粒子、赤色粒子白色粒子を多く含む 焼成…やや不良 色調…淡茶褐色	口縁部一体部下半½残存
壺	52－12		C区10号一南溝 No 2057	胴部最大径　（40.4）	・胴部は球胴を呈する	・肩部半截竹管による扇状のヘラ描き	胎土…赤褐色粒子、黒色粒子、白色粒子 焼成…良 色調…淡褐灰色	磨滅激しい 胴部½残存

器種	挿図No.	図版No.	出土位置	計測値(cm)（）は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
甕	52—13		C区10号一南溝	口径 19.8	・口縁部の外反なく、ストレートに胴部に続く	・肥厚する口唇部は、断面三角形の工具による押圧	胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子 雲母含む 最大5mm程	磨滅激しい 口縁部～体部上半¼残存
壺	53—1		C区10号一南溝 No.1820 No.1952	底径 7		・底部木葉痕あり ・全面内面ナデ ・外面ヘラナデ、ハケ目一部残る	胎土…石粒の混合材を含む 焼成…堅 色調…淡明赤褐色	
壺	53—2		C区10号一東溝 No.1823 No.1928	底径 8.3	・底が厚い。通常の2倍	・内面ナデ ・外面ハケ目のちナデ	胎土…長石、砂粒の混合材を含む 焼成…堅 色調…淡灰褐色	
甕	53—3		C区10号一南溝 No.1820	底径 (7.4)		・外面ヘラミガキ	胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子を多く含む 焼成…やや不良 色調…茶褐色	底部¼残存
壺	53—4		C区10号 No.1822	底径 (7.75)		・底部網目痕	胎土…長石、黒色粒子を含む 焼成…良 色調…淡明赤褐色	底部¼残存
壺	53—5		C区10号 No.1936	底径 (8.1)		・底部網目痕	胎土…黒色粒子、赤色粒子 砂粒を含む 焼成…良 色調…淡明赤黄色	底部¼残存
甕	53—6		C区10号一北溝	口径 26.45 器高 27.65 底径 5.9	・口縁部緩やかに外反	・口唇部ささら状刷毛工具による不規則な刺突（斜め水平方向からの刺突） ・口唇部内側、刷毛工具の弱い押しつけ ・胴部外側斜めハケ目 ・胴部内面は上半横ハケ目 下半は指ナデ	胎土…砂粒、長石等の混合材を含む 焼成…堅 色調…淡明赤褐色 （スス付着）	
甕	53—7		C区11号一東溝 No.1824	底径 5.25			胎土…長石、黒色粒子、砂粒を含む 焼成…良 色調…淡明乳灰色	底部のみ残存
壺	53—8		B区14号一南溝 No.2514	底径 6.2		・底部網目痕	胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子、石英、金雲母を多く含む	底部残存
壺	53—9		B区14号一南溝 No.2587	口径 11.4 器高 31.8 胴径 21.1 底径 6.3	・楕円形の胴部 ・口縁はやや大きく外反	・胴部外ハケ目のちヘラナデ ・無文、底部木葉痕あり ・胴部内面ナデ器指頭痕よく残る ・口縁部外側強い横ナデあり	胎土…石粒(黒)の混合材を含む 焼成…良好 色調…赤茶色	½欠損
甕	53—10		B区14号	底部 (7.4)		・底部内面板状工具による横ナデ	胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子 雲含む 最大3.5mm 焼成…良 色調…淡茶褐色	外面にスス付着
壺	53—11		B区 No.2540	底部 (7.3)	・底部端が突出する ・わずか上げ底か？		胎土…白色粒子、黒色粒子 焼成…やや不良 色調…赤褐色（内面）、茶褐色（外面）	磨滅が激しい

器種	挿図No	図版No	出土位置	計測値(cm)（）は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺	53－12		15号一南溝 供献土器 №1210		・外に強くはり出す胴部 ・頸部はかなり細い	・施文 ・頸部から肩部にかけて四段のヘラ描きによる複合鋸歯文と三本の櫛による扇状文	胎土…細粒多く含む 焼成…良好 色調…淡褐色	
壺	53－13		B区15号一東溝 №2143 №2144	口径　(7.9)	・細首でやや大きく外反する口縁	・口容部の一部にハケ工具による刻み目あり	胎土…黒色粒子、赤色粒子、砂粒を含む 焼成…良 色調…淡明黄褐色	口縁部½残存
壺	53－14		15号一東溝 供献土器 №2932	底径　3.4 胴部最大径 9	・球胴呈する小型壺 ・底が厚く突出する	・角棒状工具による横水平からの斜交文 ・その下に下向きの弧を六分割で全周させる（弧は七本単位）	胎土…長石、礫など多く含む 焼成…軟質 色調…黄褐色	
壺	53－15		15号一東溝 №1966	底径　(6.7)		・木葉痕	胎土…長石、黒色粒子、砂粒を含む 焼成…やや不良 色調…明赤黄色	底部½残存
甕	53－16		16号 №2810				胎土…長石、黒色粒子、砂粒を含む 焼成…良 色調…明赤褐色	
壺	53－17		17号一北溝 №2902 供献土器	口径　7.0 器高　28.8 底径　7.7 胴部最大径 22.2	・球壁の胴部から、直立ぎみに口縁に続く ・口縁部わずかに外反 ・底部中央部わずかにへこむ	・胴中位にハケ目多く残すが、他はヘラ磨き ・胴部内側下半ていねいなナデ、上半は指頭痕を多く残す ・無文	胎土…良質 焼成…良好 色調…赤黄褐色	
壺	53－18		17号一西溝	底径　(6.2)	・底部わずかにくぼむ（上底風）		胎土…黒色粒子、長石、砂粒を含む 焼成…良 色調…淡明黄赤色	
壺	53－19		17号－北溝 №2907	口径　3.4 器高　9.3 底径　3.5	・最長の楕円形の胴部 ・口縁部はわずかに外反	・指頭押圧成形 ・外面全体ていねいなヘラ磨き ・無文	胎土…細多く含む 焼成…硬 色調…暗赤褐色	B－17とセット
壺	54－1		18号一西溝 №1979	底径　(5.6)			胎土…長石、砂粒を含む 焼成…良 色調…淡明赤褐色	底部½残存
壺	54－2		№1854	底径　(5.45)	・胴部は直線的に開く		胎土…長石、砂粒を含む 焼成…良 色調…淡明赤褐色	底部½残存
壺	54－3		20号 №2285	底径　(6.9)			胎土…長石、黒色粒子、砂粒を含む 焼成…やや不良 色調…明赤色	底部½残存
壺	54－4		20号 №2263	底径　(6.65)		・底部付近をていねいなヘラ描け	胎土…黒色粒子、赤色粒子長石、砂粒を含む 焼成…良 色調…明褐色	底部½残存
壺	54－5 供献		21号一北溝 一東溝 №2986	口径　9.6 胴径　16.75	・球胴を呈する胴部に大きく開く口縁部	・胴部下半にハケ目残す ・施文は肩部 ・竹管の横位斜交文 （不規則な二段か？） ・斜めのすり消し縄文帯と円形貼りつけ文を一単位とし、全周が五単位からなる	胎土…砂粒の混合材を含む 焼成…やや堅 色調…淡明赤褐色	

器種	挿図No.	図版No.	出土位置	計測値(cm)（ ）は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
甕	54－6		21号－北溝 No. 2829	口径 (18.1) 器高 20.2 底径 (5.8)	・口縁部は緩やかに外反 ・胴部は緩やかに丸みをもち、突出する底部に続く	・ハケ目後ヘラナデ （胴下半に多い） ・口縁部内斜多いハケ目 ・胴部内調ナデ ・口唇部ハケ工具による刻み目 （口唇に直交する方向から）	胎土…4㎜までの砂粒 焼成…良 色調…淡暗赤褐色	
甕	54－7		21号－西溝 No. 1904	底径 (7.5)	・ハの字に大きく開く低い台		胎土…黒色粒子、赤色粒子を多く含む 礫、白色粒子含む 最大3㎜ 焼成…やや良 色調…淡茶褐色	底部～脚部¼残存
壺	54－8		22号－東溝 供献土器 No. 2253	口径 (11.6) 器高 (39.1) 胴部 (27.1) 底部 (8.1)	・口縁部は緩やかに外反 ・胴部球形	・口頸部指取 ・ほぼ左右対称 ・ハケ目後ナデ（一部に板状工具を使用） ・施文類部と胴部に全周する刺突文（棒状工具により水平で器面に直交する） ・底部周辺はハケ目をほとんど消している	胎土…石粒砂粒混合材 焼成…良好（胴中位よりスス付着） 色調…明黄褐色	
高坏	54－9		22号 供献土器 No. 2254		・体部は直線的に開き、口縁部でやや水平となる	・口唇部およびつばの部分縄文を施す ・全体にていねいなナデ ・歪み大きい		
壺	54－10		23号－北溝 No. 2417 No. 2489 No. 2555		・脚長く厚みのある底部		胎土…黒色粒子、赤色粒子白色粒子、礫を多く含む。最大5㎜ 焼成…やや不良 色調…明赤褐色	
甕	54－11		23号 No. 2684	底径 (7.6)	・胴部から底部にかけて強く突出する ・胴部の立ちあがりが非常に厚い		胎土…長石、黒色粒子、砂 焼成…やや不良 色調…淡明黄褐色	底部½弱残存
壺	54－12		24号 供献土器 No. 3062	口径 6.6 器高 24.8 胴径 20 底径 5.4	・口縁部わずかに外反する ・細頸 ・胴部最大径は下半にありソロバン玉状を呈する ・底部上げ底	・全面にていねいなヘラ磨き丹塗り ・肩部に櫛描文わずかに残る	胎土…砂粒の混合材を含む 焼成…やや堅 色調…明赤褐色、口縁と胴部下位に丹塗り	器面剥離
甕	54－13		24号－東溝 No. 2415	底径 (6.8)	・底部から直線的に開く胴部をもつ	・内外面共にナデ 一部ハケ目残す ・底部網目痕	胎土…黒色粒子、赤色粒子白色粒子、礫 最大4㎜ 焼成…やや良 色調…淡赤褐色（外面） 淡茶褐色（内面）	
壺	54－14		24号－西溝 No. 2827	底径 (8.2)	・やや突出する底部で胴部はやや直線的に開く	・底部木葉痕あり	胎土…長石、黒色粒子、赤色粒子、砂粒を含む 焼成…やや不良 色調…明赤灰色	底部½残存
壺	54－15		24号 No. 2218	底径 (4.0)	・底部上げ底		胎土…黒色粒子、砂粒を含む 焼成…やや不良 色調…淡明灰褐色	底部のみ残存

器種	挿図No.	図版No.	出土位置	計測値（cm）（ ）は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
甕	54—16		24号一西溝 No. 2827	底径　8.4			胎土…黒色粒子、白色粒子 焼成…良 色調…淡茶褐色	
壺	55—1			口径　7.5 器高　22.0 底径　6.6 胴部最大径 17.6	・胴部張り出しが強くソロバン玉状 ・頸部は細頸で口縁部はやや大きく外反 ・底部上げ底	・施文 ・胴部から胴中位まで六本単位の櫛による横線及び弧状の櫛描き ・下から四段目までは四分割で全周する	胎土…細粒多く含む 焼成…軟質 色調…淡赤黄色	
壺	55—2		25号周溝東側 No. 2588	胴部最大径 40.4	・胴部が強く張り出し、直線的に頸と底部に至る	・ハケ目後は未調整 ・胴部に横位のヘラナデ（三段）あり	胎土…長石、砂粒を含む 色調…淡褐赤褐色	一括破棄
壺	55—3		25号周溝東側 No. 2930	底径　7.1 胴部最大径 18.4	・細長い楕円形の胴部か	・ハケ目わずかに残しナデ ・胴部から肩内側、指頭圧痕よく残る	胎土…細粒、小礫多く含む 焼成…軟質 色調…赤褐色（橙色の赤いの）	一括破棄
壺	55—4		25号周溝東側 No. 2930		・細長い楕円形の胴部か	・ハケ後ヘラ磨き	胎土…黒色粒子、白色粒子 焼成…良 色調…赤褐色	一括破棄
壺	55—5		25号 No. 2928	口径（11.0）	・太頸でやや外反する口縁部	・全体をナデ ・口唇部に縄文	胎土…1㎝までの礫、長石黒色粒子、砂粒を含む 焼成…やや不良 色調…明赤褐色	一括破棄
壺	55—6		26号 No. 3140	底径　（8.0）	・やや突出する底部		胎土…黒色粒子、砂粒を含む 焼成…良 色調…淡明黄褐色	底部殆残存
壺	55—7		27号 供献土器	口径　7.4 器高　11.5 底径　5.0 胴部最大径 8.8	・胴部球状 ・頸部は太くやや外反する口縁	・胴部中位はハケ目を多く残し、上はヘラ磨き下はナデ	胎土…細粒を多く含む 焼成…やや硬 色調…淡明褐色 クリーム色に近い	器面磨滅激しい
壺	55—8		B区SF—01 No. 2039 No. 2062	口径　（9.25）	・細頸で強く外反する口縁部	・口唇部面取り ・頸部、横位に波状の櫛描文あり ・口縁部外側わずかにハケ目残る	胎土…黒色粒子、赤色粒子砂粒を含む 焼成…良 色調…淡暗赤褐色	
壺	55—9		B区SF—03 ﾊﾟﾈﾙG—6 No. 2154	口径　（19.7）	・太頸で大きく外反する口縁部	・ハケ目後ヘラによる羽状文（上から下方向逆「く」の字） ・口唇部に櫛毛工具による刻み目（器面に対して直交する方向より） ・内側横ハケ目	胎土…黒色粒子、長石、5.5㎜までの砂粒を含む 焼成…良 色調…淡明赤黄色	
壺	55—10		B区SF—10 No. 2972 No. 2963 No. 2961	口径　13.4	・太頸で口縁部やや外反	・全体ヘラ磨き ・口唇部指頭押圧の刻み目	胎土…砂粒、長石、石英の混合材を含み粗い 焼成…やや堅 色調…淡黄色（外面） 明赤色（内面）	
壺	55—11		C区SF—06 No. 3165	底径　5.8 胴部最大径 17.2	・細長い楕円形の胴部 ・頸は太い	・胴部ハケ目後ヘラ磨き	胎土…細粒多く含む 焼成…軟質 色調…淡赤黄色	内面剥滅激しい
壺	55—12		B区F17、SF14 P615 No. 3212		・細頸でわずかに外反する口縁部	・ハケ目一部残し、横のヘラナデ ・内面口縁部静止ナデ指頭押圧痕		

器種	挿図No.	図版No.	出土位置	計測値(cm)( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
?	55—13		C区SP—04 No.3161	底径 (6.7)	・底部から直線的に開く胴部		胎土…長石、砂粒を含む 焼成…やや不良 色調…暗淡褐色	
壺	55—14		B区SP—09 No.3050	底径 6.9	・底部端尖がる	・底部木葉痕	胎土…石粒の混合材を含む 焼成…堅 色調…淡明赤黄色	
壺	55—15		C区 No.1816	底径 (8.8)	・底部から弧状に大きく開く胴部		胎土…砂粒を含む 焼成…やや不良 色調…淡明赤褐色	
壺	56—1		C区 No.1927 No.1877	口径 14.1	・大きく外反する口縁部 ・口縁部肥厚	・口唇部と口縁外面に縄文を施す	胎土…石粒の混合材を含む 焼成…もろい 色調…赤褐色	器面、磨滅激しい
壺	56—2		B区第Ⅱ層 No.1536	口径 7.5	・わずかに外反する口縁部	・頸部内面指頭押圧痕	胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子、雲を多く含む 最大6㎜ 焼成…良 色調…明淡赤褐色	
壺	56—3		B区 No.3070	口径 (8.6)	・口縁部やや外反	・外面ヘラナデ ・内面斜めナデと頸部工具によるナデ	胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子を多く含む 焼成…やや良 色調…淡茶褐色	
壺	56—4		C区 No.1212		・外反する口縁部	・全体にていねいなナデ後全面丹塗り		
壺	56—5		B区第Ⅱ層E20 P65 No.1251		・口縁部直立し、先端ですぼまる	・口唇部面取り	胎土…良好 焼成…良 色調…淡褐色	全体磨滅激しい
甕	56—6		B区—E No.2428	底径 (6.8)	・底部から直線的に開く胴部	・外面ハケ目後ナデ ・底部網目痕	胎土…黒色粒子、砂粒を含む 焼成…良 色調…淡暗灰褐色	
壺	56—7		B区第Ⅱ層E—19 No.1445	底径 5.0			胎土…砂粒(3㎜) 黒色粒子(4㎜) 白色粒子、赤褐色粒子 焼成…良 色調…暗橙色	
	56—8		B区23号—南溝 No.2349	底径 (6.6)		・内面横ハケ目	胎土…黒色粒子、白色粒子 焼成…良 色調…赤褐色	
壺	56—9		B区第Ⅱ層 No.1466	底径 (5.4)	・底部から弧状に開く胴部		胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子を多く含む 焼成…やや良 色調…淡赤褐色(外面) 茶褐色(内面)	
壺	56—10		B区第Ⅱ層 C—15 P401 No.1636	底径(復元径) 7.4	・底部端尖がる	・底部凸凹あり	胎土…白色小石、赤褐色粒子、砂粒、白色粒子 焼成…軟、断面 色調…淡赤(外面) 淡灰(内面)	磨滅激しい
壺	56—11		B区第Ⅱ層 No.1606	底径(最大径) 8.3	・底部から直立ぎみに胴部に続く	・底部木葉痕	胎土…砂粒、白色粒子(2㎜) 焼成…軟、断面黒斑有 色調…淡橙灰色	全体磨滅激しい

器種	挿図No.	図版No.	出土位置	計測値(cm)（ ）は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
壺	56—12		B区第Ⅱ層 No.1559	底径(復元径) 7.8	・底部から直線的に開く胴部	・底部わずかにへこむ	胎土…砂粒(3㎜)、白色粒子、赤褐色粒子 焼成…やや良、黒斑あり 色調…淡褐灰色～赤褐色	全体に磨滅激しい
壺	56—13		B区第Ⅱ層F—20 No.1462	底径　6.2	・底部から弧状に開いて胴部に続く	・外面横ヘラ磨き（上から下へ） ・内面横位、斜位のヘラ磨き	胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子 焼成…良 色調…淡茶褐色	
壺	56—14		B区第Ⅱ層D—19 No.1297	底径　6.7	・突出する底部から屈折して直線的に胴部へ続く	・外面ハケ目良好に残る ・底部木葉痕	胎土…赤褐色粒子、砂粒 焼成…良 色調…淡橙色	
壺	56—15		B区第Ⅱ層 No.1716	底径　5.8	・底から直線的に胴部へ続く		胎土…砂粒、白色粒子 焼成…良 色調…淡灰褐色（内面） 淡橙色（外面）	磨滅激しい
壺	56—16		B区23 No.2683	底径　(5.9)	・底部から直線的に胴部へ続く	・底部周辺指頭ナデによる圧痕 ・ハケ目良好に残る 内面ハケ目一部残しナデ	胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子多く含む 雲含む（最大4㎜） 焼成…良 色調…茶褐色（内面） 濃茶褐色（外面）	
壺	56—17		C区C—2第Ⅱ層	底径　(10.2)	・底部周辺が大きく開く胴部 ・底径が大きい	・底部木葉痕	胎土…赤色粒子、白色粒子 焼成…やや不良 色調…茶褐色（外面） 灰褐色（内面）	磨滅激しい
壺	56—18		B区F1946 No.1906	底径　(8.6)	・底部からわずかに弧状の胴部に続く	・底部木葉痕	胎土…黒色粒子、長石、砂粒を含む 焼成…やや不良 色調…淡明黄赤色	
壺	56—19		B区 No.3020	台口径　10.1	・やや外に開く低い台 ・台内側端部尖がる	・内面底部放射状のヘラ磨き ・台部内面先端が丸い工具による刺突ナデ	胎土…雲多く含む 焼成…軟質 色調…明黄色	
壺	56—20		C区No.19Ⅲ面 No.3261	高台径（8.2）	・ハの字に開く低い台部		胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子、雲 （最大4㎜） 焼成…やや不良 色調…赤褐色	磨滅激しい

図58—35、59—64、60—1のような格子状になるものがある。また図61—4のように、羽状文に竹管を用いて施文するものも認められる。図60—11・15には指による全周すると思われる横位のナデが認められる。この手法は全体的には出現率は低いが、これらの甕の一手法として確実に伴うものといえる。

刻み目、及び胴部文様の施文具は壷より種類は少なく、刷毛工具、ヘラ、棒状工具、指、竹管である。口唇部の刻みに現れる刷毛工具を除き、これらは口唇部刻みと胴部の両者にもちいられており、口唇部は刷毛工具、棒状工具、指が多用され、一方胴部の文様にはヘラが多用される。平行線をもつ工具として竹管を用いているのは、図61—4の一点のみである。

壷の底部の検討のなかで、底部から胴部への立ち上がりが殆どないものをあげた。これは図54—11であり、刷毛目がみられないことから壷の底部とも考えたが、白岩式の甕のなかに胴部の強い屈曲が底の高さに近い位置まで下がるものがあることから、これに類似した甕の底部とも考えられる。

高坏

高坏は22号周溝墓に伴った図54—9の一点であり、破片のなかにも高坏と考えられるものは見当たらなかった。脚部を欠損するが、坏部の口径は23.8㎝を計る。

その他不明の破片

図57—31は、破片の断面が直線的で、器面は細かい縦方向の刷毛調整をうけている。大きさからも壷の口縁部ではなく、甕の刷毛調整とも異なっている。大型の器形で、鉢のようなものかと考えられる。

能島遺跡の弥生土器は以上のような状況であり、壷は頸部が太く、口縁部が短く開きが弱いもので、球胴か、縦長の楕円形を呈する形態が優位にあるといえる。またこれらは、文様との関連性も認められるようであり、一部文様を持つものも極端に簡素化されており、むしろ当初から文様を持たない無文土器の群に含まれるという推定が得られる。

文様については、各種のモチーフと施文具が認められるが、櫛描文が圧倒的に多く、ヘラと縄文を主体としたものがそれに続いている。特殊なものとしては、文様よりむしろ記号と思われるが、図58—12ではヘラで区画された縄文帯の上に、ヘラにより「ハ」の字とその中央部に縦線を入れたものがある。これは白岩式の土器に見られるワンポイントのモチーフであり、1点のみ出土している。

A区出土の弥生土器　(図65—4～6)

A区からの弥生土器の出土は多いが、河川の礫と共に運ばれてきたものであり、殆どが細片でかつ摩滅している。従って器形不明に加えて、文様、刷毛目等消失しているが、焼成、胎土のなかの混入物の多少等から一応他の時期のものとの分離を行った。器形は壷が圧倒的に多く、単純口縁、複合口縁、折り返し口縁等がみられ、棒状の貼り付けを持つものもある。底部の形態は最大径が下がるものが多く認められるようである。多くの土器片のなかから3点を図示した。

4は細頸壷の頸部であり、摩滅が著しいため細部の観察は不能である。5は口径部が大きく開き、胴部下半が強く屈曲する比較的小型の壷であり、後期のもので、口径8.7㎝、底径6㎝、器高12.5㎝を示す。6は複合口縁の壷で、口縁には棒状の貼付文が認められる。

全体的な傾向としては、一部に中期的な要素をもつ破片もみられるが、後期が主体を占める。従って、これらの土器群を出土する遺跡はこの周辺と考えられるが、本遺跡のBC区の墓域にともなう土器との時期的な関連性はないと判断される。

B）石製品（図62、図版41）

石製品は図62の9点を図示したが、そのなかの4は今回の調査での出土ではなく以前に砂堆の西端から出土し、能島遺跡調査の発端となったものである。小型で両刃の磨製石斧で、長さ6.7㎝、刃部

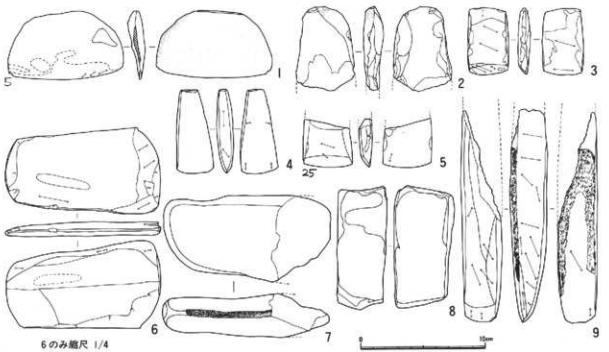


図62　ＢＣ区弥生時代石製品実測図

巾2.9㎝、頭部巾1.4㎝、厚みは1.2㎝あり、茶色味のかかった珪質頁岩を使用する。縄文時代の石斧に類似している。

4を除く8点がＢＣ区の周溝墓の溝からの出土であり打製石包丁、偏平片刃、柱状片刃石斧と砥石とおもわれるもの等がみられる。各々の出土位置は、1・9（6号周溝墓）、2（20号周溝墓）、3（23号周溝墓）、5（14号周溝墓）、6（15号周溝墓）、7（20号周溝墓）、8（25号周溝墓）で、1・3・6・8は完形品である。

1の石包丁は砂岩を用い、裏面は母岩の自然面で、一方は母岩からの一次剥離面を多く残している。細部の加工は丸い台形状の周囲と、表面の凸凹を研磨するのみである。図に示した破線の範囲が研磨されるが刃部周辺は使用によるものである。図の矢印の位置に使用痕が認められる。表面の右上の部分が厚みをもつが他の部位は均一に薄く偏平である。計測値は縦5.4㎝、横9.3㎝である。

石斧は4を除いて4点出土している。完形の3は小型の偏平片刃であり、長方形を呈し、全面研磨され、縦5.3㎝、横3.3㎝、厚み1.0㎝を計り、刃部は0.8㎝の位置から研ぎ出される。左右の側面は直角の面となり、表裏ともに表面が一部剥離する。頭部にあたる部分にも研磨した面があり、その端部はやや厚みをもつが刃部の加工と類似する。両端を刃部として使用した痕跡が認められ、石材は珪質頁岩である。

5は偏平片刃の刃部周辺の破片である。形態は長方形と思われ、刃部巾3.9㎝、本体の厚み1.1㎝、残存長3.7㎝で、1.0㎝の位置から刃部の研磨がはじまり、その稜線は丸みをもっている。左右の側面の研磨は丸く表面の稜線は4より弱い。従って頭部を除く本体の断面は蒲鉾状を呈する。石材は粘板岩（頁岩）を使用している。

2は母岩の自然面と一次剥離面を多く残し、研磨痕跡はみられない。図の右側に偏平な面が広くみられることと、大きさからみて3・5よりやや大きい偏平片刃石斧の未製品であろうとおもわれる。残存長6.7㎝、最大巾4.6㎝を示す。

9は柱状片刃石斧の破片で、一部に敲打痕を残し全面研磨され、刃部は丸みをもっており弱い稜線がみられる。左右の側面はやや表に向かって巾が狭くなり断面は台形状となる。刃部巾2.4㎝、本体の巾3.1㎝、厚さ2.9㎝を計り、頭部を欠損し残存長17㎝である。石材は礫岩を用いている。

8は形態が長方形、角柱状のもので、図示した左の裏面は剥離面を顕著に残し、また上下の小口面も使用痕がないのを除き、広口の3面が研磨される。その3面の状態は一様でないが形態、研磨の状態から砥石と思われる。完形で長さ9.7㎝、巾4㎝、厚さ4.8㎝であり、砂岩を使用している。

9と同じ砥石と推定されるのが6・7である。6は両側端が丸みをもち一方がやや巾の狭くなる形態で、一部剥落するが完形品である。長さ12.5㎝、最大巾6.9㎝、偏平で均一な厚みをもち1.1㎝を計る。両面側端ともに全面研磨されるが直線を呈する側面の片方はやや厚みがあり面取りされるようであるが、一方その反対側はやや尖るような形状である。特に研磨された痕跡が強く残るのは両面と尖った側面部であり、両面には長さ4.4㎝、巾0.8㎝の溝状に窪む部分もある。砂岩という比較的軟質の石材であることも加味して砥石と考えた。断面の形状が三角形であるが6と同じような形態、研磨の状況である7も砥石と考えられる。これは自然の円礫をそのまま使用しているが両面に研磨の痕跡が顕著にみられる。一部欠損するが残存長13.3㎝、最大巾6.8㎝、最大厚3.4㎝であり、砂岩製である。

第3節　古墳時代及び奈良時代の遺物

古墳時代から奈良時代にかけての遺物といえるのはすべてがA区からの出土であり、土師器、須恵器が認められる。出土量は極めて少ない。

土師器（図65－7～9）

これらの遺存状態は先述したA区出土の弥生土器と同じ状況であり、時期的な検討に堪えうるものは極端に少ない。器形としては、壺、甕、高坏、手づくね土器等が認められるようである。これらのなかから3点を図示した。

7・8は高坏の脚部で、7は丸みをもって「八」の字に広がり、8は上部の開きが弱く接地部付近で急角度に広がっている。7は赤褐色を呈し胎土も精選されているが、8はやや焼成が軟質で明褐色を呈する。9は手づくねの完成品であり、内側に指頭の荒いナデ調整が明瞭に残されている。外側も指頭のナデ調整によると思われるが摩滅している。口径6.4㎝、器高4.2㎝を計る。奈良時代と思われる土師器も僅かに無高台のものが認められるが、底部のみの破片であり、点数も少なく図示できなかった。

須恵器（図65－10～15）

古墳時代の須恵器は10の坏で、1点のみ図示した。底部の殆どを欠損しているが、蓋受けの立ち上がりは弱く、推定口径8.6㎝、器高2.8㎝である。またこれに先行する蓋受けがほぼ垂直に立ち上がる形態の破片も数点出土している。

奈良時代と判断されるのが11～15であり、高台坏と無高台坏がある。15の高台坏は底部が大きく突出するもほぼ、体部下半が丸みを帯び大きく開く。7世紀末～8世紀初頭の指標とされる坏である。13の形態は箱坏に高台がついたもので、15の高台坏とは明確な時期差が認められる。体部はやや直立気味で底部と体部の境は明瞭であり、高台内側までヘラ削りを行い高台を付けている。摩滅が激しいため細部の観察は容易でないが形態からみて8世紀後半に位置付けられる。

11・14は無高台の坏で、両者ともに底部端から体部への立ち上がりが丸みを帯び、直線的に口縁部に至るものである。底部切り離し手法は摩滅のため確認できない。また、12は、先の2点とは形態、法量が相異しており、大きい底部から体部が直立気味に立ち上がる箱坏である。底部と体部の境は丸みを帯び、底部端はヘラ削り調整がされるようである。

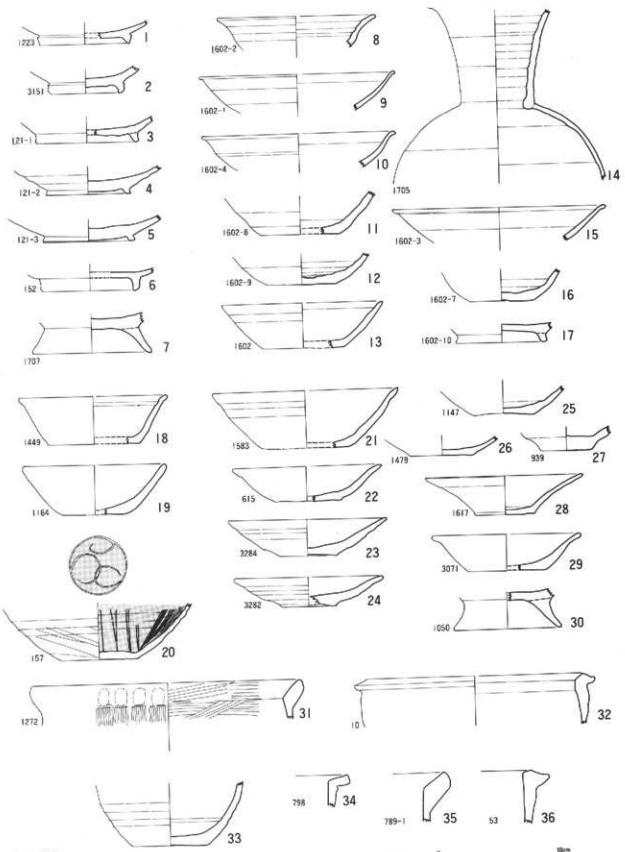


図63　B・C・E区平安時代遺構、包含層出土土器実測図

第4節　平安～中世・近世の遺物

平安時代及びそれ以降の遺物について概要を述べるが、遺物からみて二つのピークのあることが認められる。それは平安時代の後期、灰釉陶器の折戸53号窯式期から山茶碗のひしゃげた低い高台をもつ段階までの間と戦国時代の末、15世紀頃である。これは各々の遺構の分布、配置関係からみてもほぼ一致している。以下に遺物について、A）土器、B）土製品、C）石製品、D）木製品、E）金属製品、の順に記していく。

A）土器

土器類は灰釉陶器、緑釉陶器、土師器、山茶碗、輸入磁器、陶磁器等が出土している。総出土量はテンバコで30箱程度であるが、出土量をみると最も多いのが灰釉陶器、次いで山茶碗、陶磁器、平安時代の土師器の順となる。緑釉陶器はA区の河川跡から4点出土している。

灰釉陶器（図63～65、図版42・43、表10）

灰釉陶器はA区出土のものを除いて形態、計測値、手法等は表10にまとめてみた。器種は碗、皿、壷がみられるが壷はごく僅かである。（註3）従って碗、皿の記述を主とし、最後に壷について触れることとする。碗、皿については高台から口縁部まで残るものが少ないため、高台の形状を中心として見てゆくこととする。高台の形状は大まかに、方形の整った高台、三日月高台、三日月高台の退化形態、三角形高台、「ハ」の字に開きやや高い高台、その他の高台に分けられる。（註4）

・方形高台

このタイプはC区ＳＥ０１覆土中（図63－４・５）より２点、A区より２点（図65－10・11）出土している。口縁部まで復元できたA区の図65－10は、丁寧に面取りされた方形高台をもち、体部は緩やかに開き、口縁部は僅かに外反する皿である。体部の回転ヘラ削りは上半にまで達し、底部はヘラ切りしている。施釉は内面の全体に淡緑色に発色するが、全体に摩滅が激しく釉も一部剥落する。計測値は口径15㎝、高台径7.6㎝、器高2.6㎝である。図65－11もA区から出土した皿の底部周辺の破片である。高台は10と比較して端部外側が尖り気味でやや低い。内面に濃緑色の釉が発色しトチンの痕跡が残っている。高台の径は7.8㎝である。

C区ＳＥ０１出土の図63－４・５はA区と同じ皿とおもわれ高台の形態、手法等類似する。４は底径6.8㎝、５は7.4㎝を計測する。

・三日月高台

三日月高台と判断されるのは３点（図64－３・10、図65－12）で、全体の器形が知れるのは12の碗１点のみでA区の出土である。これは高台端部の内外がナデにより尖って作りだされるもので体部の下半が丸みをもって僅かに外反する口縁部に続く。重ね焼き痕が認められ、施釉は内面のみ斑点状で濃緑色に発色し、全体に摩滅する。法量は口径15.7㎝、底径6.6㎝、器高4.4㎝である。10は小皿か小碗で高台端の径は3.9㎝、３は高台内側の強いナデによる尖りが顕著にみられる。

三日月高台の退化形態

三日月高台にみられた高台外側の面取りと、内側の強いナデにより端部が尖る手法の退化形態と認められるもので、図64－２のようにやや三日月高台の形状を残すものから図64－９のように高台内側端部が僅かに内傾し、外に弱い稜をもつものまでをこのタイプとした。図64－２・４・９の３点を図示した。いづれも底部周辺の破片であり、全体の形状は不明である。４・９には重ね焼き痕がみられる。

・三角形高台

高台の断面が三角形を呈するもので、図64－14・15、図65－15がその典型的な形状を示している。

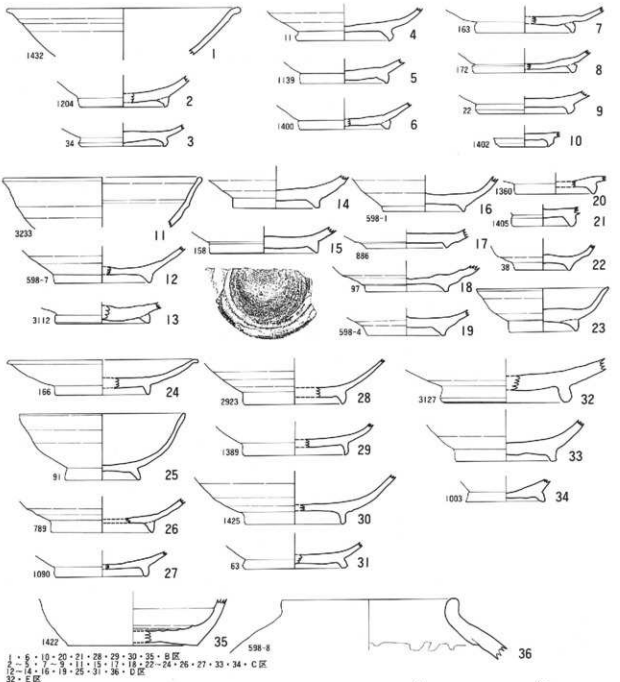


図64　各区包含層出土灰釉陶器実測図

このタイプに含められるものが図示したなかでは最も多く、図63—1、図64—5～7・12～23、図65—14～16の19点を数える。遺構に伴うものが1点あり図63—1がC区SD03より出土する。

全体の形状が判明するA区出土の碗（図65—14・15）をみると、両者ともに高台、体部の形態及び、法量が類似するが、口縁部の引き出しが強いため14は外反し、15は直線的に端部にいたる。14は無釉、15は体部内面濃緑色、外は淡灰白色に発色する。口径、高台径、器高は14が12.7㎝、6.6㎝、3.6㎝で15は13㎝、6.7㎝、4.2㎝を計る。なお14には見込み部に墨痕がみられる。

この三角形高台には典型例としてあげた形のほかに、高台の内外の側面が丸味をもっているもの（図64—7・20・21）があり、高台接合の際、図64—18のように底と高台の境がないようにナデているものもある。典型的なものと、丸みをもつものは法量にも類似性があり、前者の底径は6㎝～6.7㎝の

付近に集中し、また後者はやや大きく、7㎝～7.6㎝に集中する。

これらのなかには小椀も含まれており3点が図示された（図64—21～23）。21・23は高台側面が丸みをもち、また23では図64—18で指適したような底との境がないものである。23で全体の形をみると、体部は丸みをもって急角度に立ち上がり、直線的な口縁部に続く。口径10.6㎝、底径5.6㎝、器高3.5㎝で、大きなものとしてあげた図65—14・15と比較して、器高にはあまり差がみられない。

手法には重ね焼き痕がみられるもの、底部は糸切り離し、ヘラ切り、ナデ調整等、また施釉は確実に無釉のもの、灰白色の釉が僅かに残るもの等、様々な手法が認められる。

「ハ」の字に開きやや高い高台

このタイプはA区河川跡から3点（図65—17～19）とC区包含層から1点（図64—25）が出土している。全体が図示された25はやや高い「ハ」の字の高台で、体部は丸みをもって立ち上がり直線的に口縁部に至る。口縁端部は丸い。無釉で底部は回転糸切り離し、法量は口径12㎝、底径5.8㎝、器高5.3㎝を計る。口径、底径に比較して器高が高い深碗の形態を持っている。

最も高い高台は図65—18で、底までの高さ1㎝あり、またこれは、高台接合時の外側のナデが大きく内側に入り込み、体部下半は回転によるヘラ削りがされている。底部は回転ヘラ削り、無釉で底径7.9㎝、色調は灰白色を呈する。17、19は高台が同一の形態、底部回転糸切り未調整、無釉であり、底径も7.6㎝と7㎝で近似しているが、同じ高台の形態をもつ図64—25は法量が小型で、底部は5.8㎝を示している。図65—17～19も深碗であろうと思われる。

・その他の高台

基本的には長方形、台形状のものであるが個々に差があるため、その他として扱った。従ってなかには今まであげてきたいづれかの形態に属するものも含んでいる可能性がある。特に細分されたなかの1のグループは胎土、色調等の特徴からみて方形高台、三日月高台が退化し変形したものと考えられ、また3のグループとして扱ったものは三角形の高台内外の側面が丸みをもった肉薄のものであるとも考えられる。しかし、三角形の形態のグループは肉薄の高台を持たないことも分類上の一要素と考えたことから、これは長方形のもので高台が薄く先細りするものとした。

1点のみ全体が判明する皿がある。図64—24で細分の2に該当し、体部は僅かに丸みをもち口縁部端を強く外へ引き出す。重ね焼き痕が見られ、底部ヘラ切り、釉は内面にみられ濃緑色に発色し斑点状である。胎土は灰白色で、青味の強いその他の高台としたものとは異なっている。口径15.3㎝、底径7.6㎝、器高2.8㎝である。

検討にあたり、1点を除きすべて底部付近の破片であるため、高台の様々な形態について以下に整理してみる。

このグループを細分すると、1）やや厚みがあり直立した長方形のもの（図63—6、65—20）、2）1の高台の端部がやや先細りとなるもの（図64—24・27）、3）高台が薄く先細りするもの（図64—26・28）、4）高台が薄く端部が丸くなるもの（図64—29・30）、5）長方形の高台が外に開くもの（図64—31）、6）高台の接地部が平坦に作られるため台形状を呈するもの（図64—33・34）等に細分されるが、バラエティに富んでいるため各々個々に異なっているような印象を受ける。しかし、確認されたなかで手法をみると、重ね焼き、無釉が多いことが認められる。

細分のグループと法量の関係は1が底径7.8㎝、2は7.5㎝前後、3・4は8.1㎝前後、5が8㎝、6は33が7.9㎝、34が6.3㎝である。これらの数値をみると、1～5は0.3㎝巾のなかに収まり同一形態、同一法量の傾向がある。しかし、比較点数が少なく傾向としてあげておく。

図64—32は底径10.6㎝でその大きさからみて大碗とおもわれる。なお遺構に伴うものが1点あり、図63—6がC区ＳＸ05より出土している。

・壷

壷は長頸壷、短頸壷、底部破片の３点が出土している。いづれも破片であり全体の形状の知れるものはない。

長頸壷（図63—14）はＣ区ＳＸ20より出土し、胴上半と頸部を残す。胴は半球形を呈し、頸の開き方は弱く、外全面に刷毛塗りされる。短頸壷（図64—36）はＤ区より出土し、口径14㎝、胴部と頸部の境がなく直立して口縁端にいたる。底部は図64—35で、無高台底の径は14㎝を計る。

以上、灰釉陶器について概略を検討してみたが、その所見をまとめてみる。

高台の形態分類したものを時期比定すれば、方形高台は黒笹14号窯式期、三日月高台は黒笹90号窯式期、三日月高台のものは折戸53号窯式期、「ハ」の字の高台の深碗は東山72号窯式期の特徴を表している。従って方形高台と三日月高台の２点（図64—３、図65—12）は猿投窯の製品である。しかし、灰釉陶器生産は、黒笹90号窯式期の段階から産地が拡散し、静岡県内でもこの段階から生産が始まっていると考えられる（註１）。従って、今まで検討してきた分類のなかで三日月高台の退化する形態としたタイプから以降はその製品の産地の比定が年代観に絡んでくることになる。

小笠郡大須賀町清ケ谷窯では宮東窯式とされる特徴のなかに三日月高台がある。従って先に分類した三日月高台のもの以降が猿投窯から産地が拡散した段階の可能性もある。いづれにしても三日月高台の退化形態のものを安定して生産するのは県内ではこの清ケ谷窯であり、その後も「ハ」の字の形態のものまでは安定した生産がみられる。これより後出の窯として、島田市旗指窯などが成立するが、今まで見てきた灰釉陶器の形態変化はこの清ケ谷窯の形態変化とかなり類似している。勿論、個々の製品の比較検討が大前提であるが、個々の比較と同時に生産地と消費地の関係で整理すると、消費地が長期に安定した需要がある場合、Ａ）単一の産地のものを使う、Ｂ）複数の産地のものを使う、Ｃ）流通過程のなかで各産地の製品が混入するためＡ・Ｂのような現象は起こらない、の３つのケースが推定される。

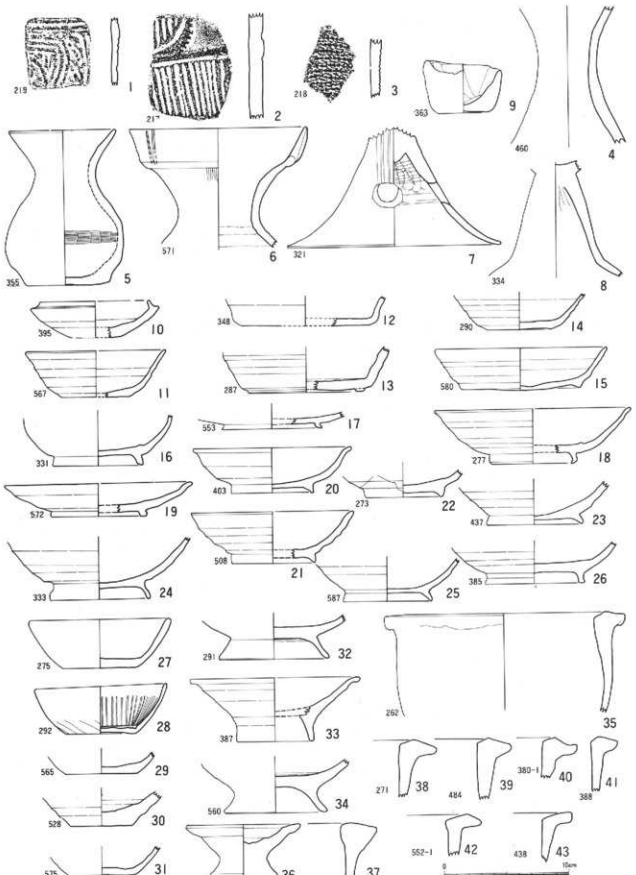
灰釉陶器の流通は少量を回数多くより、大量生産を背景に多量のものを少ない回数で運ぶことが考えられる。従って先のＡの場合を仮定すると、能島遺跡の灰釉陶器と清ケ谷窯のそれは、形態の種類、形態変化の過程が類似している。個々の製品の比較検討と同時に、このような視点が成り立つのではないか、検討にあたっての可能性を考えてみた。

緑釉陶器（図65—13）

Ａ区の河川跡から４点出土する。図示できたのは１点であり、高台は長方形で接地面の内側に段をもち、体部は大きく湾曲して口縁部は直立するようである。底部は7.2㎝を計り、回転糸切り未調整内面にトチンの痕があり、釉は底部外面を除き全面に濃緑色に発色する。胎土は良選されるが細礫を含み、焼成は軟陶である。近江産と推定される。他の３点はいずれも細片で、貼り付け高台をもつ軟陶のものである。

土師器（図63・65、図版42・43、表９）

土師器はＡ区河川跡とＢ・Ｃ・Ｅ・Ｄ区の出土であり、このうち、高台付坏（図63—７）はＣ区ＳＸ19、無高台坏（図63—11～13・16）、高台付坏（図63—17）は灰釉陶器碗、長頸壷（図63—８～10・14・15）とともに、Ｃ区ＳＸ20から出土している。他はすべて包含層に伴ったものである。これから器種ごとに無高台坏、高台坏、甕、塙の順に検討してゆく（註５）。Ａ区出土以外のものは表10に観察表を付した。尚、皿状の器形のものは坏のなかに含めて扱った。また個々には触れないが、坏類はすべてロクロ使用の痕跡をもつものである。また全体に摩滅が激しく分類にあたっては形態を主として行った。



1～3 縄文土器 7～9 古墳時代土師器 17～26 灰釉陶器
4～6 弥生土器 16 緑釉陶器 27～43 土師器
10～15 須恵器

図65 A区出土土器拓本及び実測図1

・無高台坏

無高台坏は大きくわけて、5種類が認められる。

1）底部から体部の境は明瞭で、体部は丸く急角度で立ち上がり、口縁部は直立し端部を丸くする。体部内面は放射状暗文、外面下半には斜位のヘラ削りが認められる。（図65—22）底部切り離しは回転糸切りである。口径10.6㎝、底径5.5㎝、器高4㎝を計る。

2）底部と体部の境が明瞭で、体部がやや丸みをもち、口縁部は直線か、または僅かに外反する。内外に横位のヘラ磨きが施される。（図63—11～13・16・18・19・29、図65—21・23・25）全体の形の知れるものの法量を口径、底径、器高の順にみると、図63—13が13㎝・6.6㎝・3.6㎝、18が11.8㎝・7.4㎝・3.8㎝、19が11.2㎝・6.1㎝・4㎝、29が、11.9㎝・6㎝・2.9㎝、図65—19は11.4㎝・5.8㎝・3.9㎝を計り、口径、底径に対し器高の差が大きい。

3）体部は大きく開きやや丸みをもっている内黒のもので、内面放射状暗文、見込み部円形の暗文、外面斜位ヘラ削りする。調整は1と類似する。（図63—20）底部の径は6㎝である。

4）底部と体部の境は明確でなく、体部は直線的に口縁部に至る。ロクロのノタ目が顕著に認められ、内側はナデ調整される。（図63—21・25～27、図65—24）21は口径14.9㎝、底径6.9㎝、器高4.5㎝であり、他のものより大きい。26・27は底部回転糸切り痕未調整である。

5）比較的小型の皿状のもので、体部は直線的に大きく開き、口縁部は直線またはやや外反する。ロクロのノタ目が顕著にみられる。（図63—22～24）、また体部全体が大きく外反するものもある。（図63—28）これらは他のグループのものに比較して法量が類似しており、口径で12.8㎝～11.6㎝、底径5.2㎝～4.3㎝、器高3.1㎝～2.3㎝の間に分布する。

以上のように一応分類してみたが、1・3・5は器形、手法に際立った特徴をもっているが、2と4のグループでは2が体部内面ヘラ磨き、4が比較的大きいこと、ロクロのノタ目が顕著であることを除き、形態的な差が顕著でないものがみられる。図63—11～13と、21であるが、とくに全体の形が判明する13と21は形態が類似している。

これらの土師器無高台坏の系譜については、1が甲斐型といわれるもの、2は駿東型、3は須恵器写しといわれるもので、須恵器無高台坏の形態、手法をもつもの、5はいわゆる「かわらけ」と呼ばれるものの形態、手法をもっている。このように無高台坏の傾向が抽出されたが、破片を含めて2のグループが多いようである。しかし、全体的にも土器の量が少ないこともあり細部の検討はできなかった。

・高台坏

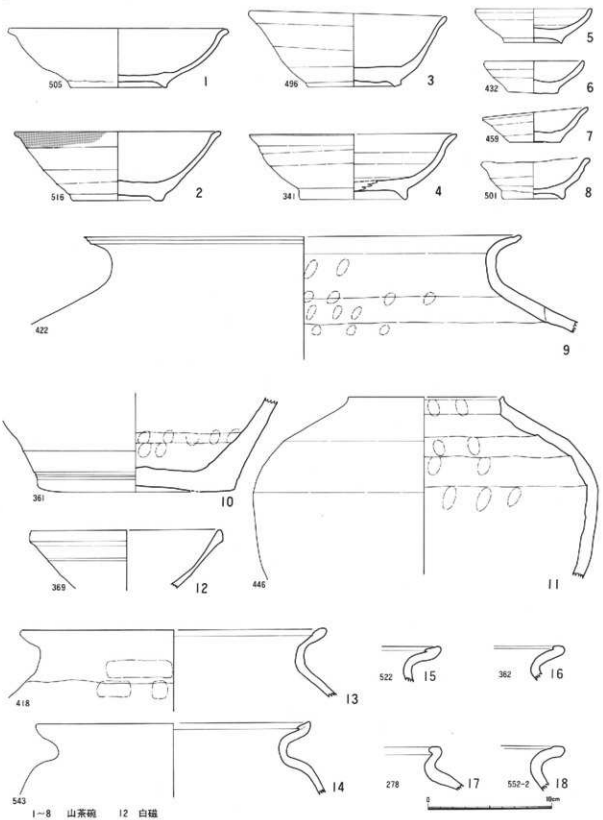
高台坏は6点を図示した。「ハ」の字に開く1.5㎝以上の高い高台をもつもの5点（図63—7・30、図65—26～28）と低い端部の丸い高台1点（図63—17）である。このうち7はC区SX19に伴い、17はC区SX20から出土している。

前者のなかで全体の形態が推定される27は、やや直立気味の高台で、直線的な体部が大きく開き口縁部は下方へ引き出し、ロクロのノタ目が観察される。他のものは底部の破片であるが、この27とは相違し高台の開きが「ハ」または「八」の字状で端部が丸い。おそらく体部から口縁部の形態も相違をもっていると思われる。全体の形態判明した27は、口径13.6㎝、底径6.2㎝、器高5.1㎝を計る。後者のものは、底径が7～9㎝の間に分布するようである。

1点のみ図示されたC区SX20の高台付坏は、低い高台で端部が丸く、内黒で、底部は糸切り離し、底径は7.2㎝を計る。灰釉陶器の形態を模倣したものである。

・甕

甕は口縁部の破片が多く、全体の形状が判明するものはなかった。従って、口縁部の形態で分類を検討してみた。まず甕は大型と小型のものがあるが、明確に小型と判断されるものは、図63—33の1



1～8　山茶碗　12　白磁
9～11　中世陶器　13～18土師器

図66　A区出土土器実測図2

点であり、底から胴部が残っている。口縁部破片のなかにはこの小型甕のものを含む可能性もあるが、それの抽出は不可能であるため、これからの検討は大型甕のなかで一括して扱う。

1）口縁部の断面が三角形を呈し、頂部の尖るもの。図63—32・36、図65—35・38～42

最も大きな破片である図65—35をみると、胴部はやや丸みをもち口縁部は頂部がやや尖るが外側に窪みをもっている。全体が摩滅し細部の観察はできない。推定口径は19.2㎝である。その他の破片でみると図63—32・図65—38・40のように頂部の尖りが強いものが多く、なかには図63—39のように頂部がかなり内側にくるものもある。口縁部の細部の形態は頂部の位置、口縁部端付近の窪みの有無等で異なるようである。色調は赤褐色で細礫多く含み焼成はもろい。

2）口縁部の断面が長方形で「く」の字に屈曲するもの。図63—31・34・35

小破片であり口縁部より下の形状は不明であるが、31は外面に縦位の刷毛目、指頭押圧痕がみられ、内面には横位、斜位の刷毛目がみられる。胎土は暗い色調で金雲母を含み、細礫多く含み混入物多く、焼成はもろい。

・塝

塝とおもわれる破片は形態が異なる2種類が認められる。すべてA区の河川跡からの出土である。図65—37の1点と図66—13～18の6点であり、前者は口唇部を水平にし断面三角形を呈する。色調は暗茶褐色で胎土は良選され、器面を磨いている。後者のものは、やや口縁部が大きく外反し、胴部に肩をもち、口唇部を内側に折り返すか、肥厚させている。調整は口縁部を横ナデし頸部には指頭押圧痕がみられる。図66—9・11の内面にはカーボンが付着し、また13では外面には煤が認められる。

以上、土師器について概観してきたが、無高台坏は2とした体部丸み、内面ヘラ磨きのグループ、甕では1の頂部が尖るグループが量的には優位を占めている。これらの土師器についての観察のまとめとして、分布と系譜について所見をまとめてみる。

静岡県東部～静岡清水平野に分布する在地の土師器として、無高台坏の2がある。これは駿東坏と呼ばれているもので、分布の中心は東部にあり富士市東平、三新田遺跡に多く出土する。静岡清水平野では静岡市宮下、内荒遺跡から出土している。在地甕といえるものは今回の調査の土師器のなかでは明確に把握できないが、塝の前者としたものは東部地域の東平、沼津市藤井原遺跡からは良好な出土例がみられる。またこの周辺でも清水市宮道Ⅰ遺跡等からも出土する。

無高台坏の1は甲斐型といわれるもので甲斐地域を分布の中心とし、信濃、駿河、相模に広く分布がみられる。静岡清水平野からも出土するが少量であり、他の土器群に共伴するような出土状態である。またこの甲斐型に伴う甕が2のグループであるが、静岡県東部、中部において、富士川町浅間林遺跡の出土例を除き、坏に比較して甕の分布は希薄である。

以上がこの地域及び、東の周辺地域に分布する土器群であるが、一方西に分布の中心を持つ甕が認められる。甕1の口縁頂部が尖るグループであり、愛知県一の宮市清郷遺跡から出土している(註3)。分布は尾張、伊勢、三河、遠江、駿河地域であり、特に静岡県内では一遺跡僅か数片という出土数である。また、塝の後者としたものは伊勢型といわれる塝（註4）で、西に分布の中心があり、東は鎌倉まで広がり、静岡県内では遠江地域には出土例がみられるが、それ以東では希薄である。

以上述べてきた土師器を除き、内黒のもの、須恵器写しのものは、この地域でみると出土例は少なく今後の資料の増加と検討に待つところである。

土師器の年代については、平安時代の様相をもつものであるが、初現を奈良時代に求められる坏1・2と甕2、塝の前者があり、かつ清郷型とした甕1は平安時代の後期、伊勢型といわれるものは山茶碗に伴うものと位置付けられる。また灰釉陶器を含めた平安時代の土器群の中心は、灰釉陶器では三角高台のもの、土師器では駿東坏が優位であり、10～11世紀に位置付けられ、時期的にも両者の共

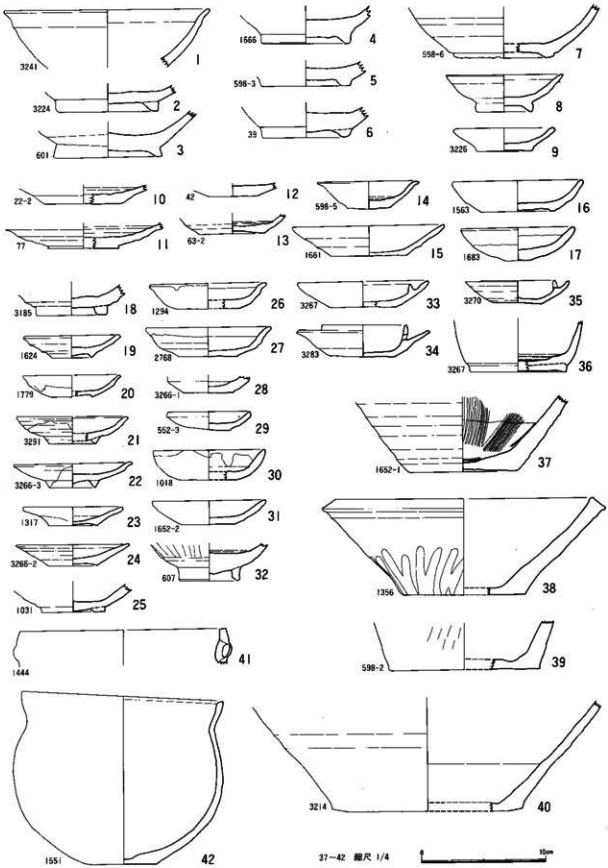


図67　各区出土中・近世土器実測図

表9　灰釉陶器・土師器観察表

器種	挿図No.	図版No.	出土位置	計測値(cm)（）は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
灰釉碗	63—1		C区SD03	高台外径7.2	・三角形高台	・底部ヘラ切り ・高台周辺のナデていない	胎土…良質、長石わずか混入 焼成…硬 色調…青灰色	
灰釉碗	63—2		B区27号コーナー No.3151	高台径5.5	・三日月高台退化（内側の引き出しわずかにある）	・底部ヘラ切り ・重ね焼き ・高台内側のナデ特に強い	胎土…長石、褐鉄混入、良選 焼成…硬 色調…青灰色	
灰釉碗	63—3		C区SE01 フク土中 No.121	高台径（8.2）	・やや高い長方形の高台	・底部糸切り	胎土…白色粒子、黒色粒子 焼成…良 色調…淡灰白色 青味ではない	
灰釉皿	63 4		C区SE—01 フク土中 No.121	底径（6.8）	・方形高台	・外面にロクロのノタ目明瞭に残す	焼成…堅 色調…乳白灰色	
灰釉皿	63—5		C区SE—01 フク土中 No.121	底径（7.4）	・方形高台	・底部ヘラ切り	胎土…黒色粒子を含む 焼成…堅 色調…淡灰色（外面すすけている）	
灰釉高器	63· 6		SX05 フク土中 No.152	高台外径7.8	・高い長方形の高台	・重ね焼き ・内面に施釉あり	胎土…黒色粒子わずかに含む。精選 焼成…硬 色調…乳灰色	
土師坏	63—7		C区SX19 No.1707	高台径（9.3）	・高い「ハ」の字に開く高台	・墨部残る	胎土…黒色粒子、赤色粒子 白色粒子 礫（最大3㎜） 焼成…やや不良 色調…淡明赤褐色	
須恵坏	63—8		C区第Ⅱ層SX—20 No.1602—2	口径 12.8	・口縁部わずかに外反	・内外共にノタ目明瞭に残す	胎土…長石、砂粒を含む 焼成…もろい 色調…青灰色	
灰釉碗	63 ·9		C区第Ⅱ層SX—20 No.1602—1	口径 15.7	・丸みをもつ体部で口縁部下への引き出し強い		胎土…長石を含む 焼成…堅 色調…淡灰黄色（青味）	
灰釉碗	63—10		C区第Ⅱ層SX—20 No.1602—4	口径 15.7	・丸みをもつ体部で口縁部下への引き出し弱い		胎土…砂粒の混入材を含む 焼成…堅 色調…淡灰黄色	
土師坏	63—11		C区第Ⅱ層SX—20 No.1602 ④	底径 6.5	・体部は直線的に開く	・外面ノタ目明瞭に残す	胎土…赤褐色粒子、砂粒、白色粒子 焼成…やや不良 色調…淡橙色、淡灰色	

表9　灰釉陶器・土師器観察表

器種	挿図No.	図版No.	出土位置	計測値cm（ ）は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土師坏	63—12		C区第Ⅱ層SX—20 №1602～9	底径（5.4）	・体部やや丸みをもつ	・内外共にノタ目明瞭に残す	胎土…黒色粒子、白色粒子 焼成…良 色調…赤褐色赤味強い	
土師坏	63—13		C区第Ⅱ層 №1602	口径　13.0 器高　3.65 底径　6.5	・体部直線的に立ち上がり口縁端部丸い	・内面横位のヘラ磨き	胎土…長石、砂粒の混合材を含む 焼成…やや堅 色調…暗赤褐色	鍛東型
灰釉長頸瓶	63—14		C区SX20 №1705		・胴上半球形を呈する	・全体にていねいに調整 ・施釉　頸部内外胴部外面緑色に発色 ・刷毛塗り	胎土…長石、砂粒の混合材含む、精選 焼成…堅 色調…明灰色	
灰釉瓶	63—15		C区第Ⅱ層SX—20 №1602～3	口径　17.1	・直線的な体部をもつ ・口縁部下へ引き出し強い	・無釉	胎土…長石、砂粒の混合材を含む 焼成…堅 色調…青灰色（青味）	
土師坏	63—16		C区第Ⅱ層SX—20 ③ №1602～7	底径　5.2	・体部丸みをもって立ち上がる	・摩滅激しいため細部観察不能	胎土…赤褐色粒子（7㎜）砂粒、白色粒子 焼成…不良 色調…淡褐灰色	
土師坏	63—17		C区第Ⅱ層SX—20 ④ №1602～10	高台径（7.2）	・高台全体に丸みをもって低い	・底部糸切り ・内黒	胎土…白色粒子 焼成…やや良 色調…淡茶褐色	
土師坏	63—18		B区第Ⅱ層 №1449	口径（11.8） 器高　3.85 底径（7.4）	・体部直線的に立ち上がる ・口縁端丸い	・体部内面横位ヘラ磨き	焼成…やや不良 色調…茶褐色	鍛東型
土師坏	63—19		C区B—22 №1164	口径（11.2） 器高　4.0 底径（6.1）	・底部と体部の境不明瞭 ・体部は直線的に立ち上がりU縁帽は丸い	・全体に厚みがある ・摩滅激しく観察不能	胎土…赤色粒子 焼成…軟 色調…淡赤褐色	
土師坏	63—20		B区第Ⅱ層 №1449	底径6.0	・体部はやや丸みをもち大きく開く	・体部外面横位のヘラ削り ・上半はノタ目明瞭に残る ・体部内面内黒 ・放射状暗文（粗密あり） ・底部内面、円形の暗文	焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	
土師坏	63—21		C区F24Ⅱ層 №157・158	口径（14.9） 器高　4.55 底径（6.9）	・底部体部の境不明瞭 ・口縁端やや尖る	・摩滅激しい	胎土…赤色粒子、黒色粒子 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	
土師坏	63—22		DFSX—33 №615	U径（11.6） 器高　2.75 底径（5.2）	・体部わずかに丸みをもち ・U縁部わずかに外反 ・口縁部端尖る		胎土…赤色粒子、白色粒子 黒色粒子 焼成…やや不良 色調…淡赤褐色	

表9　灰釉陶器・土師器観察表

器形	挿図No	図版No	出土位置	計測値 cm（）は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
土師皿	63—23		E区E－29第Ⅱ層上面 No 3284	口径 12.8 器高 2.9 底径 4.55	・体部直線的に開く ・口縁端部尖がる	・外面ノタ目明瞭に残す	胎土…長石、砂粒の混合材を含む 焼成…やや堅 色調…明赤色	
土師皿	63—24		E区E—29 No 4 第Ⅱ層 上面 No 3282	口径 12.1 器高 2.35 底径 4.3	・体部直線的に開く ・口縁端部丸い	・外面にノタ目明瞭に残す	胎土…長石、砂粒の混合材を含む 焼成…やや堅 色調…明赤色	
土師坏	63—25		C区第Ⅱ層C—22 P. 353 No 1147		・体部は直線的に立ち上がる ・底部外面凹む	・内面にノタ目明瞭に残す ・全体に摩滅激しい	胎土…赤色粒子、白色粒子 焼成…良 色調…淡茶褐色	
土師坏	63—26		B区第Ⅱ層C—18 No 1479	底径 5.0	・体部直線的	・底部糸切り痕未調整	胎土…砂粒、白色粒子、褐色粒子 焼成…良 色調…明橙色	
土師坏	63—27		C区E 22第Ⅲ層 No 939	底径（4.0）		・底部糸切り痕未調整 ・体部と底部の境に強いナデあり	胎土…黒色粒子、白色粒子 焼成…やや良 色調…淡茶褐色（外面） 明淡赤褐色（内面）	
土師坏	63—28		B区第Ⅱ層C—15 No 1617	口径 12.6 底径 4.85	・体部全体が外反 ・口縁端わずかに尖る	・摩滅激しいため細部観察不能	胎土…赤褐色粒子、黒色粒子、砂粒 焼成…良 色調…淡橙色	
土師坏	63—29		B区Ⅳ上C—15 No 3071	口径（11.9） 器高 2.9 底径（6.0）	・体部直線的に立ち上がり ・口縁部外反弱い	・摩滅激しいため細部観察不能	胎土…赤色粒子、黒色粒子 焼成…やや良 色調…明淡茶褐色	
土師鉢	63—30		C区第Ⅱ層E—22 No 1060	高台径（8.5）	・「ハ」の字に開く高い高台 ・高台端部は丸い	・摩滅激しいため細部観察不能	胎土…黒色粒子、赤色粒子白色粒子 焼成…やや不良 色調…明赤褐色	
土師甕	63—31		C区第Ⅱ層C—22 No 1272	口径 28.0	・口縁部「く」の字内側の鍵明瞭	・外面縦の刷毛調整 ・口縁部指頭押圧成形 ・内面横位斜位の刷毛調整	胎土…礫、金雲母多量 器面ボロボロ 焼成…悪い 色調…こげ茶	
土師甕	63—32		C区D 232 層 No 10	口径 23.0	・口縁部断面三角形	・口縁直下は器内が厚いが急激に薄くなる ・外面指頭押圧後ナデ ・内面工具によるていねいなナデ調整	胎土…長石、石粒、微少雲母等の混合材 焼成…やや堅 色調…淡赤褐色	清郷型
土師甕	63—33		ベ北島G 6	底径 （6.0）	・小型甕 ・体部丸みをもって立ち上がる	・外面の底部直下周辺へラ削り ・内外共にノタ目明瞭	胎土…赤色粒子 焼成…良 色調…淡茶褐色	

表9　灰釉陶器・土師器観察表

器種	挿図No.	図版No.	出土位置	計測値(cm)（）は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
灰釉鉢	64－1		B区Ⅱ層 No.1432	口径　18.8	・口縁部を強く引き出す	・体部下半ヘラ削り ・施釉外面暗緑色に発色まばら ・内面全体濃緑色に発色	胎土…緻密 焼成…硬 色調…乳灰色	
灰釉鉢	64　2		C区B－22 No.1204	高台最大径（復元径）7.05	・三日月高台の退化形態 ・高台内側の強いナデにより先端部を尖らせる	・施釉内底に濃緑色、斑点状 ・外面無釉	胎土…白色粒子 焼成…良 色調…淡灰黄色（乳灰色） 釉…淡褐緑色	
灰釉鉢	64－3		C区D－23Ⅱ No.34	底径（6.8）	・高台外側上下のナデで尖がる ・高台内側強いナデで先端尖がらせる ・三日月高台	・底部をヘラ切り	胎土…白色粒子 焼成…堅 色調…乳灰白色	
灰釉鉢	64－4		C区C－22Ⅱ層 No.11	底径（7.4）	・三日月高台の退化形態 ・高台外側下からのナデでやや張り出す	・重ね焼き痕あり ・底部糸切り痕 ・内外無釉	胎土…白色粒子 焼成…堅 色調…淡緑灰色	
灰釉鉢	64－5		C区B－22Ⅱ No.1139	高台径（7.0）	・三角形高台	・高台内側に強いナデあり ・底部ヘラ切り	胎土…黒色粒子、白色粒子（青味） 焼成…良 色調…青灰色	
灰釉鉢	64－6		B区F20Ⅱ層 No.1490	高台径（7.2）	・三角形高台	・底部切り離し不明	胎土…黒色粒子、白色粒子（青味） 焼成…良 色調青灰色	
灰釉鉢	64　7		C区E23Ⅱ層 No.163	高台径　8.2	・三角形高台	・底部ヘラ切り ・無釉	胎土…白色粒子 焼成…やや良 色調…暗茶褐色（暗灰茶）	
灰釉鉢	64－8		C区試掘抗7 No.172	高台径（8.3）	・三角形高台	・底部糸切り痕	胎土…黒色粒子 焼成…やや良 色調…青灰色（青味）	
灰釉鉢	64－9		C区D22Ⅱ層 No.22	底径（6.4）	・三日月高台の退化形態	・底部ヘラ切り ・重ね焼き痕あり ・高台外側ナデによる弱い破線あり	胎土…良好 焼成…堅 色調…乳白灰色	
灰釉小碗	64－10		B区Ⅱ層 No.1402		・三日月高台 ・高台先端尖がる	・高台のナデ（三方向）より破線ができる	胎土…黒色粒少量混 緻密な胎土 焼成…硬 色調…淡灰色	
灰釉鉢	64－11		C区SD－70Ⅱ底 No.3233	口径（16.0）	・体部わずかに丸みをもち口縁部ストレート		胎土…黒色粒子 焼成…良 色調…青灰色（青味）	自然降灰

表9　灰釉陶器・土師器観察表

器種	挿図No.	図版No.	出土位置	計測値 cm（ ）は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
灰釉椀	64－12		D区E－4344 №598	高台外径　7.6	・三角形高台	・底部糸切り後ナデ調整	胎土…礫わずかに含む　良 焼成…硬 色調…青灰色	
灰釉椀	64－13		B区D－15 №3112		・三角形高台	・底部糸切り痕未調整 ・重ね焼き痕	胎土…黒色粒子、白色粒子　砂粒 焼成…やや不良 色調…淡灰色　緑褐色一釉部分	
灰釉椀	64－14		パ館鳥G11　C－22 Ⅱ層	底径　6.8	・三角形高台	・底部糸切り後ナデ ・底部にヘラ記号か（刺突による点あり）	胎土…やや不良 焼成…堅 色調…青灰色	
灰釉椀	64－15		C区F24Ⅱ層 №158	高台最大径（復元）8.75	・三角形高台	・底部糸切り痕 ・高台貼り付け後内側を強くナデる　その時の残粘土処理のため回転ヘラ削りする	胎土…白色粒子、砂粒、鉄の吹き出し（少量） 焼成…良 色調…淡灰色	
灰釉椀	64－16		D区E43・44 №598－①	高台外径6.2	・三角形高台 ・体部は急角度に立ち上がる	・底部糸切り後ナデ	胎土…良質 焼成…軟質 色調…青色	
灰釉椀	64－17		C区第Ⅱ層C－21 P94 №886	高台形（5.6）	・低い三角形高台	・底部糸切り痕	胎土…白色粒子 焼成…良 色調…青色	断面チョコレート色
灰釉椀	64－18		C区D23Ⅲ層 №97	底径　6.6	・低い三角形高台	・底部ナデ調整 ・全体に回転ナデによる凸凹よく残る ・無釉	胎土…良好 焼成…堅 色調…淡灰色	
灰釉椀	64－19		D区E44・43 №598－④	高台外径6.0	・三角形高台	・底部切り離し、ナデのため不明	胎土…良質 焼成…軟質 色調…青色	
灰釉椀	64－20		B区第Ⅱ層E19 P144 №1360	高台外径6.2	・三角形高台		胎土…良質、長砂粒混入 焼成…硬 色調…青灰色	
小椀	64－21		B区P20Ⅱ層 №1405	高台外径4.8	・三角形高台	・底部切り離しナデのため不明 ・施釉内面濃緑色に発色	胎土…良質 焼成…軟質 色調…暗褐色	
灰釉小椀	64－22		C区Ⅱ層D－23 №38	底径　4.6	・低い三角形高台 ・体部は屈折し急角度に立ち上がる	・底部ナデ調整	胎土…細礫多い 焼成…堅 色調…青灰色	
灰釉小椀	64－23		パ館鳥東ヨリ2ケ目G砂	口径（10.6） 器高　3.5 底径　5.6	・三角形高台 ・体部は丸みをもち口縁はストレートに続く ・端部丸い	・底部ナデ調整 ・重ね焼き ・自然降灰あり	胎土…不良 焼成…堅 色調…淡灰色	
灰釉皿	64－24		C区F26第Ⅱ層	口径（15.3） 器高　2.8 高台径（7.6）	・高台は長方形状 ・体部はわずかに丸みをもち口縁はFへ強く引き出	・底部ヘラ切り ・重ね焼き ・施釉内面緑色の斑点、外	焼成…良 色調…灰白色・赤青味	

表9　灰釉陶器・土師器観察表

器種	挿図No.	図版No.	出土位置	計測値(cm) ( )は推定値	形態の特徴	手法の特徴	胎土・焼成・色調	備考
					す	面無釉		
灰釉鋺	64－25		D区243層 No.91	口径（12.0） 器高　5.3 底径　5.8	・やや高い「ハ」の字高台 ・体部は丸みをもって立ち上り口縁部はストレート ・先端・端部丸める	・底部糸切り ・無釉	胎土…長石等を含む混合 焼成…堅 色調…白灰色	
灰釉鋺	64－26		C区E 22 No.789	高台径（8.2）	・三角形の高台 ・体部やや直線的	・施釉内面黄緑色の斑点状	胎土…黒色粒子、白色粒子 焼成…良 色調…明乳青灰色（青味の系統）	
灰釉鋺	64－27		C区Ⅱ層B－22 P 289 No.1090		・高台長方形	・底部糸切り ・重ね焼き ・施釉内面淡灰色	胎土…緻密、長石黒色粒わずか入る 焼成…硬 色調…乳灰色	
灰釉鋺	64－28		B区D－19 No.2923		・三角形高台（外側がやや張る） ・体部直線的	・重ね焼き痕 ・無釉	胎土…良選、長石微量混 焼成…硬 色調…青灰色	
灰釉鋺	64－29		B区Ⅱ層F－20 P 201 No.1389	高台外径8.2	・高い長方形の高台 ・やや丸みをもつ体部	・切り離し頂ヘラナデ ・重ね焼き ・高台先端内外のナデで尖がる	胎土…黒色粒わずかに混入、精選緻密な胎土 焼成…硬 色調…白褐色	
灰釉鋺	64－30		B区F19第Ⅱ層 No.1425	高台外径8.0	・やや高い長方形高台 ・体部丸みをもって立ち上がる	・ヘラ切り後ナデ ・高台接合の際内外を強くナデる ・無釉	胎土…緻密な胎土 焼成…硬 色調…乳灰色	
灰釉鋺	64－31		D－23Ⅱ層 No.63		・低い長方形高台	・底部ヘラ記号あり		
灰釉大鋺	64－32		E区SD－01	高台最大径 （復元径）10.6	・やや高い長方形高台	・底部ヘラ切り ・体部下半ヘラ削り ・施釉内面のみ緑色に発色 ・高台下端部ヘラによる面取り	胎土…鉄の吹き出し 焼成…やや不良 色調…淡灰色 釉—透明緑灰色	
灰釉鋺	64－33		パ能G 5 黄褐色粘土層		・台形の高台 ・体部はやや丸みをもち急角度で立ち上がる	・底部糸切り調整は雑 ・施釉内面のみ	胎土…長石等を含む 焼成…堅 色調…淡灰色	
灰釉鋺	64－34		C区B20　P 197 第Ⅱ層 No.1003	高台外径6.3	・台形の高台 ・底部中央が極端に薄い		胎土…緻密、黒色の斑点あり 焼成…良好 色調…乳褐色	
灰釉壷	64－35		B区Ⅱ層 No.1422	底径　10.2	・大きな底部で体部はやや丸みをもち急角度に立ち上がる	・底部静止糸切りか ・内面ノタ目未調整 ・外面施釉	胎土…緻密 焼成…良 色調…乳灰色	
灰釉壷	64－36		D区E43・44 No.598－⑧	口径　14.0	・口縁部直立し極めて短かい	・外面施釉 ・濃緑色斑点状に発色	胎土…混入物少量 焼成…硬 色調…灰白色	

存は認められるであろう。

山茶碗（図66－1～8、図67－1～9、図版43）

山茶碗はA区河川跡、砂堆のBC区、西の水田面のD区から出土している。A区は8点（図版66－1～8）、B区2点（図67－4・6）、C区3点（図版67－1・2・9）、D区3点（図67－3・5・7）を図示した。

全体の形態が復元されたものは小皿を含めて10点であり、A区出土のものに集中する。大型の碗はすべて高台付きであるが、小皿は高台を持たないものもある。形態別にいくつかのグループにまとめられる。

1. 高台は方形を呈し、体部は丸みを持ち口縁部は僅かに外反するもの。図66－3
2. 高台は方形を呈し、体部は直線的に開き口唇部が肥厚する。図66－2
3. 高台は三角形を呈し、体部は丸みを持って開き、口縁部をやや外反させる。図36－1・4
4. 高台は低い台形状を呈し、体部は丸みをもつもの。図67－7
5. 低い高台で端部が丸いもの。図67－6

A区出土のものは摩滅が激しく細部の観察は容易でないが、底部切り離しをみると、図66－1・3がヘラ、2が糸切りである。全体の形態判明するものの法量は類似しており、口径の大きい図66－1をみると、口径17.6㎝、底径7.6㎝、器高は4.7㎝である。高台周辺の破片が多く不明確なものであるが、高台の形態を中心にまとめてみた。また小皿については、以下のようにまとめられる。

1. 高台は三角形を呈し、体部が丸みをもち、口縁部が直線のもの。図66－8
2. 高台は三角形を呈し、体部が丸みをもち、口縁部が直立気味に立ち上がるもの。図66－5
3. 無高台で体部から直線的に口縁部に続く。図66－7、図67－9
4. 無高台で口縁部がやや厚くなり、僅かに内湾するもの。図66－6

高台付きのものと、無高台ではやや法量に差が認められるようであり、高台付きのものがやや大きくなる。図66－5では、口径9.3㎝、底径4.2㎝、器高2.7㎝を計り、無高台の図66－6では、口径8㎝、底径4㎝、器高2.6㎝である。無高台の3点はいずれも底部は糸切り離しである。

山茶碗と小皿のセット関係は出土状態では確認できなかったが、方形・三角形の高台で体部が丸くなるもの（図66－1・3・4）と高台の付く小皿のセット、5の形態としてあげた低く端部の丸い高台のもの（図67－6）と無高台の小皿の組み合わせが推定される。時期的には、12～13世紀に比定されるものであろう。

遺構出土のものが僅かにみられ、図67－1はC区SD70から出土している。尚、第2章3節の基本層序で、B区東端とD区で出土した山茶碗と灰釉陶器はすでに呈示したので省くこととする。

輸入磁器（図66－12）

すべてA区からの出土で、白磁では碗・皿・四耳壺、青磁では碗・皿が認められる。また、型押しの青白磁の皿形合子も1点出土している。図示した12は玉縁の白磁碗であり、体部下半から底部を欠損する。推定の口径は15.5㎝である。

白磁では、碗の体部内側に櫛描文、横位の沈線をもつ碗が認められ、青磁では龍泉窯系の蓮弁文碗、同安窯系の櫛描文小皿が出土している。

これらは12～13世紀に位置付けられ、A区の遺物群のなかでみると山茶碗・小皿に伴うと考えられる。当該時期の遺構のあるBCE区では山茶碗の出土が少量認められるが、これらの輸入磁器に該当するものはまったく出土していない。

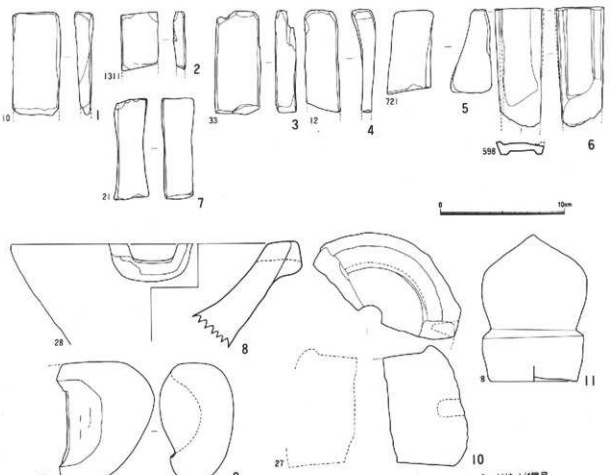


図69　各区出土平安～近世石製品実測図

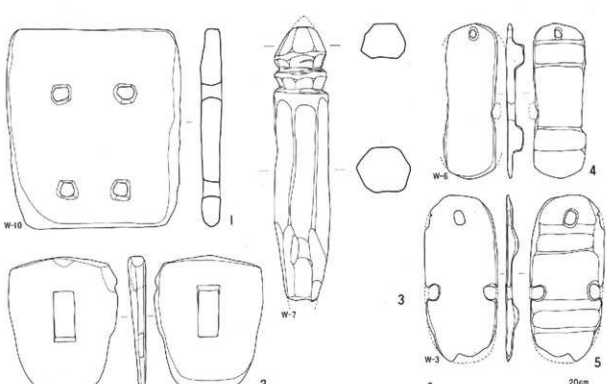


図70　A区出土木製品実測図

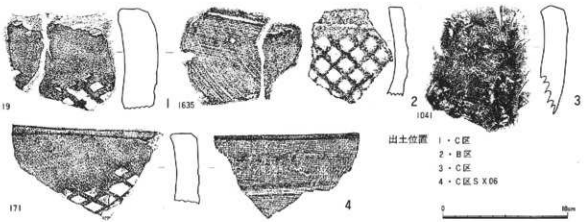


図68　B、C区出土瓦拓本

陶磁器（図67）

これらはA区を除いた各区から出土しており、時期的には38～40のように前段階のものもあるが大部分は古瀬戸後期から19世紀代におよんでいる。形態としては皿、香炉、青磁碗、灯明皿、徳利、摺鉢、平鉢等がある。また時期的にこれらに伴う土師質の内耳鍋等も図示した。

39は山茶碗に伴い、壷または甕の底部で、渥美か湖西産と思われるものである。40はB区SE01より出土した平鉢で常滑産、時期は戦国時代の中のなかにおさまる。38の平鉢も40と同じ常滑で、時期的な差もあまりないと考えられる。

古瀬戸後期に位置付けられるものは、灰釉平碗の25、緑釉皿17等がみられ、次いで大窯期に比定されるものが26の緑釉小皿、37の摺鉢がある。22は美濃瀬戸の17世紀頃の御深井釉であり、19の灰釉小皿は18～19世紀頃と思われる。

灯明皿は、17～19世紀頃のものと思われ、33は御深井釉、34は志戸呂である。1点のみ図示した徳利の36は通称貧乏徳利といわれるもので、多治見高田窯の製品である。全体的な出土量の比較からみれば、これらは美濃瀬戸を主体とした陶器群であり、時期的なピークは古瀬戸後期の時期の15世紀後半と、18・19世紀に求められる。

B）土製品（図68）

土製品には図示した布目瓦4点と土錘1点が認められる。土錘はA地区の河川跡の出土で、瓦は4点ともにBC区から出土し、なかでもC区からのものが3点を数える。

図68のものは4点ともに平瓦の破片で、摩滅の激しい3を除き、凸面に格子状の叩き目、凹面には布の圧痕が認められる。1・4は側端部を2面に面取りしており、4ではそれが明瞭に観察される。またこの1と4は格子状の叩き目も類似しており、2は格子の交わる角度が1、4より直角に近くなっている。4を除き焼成は軟質で黄褐色を呈し、全体に摩滅する。一方4は青灰色を呈し、硬質の焼き上がりである。

C）石製品（図69、図版44）

石製品は砥石（1～5、7）、砲(6)、片口(8)、凹石(9)、挽き臼(10)、五輪(11)があり、1がA区、2・3・4・7がB区包含層、8・10がB区SX10、9がC区SX20、5・6がD区、11はD区SE03から出土している。

砥石は6点ともに長方形で、断面は偏平なものと、5・7のように方形を呈するものがある。4と5は使用が著しいため変形している。ほぼ全体の形状を示しているものは3・5・7の3点であり、計測値をみると最も長いものは断面方形の7であり、長さ8.2㎝、巾3.6㎝、厚さ1.7㎝を計る。一方、短いものは断面方形の5で長さ6.6㎝、巾3.5㎝、厚さ3.2㎝である。使用痕は広口面、及びそ

の側面であるが、5では先細りする小口面をも使用している。石質は安山岩を用いている。

硯と思われるものが6であり、やや先細りする長方形状で、台を持っている。海の部分を欠損し、残存値で長さ9.4㎝、巾はやや先細りし、端部で3.8㎝、もう一方は3.3㎝を計る。全体が丁寧に研磨されて仕上げられており、使用痕は表面下部に集中している。粘板岩を用いている。

8の片口は底部を欠損するが、口径29.6㎝、突起部の内側の巾3.3㎝、深さ1.1㎝である。これと同じB区SX10から出土した挽き臼の10は、約1／3が残存しており、推定の最大径は19㎝、最大高12.6㎝で、側面に握手を差し込む穴が1.7㎝×2.6㎝にあけられている。両者ともに安山岩を用いている。11の空輪はD区SE03の上面から多くの礫とともに出土したものであり、高さ15.3㎝、最大径11.1㎝をはかる。砂岩を用いているため激しい風化を受けている。

これらの時期については、9の凹石は平安時代、8・10は出土した陶器などからB区SE01と同時期の15世紀頃と考えられる。またD区出土の6・11は近世であり、砥石は包含層出土のため平安時代～中世の巾でとらえられる。

D）木製品（図70、図版44）

木製品としては、図70の5点の他に、B区とD区の井戸材がある。図示した5点はすべてA区の鎌倉時代河川跡からの出土であり、帰属する時期が明確でないため一括して扱った。これらの内訳は、田下駄1点(1)、下駄2点（4・5）、卒塔婆1点(3)、鍬1点(2)である。

1は両側から開けられた穴を持ち、縦26.4㎝、横23.2㎝、厚さ2.6㎝で、杉を用いている。4の下駄は長さ21㎝、巾7㎝の杉材で、頂部の穴はやや内側に片寄り、5は頂部の穴がほぼ中央部に開けられるもので、4と比較すると、5は前後が丸みをもち、長さ22㎝、巾9.8㎝で、材質はシロモダではないかと思われる。3は棒状の卒塔婆で、頭部は不整形な八角形、下部は六角形に面取りされ、端部を尖らせている。頭部の抉りは、かなり深く、鋭利な刃物によっていることが推定される。上下の端部が消失しており、長さ36.4㎝、最大巾7.3㎝である。材質は榎である。2は鍬先の木質部であり、鉄製の頭部を装着した痕跡を残している。長さ18.6㎝、最大巾14.6㎝を計り、穴の斜傾からみて、立ち上がりの強い柄がはめ込まれたものと推定される。細礫が全面に付着していたため、樹種は特定できなかった。

これら5点の木製品は、元興寺文化財研究所で保存処理と、樹種鑑定を行った。今まで述べた樹種はこの結果をもとにしている。なお、第Ⅵ章特論に樹種鑑定の成果を示した。

E）金属製品（図71、表11）

金属製品は銭貨が出土した。図71に拓本を図示し、表11に一覧表としてまとめてみた。一覧表には26点をとりあげたが、全体の枚数としては32点である。これは1の開通元宝が3枚重ね、19が5枚重ねであり、これらは緑青により密着しているため、上面のもののみを図示したことによる。

26点中銭貨の名称が判明したのは18点であり、その内訳は唐銭1点(1)、宋銭11点（2～12）、明銭2点（13・14）、日本製4点（15～18）であった。不明の部分を考慮しても全体的に近世の銭貨より宋銭を中心とした中国銭が主体をしめている。遺構からの出土も7点あり、多くはSXとした性格不明な遺構、SFとした土坑、8・9はD区の井戸SE03から出土している。単独で出土するものと、数枚が一括または重なって出土する例が認められるが、その銭を伴った遺構の性格等は不明である。

註1　細長い頸部とソロバン玉状ともいえる胴部の形態から、白岩式を含む西の土器との類似性が強くみられる壺である。

註2　西の土器にはみられない器形であり、静岡県中部～東部地域の在地色の強い土器と考えられるが、志太平野での出土はあまり明確ではないが、島田市東山古墳群北支群から類似する土器が出土している。東部では、

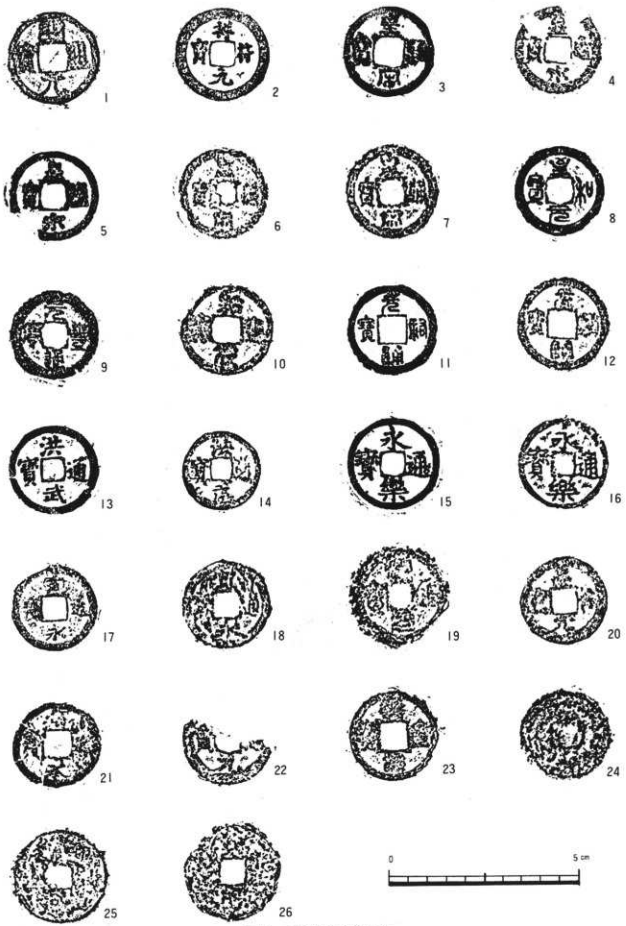


図71　各区出土銭貨拓本

三島市向原、沼津市荒芝遺跡等で出土している。

註3　灰釉陶器は9世紀～11世紀頃までの時期をしめしているが、器種組成は単純であり、ごく少量の壷以外は供膳形態のみであり、それも図示したような形態の碗、皿であった。従って、灰釉陶器は時間巾が長いのに比較して、器種組成としては単純で、貧弱といえる。

註4　灰釉陶器の高台の形態による分類の基準は、掛川市梅橋北遺跡の報告書（1988年）のなかで、その根拠をしめしている。今回の記述もそれを踏襲している。

註5　土師器甕のバラエティーをみると、広域的な分布圏をもつ一群に対し、在地甕の存在は認められない。全体的に少量であることから断定するのは危険であるが、一応の傾向としては指摘される特徴であろう。尚、在地甕とは駿東型の甕、遠江・駿河地域にみられる、「コ」の字甕といわれるものを指している。

表10　出土銭貨一覧表

図のNo	名　称	初鋳年代	出　土　位　置	登録No	備考
1	開通元宝	A．D．845	SNJ B区SF09　No.3	60—No.28	3枚重ね
2	祥符元宝	A．D．1008	SNJ B区M—9，F—19　SX—08	No.37—③	
3	皇宋通宝	A．D．1038	SNJ C区B—21，M—1	No.29	
4	皇宋通宝	〃	SNJ B区第2層M—2，C—17	No.32	
5	皇宋通宝	〃	SNJ B区C—18，M—3，C—18第2層	No.34	
6	皇宋通宝	〃	SNJ E区◎No.20　トレンチ内	No.43②	
7	皇宋通宝	〃	SNJ E区E—29 Ⅲ層上面 No.18	No.44①	
8	至和元宝	A．D．1055	SNJ D区SE03底	No.25①	
9	元豊通宝	A．D．1055又はA．D．1078	SNJ D区SE03底	No.25②	
10	熙寧元宝	A．D．1068	SNJ B区第Ⅱ層E—19　M1	No.31	
11	元祐通宝	A．D．1087	SNJ B区　D—15	61—No.28	
12	元祐通宝	A．D．1087	SNJ E—15	No.27	
13	洪武通宝	A．D．1368	SNJ B区C—16第Ⅱ層M—5	No.40	
14	洪武通宝	A．D．1371	SNJ B区E—15第Ⅱ層M—8	No.36	
15	永楽通宝	A．D．1408	SNJ B区C—18第Ⅱ層 M—6	No.33	
16	永楽通宝	〃	SNJ E区E—29 Ⅲ層上面 No.18	No.44②	
17	寛永通宝	A．D．1760	SNJ E区D—28　Ⅱ層下部	No.41	
18	寛永通宝	〃	SNJ E区D—29　仮No.2	No.42	
19	□□□□		SNJ E区◎No.20　トレンチ内	No.43①	5枚重ね
20	□□元宝		SNJ B区M—9，F—19，SX—08	No.37—③	
21	寛永通宝		SNJ C区C—20，M—2，SD—66	No.30	
22	□□元宝		SNJ B区SX05	No.38	
23	□□□□		SNJ B区M—9，F—19，SX—08	No.37—①	
24	□□□□		SNJ E区仮No.20　トレンチ内	No.43③	
25	□□□□		SNJ D区E—50，F—50，SX60	No.23	
26	□□□□		SNJ B区E—15，M—7 第Ⅱ層	No.35	

第V章　ま　と　め

今まで述べてきたように、能島遺跡の遺構、遺物の主体を占めているのは弥生時代と平安時代後期～鎌倉時代といえる。調査を通して検討してきたことを列挙してまとめとしたい。

第1節　能島遺跡の立地の特徴について

既に、図2でみたように本遺跡は折戸湾の砂堆列の最奥部にあたり、常に巴川の流路に直交して存在してきた。河川改修以前の旧巴川は、この砂堆列と南北の山地から続く扇状地との境を迂回して流れており、A区の鎌倉時代の巴川は南から北へ流れたことが、加藤芳朗氏の現地調査の際確認され、また図3の旧地形図でも、明治22年の段階で南から北への流路が確認できる。このような立地の能島遺跡は、北と南の遺跡群が安定した扇状地形に立地するのと比較して、巴川の沖積地であり更に、流路の影響を直接受ける位置にあるといえる。

尚、本遺跡は巴川河口から約3㎞上流に位置し、今までの記述では触れていないが、遺跡が営まれた各時代より更に沖積化の進んだ現在でも潮の干満の影響が及ぶ地点であることも本遺跡の性格を考えるのに大きな示唆を含んでいるといえる。

また調査の土層検討の段階で、東西の水田地帯の開かれた時代が遺構との関連性のなかで問題となった。A区の場合は河川の埋没過程のなかで上層の粘土には遺物は含まれず、図3でも巾の狭い流れが確認され、長期間流路の影響を受けた地域と判断される。それは図6の調査区土層柱状図でも、東が西より標高が1.6ｍ低く、周囲の水が集中する位置にあったことを示している。一方西のＤＦ区では、砂堆との比高差2ｍ程ではあるが、水田とその水源である河川との高低差が大きく、井戸による灌がい施設を必要とする地域であったことがいえる。従って、本遺跡周辺の水田の開発はかなり遅れたと考えられ能島村の成立する近世とするのが妥当であろう。

上記に関連する事柄として、砂堆の東西端及びD区の黒・白色粘土層から灰釉・山茶碗が出土していることを第Ⅱ章3節基本層序で述べた。従って平安時代～鎌倉時代頃、この周辺は低湿地形成の段階であったことがいえる。

以上、検討してきたように、砂堆上の遺構・遺物は、水田地帯のそれとは様相を異にしていることが、自然的な環境からも首肯される。本遺跡の立地の特徴を整理すると以下のようにまとめられる。

1）遺跡は東西の扇状地に挟まれた沖積地の中央部にあり、河川に直交する砂堆上で、直接その影響を受ける。また、基盤が砂礫という条件から生産、居住地域としては適さない。

2）周辺の現水田地帯は長期間、おそらく近世村落成立まで河川、及びその後背湿地であった。従って、本遺跡で、安定した定住が行われるのはこの段階であろう。従って、砂堆上で展開する平安～鎌倉時代の遺跡の性格が立地のうえからも問題となる。

第2節　能島遺跡の周溝墓をめぐって

1）はじめに

能島遺跡の周溝墓群は、静清平野の弥生墓制の良好な資料であることは言うまでもなく、東海地方においても、弥生文化の東進のなかで、墓制という分野に限らず、広く弥生文化の研究に果たす意義は大きいと考える。この周溝墓群についての位置付けを行うとともに、静清平野の弥生時代の遺跡の在り方についても検討し、まとめとしたい。

2）周溝墓の群構成（図72）

能島遺跡の周溝墓群は東西巾約100ｍにわたって分布し、27基は殆ど隙間なく配置されている。群

構成の抽出にあたり、周溝墓の切り合い関係を整理するなかでグルーピングを行った。それは造墓の変遷を検討する作業でもあった。

周溝墓の切り合い関係は、溝の重複等各所にみられるが、主体を占めるA類と他の類との切り合いは9・10号と11号（D類）、15号と25号（E類）、17・20号と18号（B1類）の3例が認められる。これらはいずれも前者にあげたA類が切られており、A類が先行していると判断し、図72のように造墓の過程が大きく2時期に別れるのではないかと推定した。結果的には、図72を作成した段階で群構成の検討が可能となった。

図72は周溝墓以外の遺構を除き、調査区外、攪乱部には推定線を加筆して作成した。尚、8号と13号は同一のものという可能性を先に述べているが、検討にあたっては同一の周溝墓として扱っている。

能島遺跡の周溝墓群は基本的にAとBの2群が認められ、かつA群は5つのグループから成っている。以下にその内容を整理してみる。分類の基準は規模、方位、形態、配置等の様々な要素が指摘されるが、主として墓道と考えられる空間域の有無によっている。

Ⅰ群　――BC区の平坦面に位置するもの

1）北西にあり、1・2号からなる。互いに近接し、大小の組み合わせがみられる。

2）中央部の北にあり、9・10号からなる。溝は重複する。大小の組み合わせがみられる。

3）南西にあり、3～7号とD類の12号からなる。互いに近接しA類は大小の組み合わせがある。

4）中央部にあり、（8・13）・14・15号、D類の23号からなり互いに近接する。A類は3基ともに規模が類似し、ほぼ中型のものである。

5）東にあり、16・17・20・21・22・24号とB1類の18号・B2類の19号からなる。東列の21・24・20号は互いに溝を重複させる。A類はすべて規模は中型に属し造墓集団の等質性が認められる。

Ⅱ群　――B区の東端、斜面にある後出のもので、26・27号からなる。A群に比較して大型化している。

以上のようなⅡ群6グループに分けられる。D類の11号についてはグループの墓域としては2の範囲にあるがしかし、1基のみ異なった配置が認められるため、これらのグループには含めなかった。それは、9・10号の溝は勿論、方台部までも掘り込んで造られており、溝相互の重複にみられる形態とは明らかに異なっているためである。先行する周溝墓の盛土の範囲を侵さないという配慮の結果が、重複関係となっているとするなら、この11号の例はそれにあてはまらない。各々のグループが同一の造墓集団をもつことが分類の前提であり、墓域を侵すという反集団的な行為は成り立たないと判断したことによる。従って11号の場合は時期差か、あるいは別な造墓集団により敢えて行われた結果のいずれかであろうと理解したい。

3）造墓の変遷

分類の作業をとおして造墓の経過が明確となったが、一方では土器様相からの検討も重要な要素となる。しかし、土器からは明確な時期差は抽出できなかったため、形態、切り合いといった遺構の在り方からの検討になってしまった。以下に造墓の変遷について整理してみる。

1段階・A類の四隅を切る形態のものが砂堆の平坦部に造られる。Ⅰ群の形成。

2段階・A類の各々のグループのなかに形態の異なるものが現れ、また東端の傾斜面に新たな造墓が始まる。Ⅱ群の形成とⅠ群の形態変化。

以上、大まかに2つの段階があったことが考えられる。次に溝の重複する2と5のグループをみてゆくことにする。

2のグループの9号と10号は9号が先行し、また5のグループについては溝が重複する東列では21、24、20号の順に造墓され、西列では17、18、19号となる。東西列の関係では、18号が20号に先行して

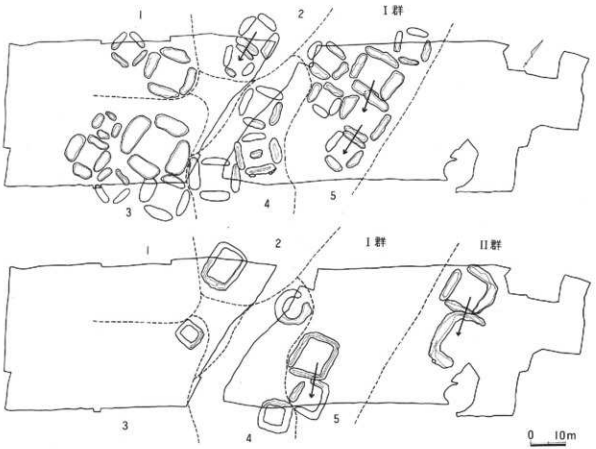


図72　能島遺跡周溝墓の群構成

いる。このように切り合いの関係から整理してゆくと北から南への造墓の動きが推定される結果となっている。

能島遺跡の周溝墓の配置は当初のA類の1段階では、各々のグループ間に墓道と考えられる空間域をもち、2段階ではⅡ群とⅠ群の境の空間域は明確であるが、一方、Ⅰ群では従来の墓道にB・C・D・E類の後行する周溝墓を配置している。この現象は墓域に対して、各々の造墓集団の社会的規制の働いていた結果と推定される。またⅡ群の成立については、Ⅰ群の墓域に新たな造墓の空間がなくなって東に墓域を移したか、または旧来のⅠ群の造墓集団とは集落構成のなかで一定の距離を置いた集団の存在があったかの二つの推定がされる。このⅡ群はB～E類の8基のなかでも大型のものが占めており、逆にⅠ群では5グループにみるように18号から19号へと小型化してゆく現象が認められる。Ⅰ群の造墓集団の衰退と新たな造墓集団の出現として理解されないだろうか。

時期的な推移を論ずるのに土器年代から導かれた造墓の変遷でないため図式的になってしまった。A類は能島遺跡での出現期の形態であるが、その後の推移のなかではB～E類との時期差は土器の検討のなかでは抽出できなかった。愛知県朝日遺跡では、B1類とB2類（ただし、2個所切るタイプでもL字の溝を組み合わせるもの。）はすでに中期後半には出現することからみて、四隅を切るA類と数個所で切れるB類との共存関係は当然考えられる。

4）土器出土比率からみた墓域の様相

図33には周溝墓の溝出土土器を平面で示し、図34は14・18号の平面分布に垂直分布を加えて作成した。B区全域にわたって分布の粗密が認められ、4・5グループの南部分に集中する。また個々の周溝墓においても、分布は各々の溝ごと、及び同一の溝でも一様でなく粗密が認められる。18号では、溝西側の陸橋部付近に集中し、14号では南・東・北溝にほぼ均一な分布がみられる。これらの土器は

周溝墓が埋没する最初の段階に黒色土とともに混入したものであり、弥生中期後半の土器以外は含まないため、周溝墓の造墓集団によって持ち込まれたものと理解した。これらの土器片は供献土器との接合関係はなく、また個々の土器が接合資料にもならないものであった。従って個々の周溝墓に関連性をもつものでなく、かつ祭祀を示すような痕跡といった状況も認められないため、遺体埋葬後の墓域に対し、造墓集団の何等かの社会的規制にもとづく行為を示すものであろうと推定した。

結論としては、土器分布は造墓集団の動きを示しており、墓道を反映したものと推定した。つまり土器が集中してみられるのは墓道に面した溝という根拠によっている。この土器分布と図72の群構成の根拠となった墓道の位置は良く対応していることがいえる。

また造墓集団の墓域への行為は、ＳＦ・ＳＤと呼称した土坑、溝にも現れており土器分布が希薄な２・３・４グループの間、５グループの北に認められる。これらの在り方は土器分布と土坑、溝の状況、及び土器一括投棄の10・25号の在り方と関連させて追求するべきものと考えられる。つまり、土器分布の粗密をもって造墓後の行為の有無を一方的に論じることは出来ないからである。

土器分布については、Ｂ区のみデーターであり、かつ22号では出土してはいるがドットで示していない。このように全体を同一基準でみたわけでなく資料的には参考程度のものであるが、傾向としては西の１と３のグループ、東のⅡ群と５グループの北寄りは相対的に希薄である。このことから主たる墓道は４と５のグループの間で西、北へは枝道のようなものが推定される。従って墓域への入口は南東にあったと考えたい。おそらくその方向に造墓集団の集落が存在するのではないか。

５）能島遺跡の周溝墓の位置付け

能島遺跡の周溝墓の形態は多様であり、円形を呈するＥ類までも含んでいる。石黒立人氏の分類（石黒1987）でみるとＡ０からＡ４類のすべてを含み、Ｂ類を欠落する。ただし「Ｌ」字形が組み合わせとなるＡ２類のａタイプはみられず、ｂ類が認められる。また周溝墓相互の配置は近接と重複であり、相互に溝を共有する関係は存在しない。これから平面形態と配置について、周辺の主要遺跡との比較を行い本遺跡の周溝墓の位置付けを行いたい。

・平面形態

図73に弥生中期の例として、能島遺跡と周辺の主要な周溝墓群をあげた。平面形態の系譜については、四隅を切るものは東海系（以下、東海系と呼称する）、各所で切り合うものと全周するものは畿内系と大きく二つの系譜が考えられている。また、畿内系は方形周溝墓の消滅まで畿内に存続するものと、周辺地域に拡散するものとの二つの系譜があるという（前田　1987）。東海系のものは愛知県朝日遺跡に出現し、それ以東の東海地域から関東までの弥生中期の墓域は、これが主体を占めている。最近の調査では、判然としなかった三河地域でも岡崎市高木遺跡（斎藤　1986）で東海系と、溝を１・２個所切るものが発見されている（時期的には朝日遺跡のⅠ段階からⅡ段階への移行期という）。静岡県のなかでは、遠江地域で袋井・掛川市の山下遺跡、磐田市馬坂遺跡、駿河地域では静岡市川合遺跡で中期中葉の方形周溝墓が確認されており、いづれも東海系のものである。尚、山下遺跡では一部中期前葉の丸子式類似の土器が方形周溝墓の溝から出土しており、墓域の形成は前葉からの可能性もある。いづれにしても駿河地域までは中期中葉には東海系の方形周溝墓が成立しており、中期後半には関東にも一大墓域が形成されるようになる。

それでは、畿内系とした溝を数個所切るものと全周するものの出現はどのように整理されるだろうか。静岡県内の主要遺跡での畿内系とした方形周溝墓の出現は基本的には後期といえる。しかし、能島遺跡では中期後半の時期に包括される墓域であり、畿内系の一部の形態を欠くが、多くの種類が認められる。群構成のなかで、畿内系は２段階に出現し、各々のグループの縁に分布するものと、新たにⅡ群を成立させるものとがあることを述べた。このように、平面形態の異なるものの出現は、墓域

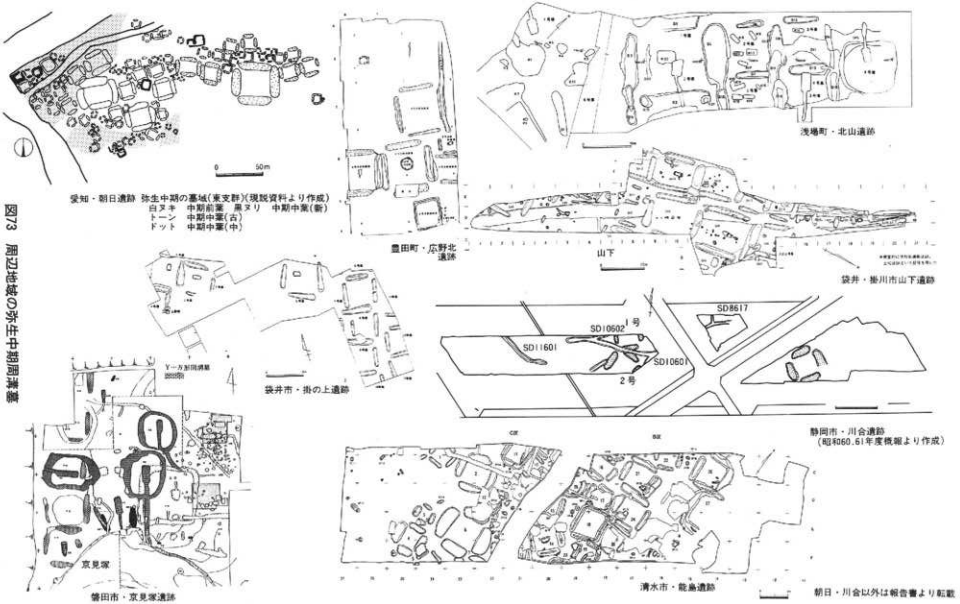


図73 周辺地域の弥生中期周溝墓

の群構成とか、新たな墓域の成立といった展開を示すと考えられる。能島遺跡を除き、図示した広野北、山下、掛の上、京見塚、北山といった方形周溝墓群のみられる遺跡においては、別形態のものは後期とされている。後期の墓域は集落との明確な区別がなく、かつ群としてのまとまりをももたず散在する傾向がある。従って中期とは一様な基準で論じられない。しかし、先にあげた各遺跡は小区域での調査であり、なかでも比較的広範囲の調査例である山下遺跡でも、群構成の検討が可能といえる程度の状況である。今後の調査例の増加を期待したい。尚、形態が東海系とは異なるものとして、磐田市馬坂遺跡（嶺田式・中期中葉）と掛川市愛野向山遺跡（中期後半～後期初頭）の例がある。前者は２基ともに約半分を調査し、東海系と思われるものと、もう１基はコーナーが切れる溝と、連続する溝の２つのコーナー部分が検出されている。後者は中期後半～後期初頭と報告され、丘陵縁に立地する方形周溝墓か台状墓といわれるもので、数個所で切れるものらしい。両者ともに、２基と１基の検出例のため、一応紹介程度としたい。しかし遠江地域でも能島遺跡のような周溝墓の形態の多様性は充分に推定されることであり、先の２遺跡の例は今後ともに検討してゆくべきと考える。

最後に能島遺跡での平面形態の特徴として、今までも指摘してきたが、１・３グループで顕著に認められるものに、溝の外側が大きく張り出し、長さに比較して巾が広い太い溝の形態がある。これは、図示した静岡市川合遺跡でも認められ、朝日遺跡の形態と酷似している。しかし、静岡県内では山下、掛の上、広野北遺跡のように、巾の狭い細い溝が一般的といえる。この傾向は最近調査された三島市上舞台遺跡、神奈川県綾勝土遺跡にも認められ、東海地方から関東地方までみても細い溝の形態が普遍性をもっている。このような現象は静清平野の特徴という極論は控えるが、朝日遺跡に類似する形態の例として注目される。朝日遺跡と能島遺跡との関係は、次に述べる配置の特徴にも現れるため、そこでのまとめに含めて論じたい。

・周溝墓の配置

周溝墓は群を形成することが一般的であり、造墓集団相互の動向が、群構成及び個々の周溝墓の配置に反映しているものと推定される。配置の関係は先に、近接、重複、共有の三者が認められると指摘した。これは最近の研究のなかで分析の要素のなかに、連接式・連結式（石黒　1987）、また平面形態と配置の関係で、共有と接近度をとりあげた論考（前田　1987）もあり、群構成のなかでの周溝墓相互の関係は、形態とか配置に顕著に現れるものと推定される。

先にあげた配置は溝の位置関係からみたものであり、三者を整理すると以下のようになる。

近接・相互に近接するが切り合い関係は持たないもの。

重複・溝が相互に切り合うもの。

共有・異なる周溝墓が１本の溝を共有するもの。

朝日遺跡においては、石黒氏のいう連接式（註１）が主体を占め、僅かに墓域Ａのａ１群が溝を重複させる。このことは山下遺跡にも共通すると指摘されている。一方、このような朝日遺跡に対し、図示した静岡県の例では、広野北（重複、近接）、京見塚（共有）、山下（共有）、北山（共有）、掛の上（共有）、川合（近接か）、能島（近接、重複）となる。

このように静岡県内での周溝墓の配置は圧倒的に共有するものが多く、共有のタイプの共通点は同規模の周溝墓が同一方向に並び、墓道と考えられる帯状の空間をもつことであり、山下遺跡に顕著に認められる。東の横浜市歳勝土遺跡では、近接と重複とが認められ、山下遺跡のように整然とした配置ではないが、かなり規則的な配置がうかがえる。基本的には同規模の周溝墓を一定の範囲をもつ墓域に配置する場合、重複か共有のタイプが最も合理的であることが首肯されよう。

以上述べてきたなかで能島遺跡の周溝墓群の特徴がいくつかあげられた。それは、東海系の形態のなかに後出ではあるが畿内系のものが入ること、配置について、東海地域のなかでは共有するものが

多いのに対し、近接・重複であり、共有は存在しないことである。結果的には形態は溝太く、規模の差が現れる近接と、同一規模のものが並ぶ重複の配置がされ、さらに中期の巾のなかで形態の変化をとげている点が大きな特徴として上げられる。

東海系の周溝墓が東進してゆく過程で溝を共有させる（註２）というような変化をするなかでの能島での在り方は極めて朝日遺跡に類似し、畿内系の伝播も周辺より早い段階で行われたといえる。朝日遺跡は弥生文化東進の一大拠点であり、このような役割、機能をもった拠点集落は平野単位、また水系単位に存在し、地域の中心であるとともに東への波及の拠点でもあったと考えられる。

能島での造墓集団の集落はどこか、現在のところ確定的な推定はできていない。本遺跡は丘陵からの扇状地というような居住の適地ではなく、洪水等の水害にあえば周囲とは孤立する沖積平野の中央にある。従って、この周辺の南、北の扇状地形に集落が立地すると考えられる。候補地としては、原添、殿屋敷、石川といった遺跡であるが、最近静清バイパス関係の調査、また静岡市、清水市教委による低湿地での調査例が増加しておりこれらの検討を経るなかで考えてゆきたい。

弥生土器は中期後半に位置付けられ、なおこれらは前後する時期を含んでいないと思われる。現在、資料の増加がみられ、編年を中心とした研究も進められてゆくであろう。

第３節　平安～鎌倉時代の能島遺跡

１）はじめに

能島遺跡出土の平安時代の土器類を分布圏の広いものと、在地の土器とに整理すると以下のようになる。Ａ区の土器類は基本的には河川によって動かされたものである。しかし、これらはＢ区から投棄されたという可能性も残され、砂堆上との何等かの関連性は全く否定できない。かつ数㎞といった上流から運ばれてきたとも言えないため、関連する土器としてここでの検討のなかに含めて考えていくこととする。

・在地の土器群

土師器　坏―駿東型といわれるもの（坏２）。
　　塊―駿東型の坏、甕に伴うもの（塊の前者としたもの）。

・広域分布を示す土器群

灰釉陶器　猿投窯産と静岡県内の窯の製品（清ケ谷窯産か？）
緑釉陶器　近江産を含む貼付高台の軟陶（Ａ区出土）。
山茶碗　古手の様相をもっているが産地は不明。
陶器　山茶碗に併行するもの（Ａ・Ｄ区出土）。
輸入磁器　中国産の青磁、白磁（Ａ区出土）。
土師器　坏―甲斐型坏、分布は甲斐を中心に信濃・駿河・相模と、西では遠江、東では武蔵にごく少量の出土がみられる。
　　甕―清郷型といわれる甕（甕１）、分布は尾張、伊勢～駿河。
　　甲斐型の甕（甕２）、分布は坏に類似するが、範囲は狭い。駿河の一部に出土がみられる。
　　塊―伊勢型といわれるもの（塊の後者としたもの）、分布は伊勢、尾張～駿河と鎌倉に出土している。

以上のように分布からみた土器類の傾向がまとめられる。全体として灰釉陶器、山茶碗を除いて、土器の出土量が少ないが、これから導きだせる土器様相を整理し周辺の遺跡と比較するなかで本遺跡の性格を検討してみたい。

2）在地の土師器及び、商品として流通した灰釉、緑釉、山茶碗、陶器、磁器について

在地の土器は言うまでもなく、商品として交易の対象となった土器群の分布は、需要と供給の関係が成立する地域に広がっていることは当然のことである。またこれらのなかで、遺跡の性格との関連で問題とされるのは、猿投窯産の初期の灰釉陶器を出土する遺跡が公的性格をもつこと、また緑釉についても同様な指摘がされるが、灰釉陶器の生産が猿投窯から拡散し、各地に窯が成立する段階になると灰釉、緑釉＝公的機関という図式が明確にいえなくなる。静岡県内においても、東部地域の出土量は少ないが、該当する時期の遺跡から黒笹90号窯併行期、及びそれ以降の灰釉陶器の出土は一般的に認められる。

これらの事実は公的性格の強弱でなく、需要を支える経済的な力の強弱と供給力の問題として位置付けられるのではないか。静岡県東部地域に分布が希薄であるとしても、更に東の相模地域の平塚市四ノ宮高林寺、下郷遺跡とか、武蔵では日野市落川遺跡に豊富な交易による土器群が認められる。すなわちこのことは、距離の遠近でなく、生産地の供給能力と消費地の経済力の強弱により決定されるものと考えられる。それは古代律令制の解体過程のなかで、在地の有力者層を中心とする地方経済の高まりを反映するものであると見てよいであろう。これらの土器群は、静岡市宮下、内荒遺跡（駿河国安倍郡衙）とか、袋井市・掛川市に広がる坂尻、原川、梅橋北遺跡（遠江国佐野郡衙）といった郡衙推定地といわれる遺跡からも出土している。これは、奈良時代から平安時代初期までのような公的機関を示す遺跡としてより、律令制の郡衙機構解体後も、地域において政治・経済的な中心として存続したことの証であるといえる。逆に周辺の地域に中心が移動したと推定されるのが、奈良時代～平安時代初期でほぼ終息する藤枝市御子ケ谷遺跡（駿河国志太郡衙）である。

本遺跡はこれらの交易ルートに乗った土器類の豊富なバラエティの存在が大きな特徴であり、土器の出土量は少ないが、あえていえば古代律令制が機能していた段階からの土器として、A区の奈良時代の須恵器とB区の黒笹14号窯式の灰釉陶器が出土し、灰釉の一部は土坑に伴っている。これをもって公的性格とは判断できないが、遺構、遺物の主体を占める次段階の幕明けとしての意義は少なくないと考えられる。

3）広域的な分布をもつ土師器群について

先にあげたように本遺跡では、甲斐を分布の中心とする坏・甕、尾張・三河を中心とする甕、伊勢～遠江に分布の中心をもつ鍋が出土している。筆者はかって掛川市梅橋北遺跡報告書（平野・佐野・佐藤、1988）のなかで、広域分布をもつ清郷型甕について若干触れたことがある。基本的な視点はそれを踏襲する形となるが、これらの土器群についての検討を行いたい。

梅橋北遺跡のなかで、清郷型の甕は商品として流通したものでなく、水上交通に密接な関連をもつものと位置づけた。煮沸形態の土器は常設のカマド、置きカマド、炉、五徳といった加熱の方法と密接な関連をもち、さらにそれは家屋構造にも影響する。従ってその土地の生活習慣そのものの反映であり、習慣の異なる他の土地にも通用する供膳形態の土器とは性格を異にしている。従って極めて在地色の強い土器であり、広域的に通用する商品にはならないと判断される。

このような視点にたって本遺跡の煮沸形態の土器群をながめると、甲斐型の甕、清郷型甕、伊勢型鍋の存在が注目される。これらの土器の周辺地域での様相を整理してみる。

≪甲斐型甕≫　基本的には、坏と大碗、皿、甕の組み合わせをもっている。供膳形態は県東部から西は静岡市宮下、内荒遺跡に分布するが、一方甕は現在確認される遺跡は極端に少なく、富士川流域の庵原郡富士川町浅間林、富士市舟久保遺跡と本遺跡等が認められるにすぎない。舟久保遺跡（註3）は現在整理途中であるが浅間林遺跡とともに、この甕は比較的安定した出土量を示し、在地の甕との量的な通色はないものといえる。この2遺跡より離れた地域で甕が出土するのは清水市飯田遺跡（中

西、大川　1984）と能島遺跡である。

≪清郷型甕≫　この周辺では、西から出土遺跡名をあげると、藤枝市御子ケ谷、静岡市宮下・内荒、清水市飯田・能島、富士川町浅間林、沼津市長井崎から出土し、現在報告書等で確認される東端は長井崎である。中心地域である愛知県の分布は明確に把握していないが、静岡県内では、清郷型甕は在地甕に混入し、一遺跡での出土数が数点と少なく、分布は海岸に面した遺跡または、平野部の中小河川に接した遺跡から出土するという分布の特徴をもっている。

≪伊勢型塝≫　時期的には山茶碗に伴うもので、清郷型甕の分布圏を踏襲し、更に鎌倉までの分布圏をもつようになる。遠江地域においては、日常的に使用が一般化していたようであり、都田川流域の細江町祝田遺跡、掛川市原川遺跡では、多量に出土している。しかし、それ以東では分布はあまりみられない。静清平野での出土例としては、本遺跡が初例である。

このように出土の概要が整理される。では商品でなくとも広域的な分布をもつこれらの土器は、どのように理解されるのか。それは甲斐型については検討の余地は残されるが、清郷型・伊勢型については同様な分布を示し、同者ともに内陸の遺跡からの出土はないことも併せて、物資の流通経路のなかで、水上交通に携わった人々により持ち込まれたものと理解したい。それの分布する遺跡は物資の集積地、中継基地として、及び風待ちとか天候が回復するまで待機する「津」の機能をもった性格であろうと考えられる。尚、甲斐型についても、富士川とか駿河湾を介在とする水上交通体系に乗って搬入されたものと推定される。細部の遺跡の検討は経ていないが、広域的な分布をもつ煮沸形態の土師器からこのような事柄が導き出せるのではないかという方向を示した。

4）まとめ

本遺跡の平安時代～鎌倉時代の性格ということで、土器群の傾向を検討してきた。立地の特徴をも加味して、結果として「津」のような機能をもった遺跡の性格が導き出された。遺構の在り方から敢えていえば、建物は恒常的な使用に堪えるようなものでないため貧弱であり、井戸が多く、畑状のものが認められる等も、「津」としての水と食糧の補給という側面を表したものでないかと推定される。類例に乏しいため考え方の巾を拡大し、可能性の枠を広げるなかで、その一視点として提示してみた。

尚、特論のなかの、加藤氏の分析によれば、A区は鎌倉時代において、大きく蛇行する部分との指摘がされており、流力が弱まる位置とも考えられ、小型の舟等を扱い易い条件を備えていた地点との推定も大過ないであろう。

おわりに

静清バイパス（能島地区）にかかわる能島遺跡の調査は、昭和60～63年度の4年間に及んだ。今本報告書の発刊をみてすべて終了した。発掘は現在までの成果にたっての、疑問点を追及しそれを解決することであり、かつまた新たな問題点、疑問点に突き当たる。本調査のなかでどれだけの問題があり、どれだけ消化したか。今後の調査研究のなかで検討してゆきたい。

整理報告段階で、出土遺物の資料化の遅れを痛感した。新たな認識には新たな視点とより多くの資料を必要とする。調査資料の早期資料化は、文化財保護、活用、また地域史研究のうえでも不可欠の要素である。

最後に今まで調査に対し、試掘の資料を提供された清水市教育委員会、石斧の出土状態等の聞き取り調査に協力頂いた望月金一氏をはじめ、様々な形で協力、指導、助言を載いた方々に感謝申し上げ、下記に整理作業、本報告書作成に従事した整理作業員の方々をあげて終わりとする。

岩辺友子、岩辺芳江、佐々木富士子、高田雅己
中川里美、望月道江、望月恵美

註1　石黒立人氏は「マージナルNo.7　1987・10」のなかで、連結式、連接式の二者で配置の在り方を分析している。方形周溝墓は溝の遺存状況の差が、検出段階の形態の相違に反映されるという状態が考えられる。例えば、コーナー部が浅く本来連続する溝が、検出段階では別々の溝として認識されるといった事柄である。しかし、今回の検討にあたっては検出時の所見を第一とした。また、周溝墓の配置関係は、近接・重複・共有の三者としたのは、各々のグループの相違とともに、同一グループ内での個々の関係を検討する指標として、三者の配置の類型を考えた。しかし、これ以上の根拠はなく、あくまで便宜的な分類である。

註2　溝を共有させるのは四隅を切る形態のみならず、また時期、地域的な限定はなく、一般的に方形周溝墓に認められる配置関係である。従って、四隅を切るタイプの造墓集団内での変化は勿論、別系統の造墓集団の介在をもあわせて考える必要がある。

註3　富士市今泉に所在する遺跡で、奈良時代以降明確でなかった駿東型甕の存在が、共伴する他の土師器、灰釉陶器を伴って出土した。このなかに、甲斐型の甕の良好な資料が含まれている。

第Ⅵ章　特　　論

第１節　能島遺跡の礫層の地質学的検討

静岡大学名誉教授　加藤芳朗

1. まえがき

国道１号線バイパス工事に伴う発掘調査で出土した礫層の堆積状態や供給源を知る目的で地質学的調査を行った。

図１は清水市下野遺跡（Ｂ地区）の調査の際、筆者が、門村（1964）に基づいて作成した微地形図に、今回新たに、本遺跡の調査区を記入したものである（加藤、1985）。図の地点１、２が問題の礫層の出土する位置である。地点１（発掘区Ａ）は明治時代（現河川改修以前）の巴川の旧流路に接近し、地点２（発掘区Ｃ、または清水市の1984年度試掘調査のＮos.７，８Ｇ＜グリッド＞）は能島部落ののる砂堆上にある（静岡県埋蔵文化財調査研究所1986）。

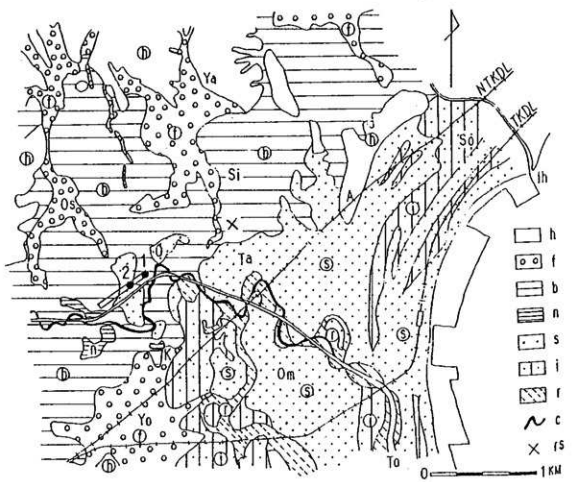


図１　遺跡周辺の微地形図（門村，1966を簡略化）

h　丘陵，山地，段丘　f　扇状地，天井川　b　後背低地　n　自然堤防
s　砂堆（砂州）　i　砂州列間低地　r　旧河床　c　巴川の旧河道　rs　下野遺跡
A　秋葉山　Ih　庵原川　K　北脇　O　大内新田　Om　大曲　Os　押切　Si　下野
So　袖師　Ta　高橋　To　巴川　Yo　吉川　ＴＫＤＬ　東海道線
ＮＴＫＤＬ　新幹線　　（加藤，1985より）

2. A区（地点1）の砂礫層

図2Aでb層としたものは、図の左側の微高地を構成する粘土、シルト、砂層を深く切り込んだ不整合（u）の直上に堆積した砂礫層（発掘担当者の黄褐色砂礫層）である。この上位は特徴を異にする多数の砂層群（一部礫層）よりなり、これらを一括して、ここではa層と名付けることとする。a層のうち、左半分の点線より上とa層全体の上位とには粘土層がくる。

(1) 砂、礫層のクロスラミナ

a）傾斜方位の測定

クロスラミナ（斜交層理）とは、図3Aの点線模様のように、地層（実線で狭まれた部分）の内部にあって上下の境界（実線、地層面）とは異なる傾きをなす縞模様のことである。このでき方は、同図Bに示したように、一団の砂や礫が水によって運ばれてくるとき、下流側に勾配をもちながら移動する。すなわち、すでに堆積した層（左側のカッコでくくった部分）の上面を転がってくる砂、礫が勾配の前面に転落してそこで静止する。これをつぎつぎにくり返すと、勾配に平行した斜めの層が、あたかも、本を傾けて重ねるようにできあがっていく。これがクロスラミナである。その傾斜の緩急は砂、礫の大きさや形、水流の速さなどによって決まる。ここで大事なのは、傾斜の向きが水流の方向と一致することである。クリノメーター（傾斜儀）を用いて傾斜の向きを測定すれば、砂、礫を運んできた水流の方向を推定できる。

b）測定結果

この原理にもとづいて、図2Aのa、b層内に認められるクロスラミナにつき、多数の測点で傾斜の向きを測定した。その結果を同図B、Cに掲げてある。矢印（傾斜の向き）がばらつくのは、測定誤差の他に、図3Bのような堆積ユニットが、流れの方向を異にして、多数複合しているためと考えられる。a層の矢印は、左半の4測点（北西ないし北東向きに揃う）を除くと、方向がかなりばらついている。これに対して、b層の矢印はかなり揃っており、ほとんどが西～北の間にはいり、北西方向に頻度の極大がある。

c）測定値の水理学的意義　A区は、明治時代の巴川流路が北流から右（東）に大きく蛇行しようとする部分の外側に位置する。図2Aの不整合面(u)は水流が微高地の側面を激しく削りこんだことを示す。その直ぐ上に堆積する黄褐色砂礫層（b層）のクロスラミナによる流向が北西を中心としていることから、水流は明治時代の巴川流路の外側を大きく回りこんでいたものと思われる。上記の削り込みは、蛇行の外側で水流のぶつかる部分（攻撃斜面）に生じたのであろう。b層の左端部の点線より左は、同層を削り込んだ後に堆積した暗灰色砂層（V層）で、b層堆積後、蛇行がさらに西側にずれたことを物語る。

a層の下層には小さな掘り込み（えぐり）が3つ認められる。一番左は上記V層の堆積後の流れによるもので、直上の砂層はそれに伴って生成したと考えられる。そのクロスラミナによる流向は、概述のように、北西～北東を指し、蛇行の位置がひきつづいてここにあったことが推定される。しかし、水流の勢いはこの砂層の堆積時には、すでに弱まりつつあり、それより上（点線より上）は粘土層（灰黄褐色粘土＜Ⅳ層＞）となる。これは、流れが変わった後も残った流路上に水溜まり(河跡湖、三日月湖）が生じたことを示すものであろう。そのほかのa層の部分はクロスラミナによる流向の変化の激しい砂層からなり、b層堆積の終り頃から、蛇行の内側（滑走斜面）の、流れの緩やかな部分に堆積したものであろう。

以上をまとめると、a、b層は旧巴川の蛇行部の外側から内側にかけての堆積の始めから終りまでを示すと解することができよう。

(2) 礫の円磨度、岩質組成の比較検討

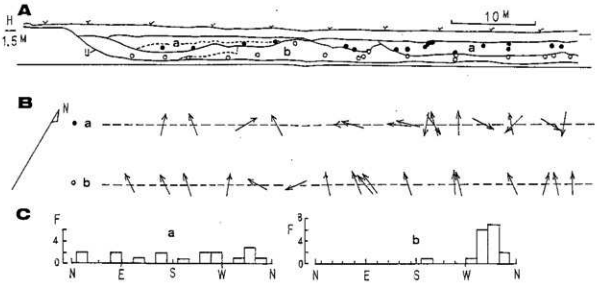


図2　A区の黄褐色砂礫層（b）と上位の砂層群（a）のクロスラミナの傾斜方向
A．北壁の土層断面（発掘担当者の原図を簡略化）
B．各測点（• ∘）におけるクロスラミナの傾斜方向（矢印）
C．a，b層別のクロスラミナ傾斜方向の方位別頻度数（F）

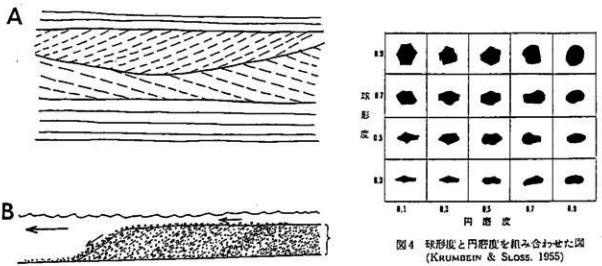


図3　クロスラミナとその生成
A．クロスラミナ（点線模様）
B．クロスラミナ生成の過程　小矢印　砂，礫の運搬移動方向
大矢印　水流の方向

図4　球形度と円磨度を組み合わせた図
（Krumbein & Sloss, 1955）
立石他，1983より

上に旧巴川と記したが，これをいうためには，礫が上流側の巴川のそれと同じであることを検証しなければならない。

a）試料　A区の黄褐色砂礫層の他に、巴川の礫として、より上流側の能島13G、瀬名406N、北西山地からの小河川礫（石川４G）、南方の日本平からの河川礫（谷津沢川１，２）も参考試料としてもちいた。日本平のものは発掘担当者によって採集された。これらは水洗、風乾し、ふるい分けによって粒径16～32㎜を得、測定対象試料とした。

b）円磨度　上流で岩石が割れたばかりのときは角張っているが、下流に運ばれるに従って、たがいにぶつかりあって、稜に丸みがでてくる。その程度を円磨度(R)という数値で現す方法がある。測定には、図４のような標準図形と見比べて値を決める簡便法が広く使われている。ここでは、図４の５クラス(0.9－0.1)のほかにそれらの中間値である、0.2－0.8等と1.0の５クラスを追加した。各試料とも50―70ケの礫についてクラスのあてはめを行い、それらの頻度グラフ作り加重平均を求めた（図５－１）。

能島Ａ区（同図ｄ）は瀬名406Ｎ(ｅ)、能島13G(f)と似た頻度グラフ、加重平均を示す。谷津沢川１、２(ｂ，ｃ)とも似ているが、石川４G(g)とはかなりちがう。いずれも運搬距離が短いにもかかわらず、谷津沢川試料が石川試料より円磨度が大きいのは、日本平の礫層（古安倍川の運搬物）の二次堆積であるためである。

c）岩質組成　図５－２，ｄのＡ区黄褐色砂礫層の礫の岩質組成は、ｂ，ｃの日本平系とe，ｆの巴川（長尾川）系の礫の特徴を合せ持っているとみることができる。前者と似ている点は珪質岩が多いこと、図示してないが、砂岩がグレイワッケ型（砂粒間を細粒物質が充填するタイプ、安倍川水系の瀬戸川層群に多い）を主とすることである。また、後者と似ている点は、安山岩、流紋岩など火成岩がやや多いことである。珪質岩が異常に多いことを除けば、Ａ区の黄褐色砂礫層は両系統の河川礫の混合とみてよいだろう。この推論は、円磨度の値が互いに似ていることからもうち付けられよう。日本平系の河川は、流域の地質が軟弱な礫層からなるため、礫の生産力が高い。これらの川が小規模流域にもかかわらず、巴川の礫の岩質に大きな影響を与えているのは、おそらくそのためであろう。

なお北西山地からの礫（石川４G、図５－２，ｇ）は砂岩が圧倒的に多く、Ａ区の礫とは明らかにちがう。

3.　7G（地点２）の礫層

この礫層は能島部落の位置する微高地（砂堆と推定される、門村、1966）にあること、しかも、よく成層し、礫が碁石のように平たくて丸い形をしていて、海浜（波打際の）礫の特徴とよく一致することが注目される。なぜ、海からはなれた、こんな場所にあるのか、その礫はどこから来たのか。この疑問について考察を行った。

(1)　円磨度

図５－１、ａのように、円磨度は他のものとくらべて約0.1以上大きく、礫が丸い形をしているという、現地の観察をうら付ける。

(2)　岩質組成

図５－２に示したように、能島７Gの礫(a)は日本平系の河川、とくに谷津沢川１(b)に似ている。砂岩がともにグレイワッケ型を主とすることを考え合わせると、７Gの礫は日本平系の河川から供給されたという可能性が高い。

(3)　生成環境

７Gの礫の供給に直接関係したのが、馬走から流出する川（馬走川）らしいことは、微高地の伸び

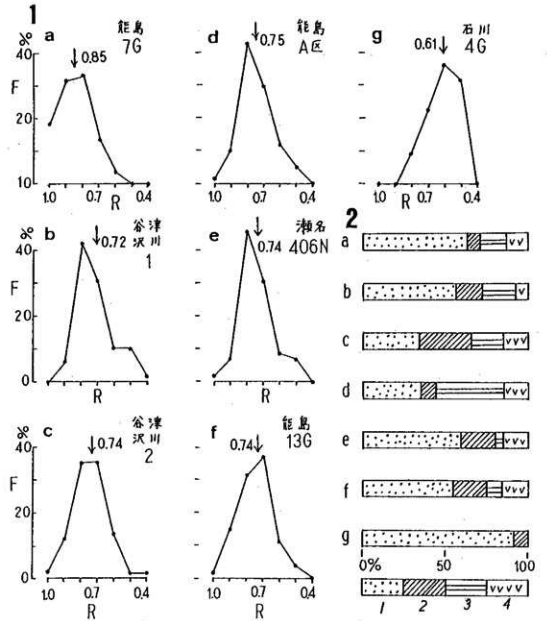


図 5　礫（16—32mm）の円磨度と岩質組成
1．円磨度（R）と頻度（F），矢印は円磨度の加重平均の位置
2．岩質組成（礫数%）1.砂岩，2.泥岩・シルト岩，3.珪質岩，4.火成岩

る方向と同川ぞいの等高線の張り出しの方向が一致することからも類堆される。礫を円磨するのは打ち寄せる波の揺動作用であるから、強い波が発生しやすい大きな水域が馬走川の礫の堆積域と接していることが必要である。これが満足されると、水域に押出された礫は、波によって運ばれながら円磨されることになる。上記微高地はこのようにして形成された（砂）礫州の一種であろうと思われる。

大きな水域の存在した可能性の最も高いのは縄文海進時であろう。このとき入江が巴川中下流平野一帯を占めたことが地下の地質に記録されている。清水市の1984年度のグリット調査でも、能島微高地を挟んだ東西のグリット（1G、9—11G）の海抜－1m～－2mの砂やシルト層から多くの内湾棲の貝殻が出土した。静岡大土隆一教授の鑑定では、東側の1Gの貝は、浜名湖弁天島のような潮間帯砂地にすむ種類であり、西側の9—11Gのそれは、泥質な、やや低塩分の水底にすむ種類が多いとのことである。微高地を挟んで東西がこのように違うのは、微高地が内湾をさえぎる（砂）礫州として存在していたと考えれば、うまく説明される。

文　献

門村　浩（1966）静清地域の地盤と防災上の問題点、静清地域および周辺地域の防災上の諸問題。『1965年度静岡県防災地学調査報告書』p.7—30、静岡県消防防災課。

加藤　芳朗（1985）清水市下野遺跡（B地区）の遺物包含層をめぐる地質学的検討。『下野遺跡』、p.152～156、清水市教育委員会他

静岡県埋蔵文化財調査研究所（1986）『能島遺跡』、昭和60年度発掘調査概報。

立石雅昭・徐　垣（1983）礫・礫岩。『堆積物の研究法』、p.103—150、地学団体研究会

第2節　清水市能島遺跡出土人骨について

国立科学博物館　山口　敏

人骨は縄文時代から鎌倉時代にわたる遺物を包含する河川跡の砂礫層で出土した成人と幼児の頭蓋各1点である。いずれも脳頭蓋のみで、顔面頭蓋や体幹体肢骨は全く保存されていない。(図版4参照)

1・成人頭蓋

脳頭蓋の後半部を構成する後頭骨と左右の頭頂骨が保存されているが、左の頭頂骨・側頭は破損している。出土の時点では原形がかなりよく保たれていたが、乾燥にともなってひずみを生じたため、計測できる部位はごく少ない。

全体として大きさがはなはだ大きく、乳様突起や乳突状稜も強く発達している。矢状縫合と人字縫合は内外板ともに全く閉鎖していない。これらの所見からこの個体は壮年の男性と推測される。

計測のできる唯一の項目である正中矢状弧長は138㎜である。この値は現代関東地方人男性平均、125.1ばかりでなく、鎌倉時代人男性平均値129.4をも大きく上回っている。

右側の人字縫合に縫合骨がみられるが、インカ骨やラムダ骨のような破格はない。大後頭孔前縁は正常形、舌下神経骨も左右とも二分しない。左右の外耳道にも骨腫や裂孔は認められない。

2・幼児頭蓋

頭蓋冠と左の側頭骨岩様部が保存されているが、ひずみがあるため全形の復元は困難である。おもな計測値は次のとおりである。

最大前頭幅	79（㎜）
正中矢状前頭弧長	113
正中矢状前頭弦長	100
正中矢状頭頂弧長	100

これらの計測値や側頭骨鱗体の大きさなどから判断して、年齢はおよそ4歳ないし6歳と推測される。前頭縫合、インカ骨、主縫合の縫合骨などの破格はない。前頭結節が著しく、後頭鱗は矢状方向に強く湾曲し、後方への膨隆を示す。眉間は低く、眉弓はほとんど認められない。眼窩上縁の神経孔は右側だけにあり、左では切痕となっている。

考察

両側とも顔面骨格が失われており、頭蓋長幅示数も求められないため、形態からみた時代的特質についての手掛かりが全くえられない。強いてあげれば幼児頭蓋の後頭鱗の矢状輪郭の形に、中世日本人の平均的な形態との類似が認められるという程度である。

第3節　樹種鑑定報告書

（財）元興寺文化財研究所

樹種鑑定の概要について

1・切片作成

切片の作成に当たっては、できるだけ遺物のオリジナルな面を傷つけないように遺物の破損面などから木口・柾目・板目面の三方向の切片をカミソリの刃を用いて直接に作成した。この際、作成した切片の各面が正確に切れているかを顕微鏡により確認しながら行った。

2・同　定

樹種の同定は、作成した切片の内部形態を光学顕微鏡を用いて針葉樹については樹脂道、樹脂細胞の有無、分野壁孔の形態、ラセン肥厚の有無などを、広葉樹については道管の配列状態、穿孔の形態、放射柔組織の形態などを観察し現生材の内部形態の特徴と比較することにより行った。

また、この際同定に極めて微細な内部形態的特徴を観察する必要のある遺物については切片を永久プレパラートに仕上げた後に観察を行った。

No.	遺物名	樹種
1	下　駄 (A)	ス　　ギ
2	下　駄 (B)	シロダモ？
3	田下駄	ス　　ギ
4	鍬　先	Quercus属（切片作成困難）
5	卒塔婆	エノキ

参考文献

内藤　晃『古代の郷土一清水市郷土資料展覧会目録』清水市郷土研究会　1962

土　隆一「静岡・清水平野の地形・地質について」『竹原教授記念論文集』1971

小宮　恒雄他『歳勝土遺跡』港北ニュウタウン地域内埋蔵文化財報告Ⅴ　横浜市埋蔵文化財調査委員会　1975

佐藤　秀作「殿屋敷遺跡出土の土器について一弥生中期の新資料」『鏡』創刊号　清水郷土研究鏡の会　1977

鈴木　裕篤・杉山　治夫・関野　哲夫『長井崎遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会　1980

柴田　稔・木野　美鈴『新豊院山遺跡（A－2・3地点）』磐田市教育委員会　1980

佐野五十三『浅間林遺跡発掘調査概報』富士川町教育委員会　1981

愛知県教育委員会『朝日遺跡』1982

瀬川裕市郎・平林将信・志村博「東駿河地域」『シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川考古同人会　1983

松井　一明『掛の上遺跡Ⅱ』袋井市教育委員会　1983

松井　一明・松本　一男・前田　庄一『山下遺跡』掛川市・袋井市教育委員会　1984・3

中西　道行・大川　敬夫・杉山　功・佐藤　秀作『太田切遺跡・飯田遺跡』清水市教育委員会　1984

新田　洋「平安時代～中世における煮炊用具一伊勢型鍋一に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1　1984

中西　道行・大川　敬夫・新井　正樹・佐藤　秀作『下野遺跡』清水市教育委員会　1984

加藤　芳朗「清水市下野遺跡（B地区）の包含層をめぐる地質学的検討」『下野遺跡』清水市教育委員会　1985

堀田　良雄・山田　元広他『広野北遺跡発掘調査報告書』豊田町教育委員会　1985

斎藤　嘉彦「三河地方における方形周溝墓の新例」『知多古文化研究』2　1986

平野　吾郎・山田　成洋『川合遺跡』昭和60・61年度静清バイパス（川合地区）埋蔵文化財発掘調査概報　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1986

静岡県考古学会『灰釉陶器の時代とその流通』1986・シンポジウム　1986・12

柴田　稔『北山遺跡』浅羽町教育委員会　1987・3

前田　清彦「方形周溝墓平面形態の考察」『金大考古』第14号　金沢大学文学部考古学研究室　1987・7

石黒　立人「研究ノート・伊勢湾周辺における方形周溝墓出現期の様相」『マージナル』№7　愛知考古学談話会　1987・10

渋谷・昌彦・坂巻　隆一・太田　直樹・森永　明美『東山古墳群北支群』島田市教育委員会　1988

第9回　三県シンポジウム『東日本の弥生墓制一再葬墓と方形周溝墓』北武蔵古代文化研究会他　1988

栗野　克己・足立　順司他『長崎遺跡』昭和62年度静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査概報　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988

平野　吾郎・佐野五十三・佐藤　正知『梅橋北遺跡』㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1988

能　島　遺　跡
（本文編）

昭和60～63年度静清バイパス（能島地区）
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年３月31日

編集発行　財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所　株式会社　三　創
静岡市中村町166番地の1
TEL（0542）82－4031